

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い

～第39回公民館研究集会・令和5年度地域づくり市民活動研究集会～

記 録 集

日 時 令和6年2月18日(日)

会 場 松本市中央公民館(Mウイング)他

主催 松本市・松本市教育委員会・松本市地域づくり研究連絡会

主管 未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会

目 次

全体資料

開催要項	1
------	---

全体会

基調講演	3
------	---

「ふるさと」をつくる公民館

～松本市町内公民館調査からみる公民館の新たな可能性～

分科会

第1分科会	【こども・若者】	77
	地域と若者	
	～みんなが参加したい、 参加してよかったと思える地域づくり～	
第2分科会	【おやこ】	87
	おやこのみなさん、公民館へようこそ！	
第3分科会	【担い手不足】	96
	担い手人材はどこにいる？	
	～新たな担い手とつながるために～	
第4分科会	【町内公民館】	101
	つながる・つなげる、松本らしい“つどいの場”	
	～地域づくりの事例から～	
第5分科会	【居場所づくり】	124
	新たな視点から考える地域づくり	

実践事例の掘り起こし

実践事例の掘り起こし一覧表	129
---------------	-----

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い

～第39回松本市公民館研究集会・令和5年度松本市地域づくり市民活動研究集会～

開催要項

1 趣 旨

社会経済環境の急速な変化や人々の価値観、生活スタイルの多様化等を背景に、地域はいま、様々な困難に直面しています。

本集会は、こうした状況を乗り越えるため、各地で取組みを展開する住民・職員が一堂に会し、身近な地域や生活・暮らしの課題について共に考え、互いに学びあうことで“気づき”や“つながり”を持ち帰り、再び地域の実践に生かしていくことを目的として開催するものです。

2 期 日 令和6年2月18日（日）※1日開催

3 会 場 松本市中央公民館（Mウイング）他
（松本市中央1-18-1 電話:32-1132/FAX:37-1153）
※ 第2分科会：芳川地区みなみ福祉ひろば（イオンタウン松本村井2階）
（松本市村井町南2-21-45）
第5分科会：Creative Art Village Aida ムム（松本市会田77-1）

4 主 催 松本市、松本市教育委員会、松本市地域づくり研究連絡会

5 主 管 未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会

6 日 程

9:00	9:30～9:45	9:45～11:50	11:50～13:00	13:00～16:30
受付	開会式	全体会	昼食	分科会

7 開催内容

(1) 開会式

(2) 全体会(基調講演)

ア 演 題 「ふるさと」をつくる公民館～松本市町内公民館調査からみる公民館の新たな可能性～

イ 講 師 牧野 篤 氏（東京大学大学院教育学研究科教授）

ウ 内 容

社会教育は、これまでのような学校教育を主流とする社会において、学校教育との対比において定義される営みではなく、むしろ、これからの社会の基盤である人々のかかわり

を耕しておく、社会にとってなくてはならない営みであると定義され直したのです。そして、この社会基盤をつくる営みである社会教育の基盤となる施設が公民館です。しかも、公民館はいわゆる条例公民館だけでなく、草の根の地域社会に根ざした自治公民館（町会公民館）が各地につくられ、社会づくりに力を発揮してきました。

コロナ禍後の新しい社会づくりに果たす公民館の役割と可能性を、みなさんとともに考えたいと思います。

(3) 分科会

	分科会テーマ
第1分科会	【こども・若者】地域と若者 ～みんなが参加したい、参加してよかったと思える地域づくり～
第2分科会	【おやこ】おやこのみなさん、公民館へようこそ！
第3分科会	【担い手不足】担い手人材はどこにいる？ 新たな担い手とつながるために
第4分科会	【町内公民館】つながる・つなげる、松本らしい“つどいの場” ～地域づくりの事例から～
第5分科会	【居場所づくり】新たな視点から考える地域づくり

8 集会の配信について

集会の模様は、後日編集後 YouTube にて配信予定です。

9 参加申込について

2月9日（金）までに、専用フォーム（LoGo フォーム）へお申し込みいただくか、最寄りの地区公民館または集会事務局（中央公民館）へメール、電話、FAX、窓口でお申し込みください。

※ 申込み時の確認内容：氏名／住所／電話番号／参加希望分科会

※ 手話通訳、要約筆記通訳、託児保育が必要な方は参加申込み前にご相談ください。

※ 第5分科会希望の場合は、和田公民館(0263-48-5445)へ申し込みください。

【集会事務局】

〒390-0811 松本市中央1-18-1 松本市中央公民館（Mウイング）

電話：0263-32-1132／FAX：0263-37-1153

E-mail:gakushu@city.matsumoto.lg.jp

10 その他

松本市営中央駐車場（Mウイング北棟）は有料です。公共交通機関等でのご参加にご協力ください。

基 調 講 演

○演題

「ふるさと」をつくる公民館

～松本市町内公民館調査からみる公民館の新たな可能性～

○講師

牧野 篤 氏（東京大学大学院教育学研究科）

1960年愛知県生まれ。名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（教育学）修了。現在、中央教育審議会生涯学習分科会委員。社会教育や地域づくりの現場で自治体と共同調査を行い、これからの社会教育・公民館の在り方について研究を続けている。著書に「公民館を再発明する」、「公民館はどう語られてきたのか」や「社会づくりとしての学び 一信頼を贈り合い、当事者性を復活する運動-」（いずれも東京大学出版会）など多数

2018年度からは松本市と協同で多世代参加型地域コミュニティづくりモデル事業を実施し、町会へのヒアリングや現地調査を複数回実施

皆さん、おはようございます。牧野です。
よろしくお願いいたします。

最初に、今年元旦に発生しました能登半島地震の犠牲になられた方々にお悔みを申し上げるとともに、被害に遭われた方々の一日も早い日常生活の回復をお祈りしたいと思います。

すでに1カ月以上が経っていますが、私たちは何度も何度も思い返しながら、お話をしなければいけないのではないかと。発災は防げませんが、災害が起こったあとの避難所経営や様々な二次被害を防いでいくということも含め、公民館が非常に大きな力

となっている。しかも、日常的に社会教育活動や公民館活動が活発な地域ほど、避難所経営がうまくいっているということ。そして支え合いながら命をつないでいくということがなされている、といったことも分かってきています。

その意味では、今後やはりこの社会において、公民館、さらには社会教育といったことを、例えば防災という観点から、改めて押さえておかなければいけないのではないかと。今日はそんなことも含めてお話をさせていただきます。

今回私の方から提案させていただいたテーマは「『ふるさと』をつくる公民館」です。そして、あとから少しお話をしますが、松本市内の町内公民館を調査していますので、「町内公民館調査からみる公民館の新たな可能性」ということでお話ができればと思います。

先ほどご紹介もありましたが、松本市と私の研究室とで「多世代参加型地域共生コミュニティづくりモデル事業」という共同



写真：牧野 篤 氏

研究を行っています。コロナ禍がなければ、もうとっくに終わっているはずのものです。が、三年計画の最終年度にコロナ禍があり、延長、延長、延長で来て、ようやく今年度が最終年度になります。

2018年度に市内20地区、56町会にヒアリングをさせていただき、2019年度に、三つのモデル町会が選ばれ、そこへの訪問を繰返してきました。2020年度に活動が停止してしまい、今年度再開させていただいたということになります。

そういう経過がありますが、今日最初にお話をしたい大きなテーマとして、「Well-being」という言葉をまず置いておきたいと思います。

この「Well-being」とは一体何なのか。最近、国のいろいろな政策文書にもたくさん書かれるようになってきた、よく分からない言葉です。

例えば、私たちも関わってきました新しい教育振興基本計画が、昨年6月に閣議決定されましたが、そこでも「Well-being」という言葉が多用されています。

作った側としても、一体何のことなのか、曖昧だとよく批判をされるのですが、一般的に考えれば「よりよく生きる」ということ。「Well」と「Being」で、よりよい自分の生を実現していく、となるわけです。

何となく積極性を感じられる反面、いや、私たちはそんなに強い人間なのか、といったことが問わなければいけないのではない。自ら積極的に、自らの生を、幸せを実現していく。よりよく生きていく。確かに極めて能動的でポジティブな良い意味があるように受け止められますが、では、本当に私たちはそんなに強い人間なのかと考えていくと、いや、どうもそうではないのではないかと。

もう少しいえば、「そこにちゃんとよい状態で置いてもらえる」といったことから出発をするということも、あってよいのでは

ないか。自分の周りの環境がとてもよい環境であって、そしてそこに幸せを感じるといったことがなければ、実は積極的に生きることもしないのではないかと。

そう考えていくと「Well-being」というのは、「よりよくそこに置いてもらえる」ということ。一見とても受身ですが、そういうことがあることによって、実は積極的に生きていくことができるようになる、そう考えられないだろうか。

「Well-being」というと、よく個人のものだといわれますが、今回の教育振興基本計画も「協調的 Well-being」という言い方をしている、まず良い関係を作りましょう、ということから入っている面があります。

例えば、今日この場もそうですが、皆さんがこういう場を準備してくださって、ご依頼があったので、私は伺っている。私一人が皆さんにお話をしたいと言っている、こういう場を作っていたらなければ、お話ができなかった。

そして、皆さんもこういう場があることによって、今日この集会に参加をしようと一歩足を踏み出された。その意味では、やはりよい環境があって、自分で選び、一歩足を踏み出すという能動性が生まれてくる、ということだと思います。

そう考えていくと、この「Well-being」ということも、自分が幸せを感じられるような、または自分が一歩足を踏み出すことができるような条件を、ちゃんと整えてもらえてある、それをお互いに作っていきましょう、というようなことを基本に考えられないだろうか、ということなのです。

1 「よきこと」に気づき実践する ：コロナ後の社会への希望

いくつか前提の話をしたと思います。

一つはコロナ禍です。先ほど私たちの共同研究も3年間停止していたという話をしました。そして今まだマスクをしている方もたくさんいらっしゃいます。

このコロナ禍、いかがだったでしょうか。大変だ。三密を避ける。例えば学校の子どもたちは、給食を食べる際、みんな同じ方向を向いて早く食べて、しゃべってはいけないなどと言われ、ある意味ではとてもきつい思いをした。

さらに、私の大学もそうですが、3年間ほとんどオンラインで授業をしましたので、2年間の学生たちに関しては、実は赤門を一度もくぐったことがないまま送り出した。彼らは赤門に憧れて来たのに、1回も大学に来ていないということなのです。お互いにオンライン越しで顔を知っているけれど会ったことがない。卒論指導も全てオンラインで行ったのです。そういう生活を強いられてしまった。

そこで、人々の孤立や孤独といったことが露わになり、色々な問題が起こったのだといわれているわけですが、その反面で、私たちはこういう経験もしています。

私たちはコロナ禍前から、岐阜県岐阜市で、小学校、中学校、それから地元の方々といい関係を作ることとおして、コミュニティスクールづくりに取り組んできました。

そして、2020年の新年度、一斉に休校措置が取られました。子どもたちは学校に行けなくなってしまった。さらにその時、マスクが足りなくなり、覚えていらっしゃいますでしょうか、「アベノマスク」と呼ばれるような政策もとられました。

子どもたちも、どうしようか困っていた。そうしたら、子どもたちが自分たちで布マスクを縫って地元の高齢の方々に届けた、ということが起こったのです。

すると、地元の高齢の方々がとても喜ん

で、今度は子どもたちに何かしたいということになり、地元の方々に声掛けをして、学校内の地域ルームでマスクを縫い、全校児童1人2枚行き渡るようにして届けた、ということが起こったのです。

私たちはこれにびっくりしまして、子どもたちに、なぜそんなことを思い付いたのか聞いたのです。そうしたら、こういうふうに言われました。学校が休みになって、マスクもなくなってしまって、自分たちは寂しい思いをしたし、困った。家でもお父さんお母さんが心配だねって話ばかりするようになった。その時にふと、仲良くしてくれたあのおばあちゃん、あのおじいちゃん大丈夫かなと思ったって言うのです。

一人暮らしだし、薬局に行ってもマスクが売っていないし、もしかしたら家から出られなくなってしまっているのではないかな。何かしてあげたいと思っていたのだけれど、どうしていいかよく分からなかった。そうしたら、テレビで布マスクの作り方をやっていて、これならできそうだと思った。だけど、縫ったことがない。それで、お母さんに「こんなことをやりたいんだけど」って言ったら、「縫い方を教えてあげるから練習しなさい」と言われた。そして、一生懸命練習したら縫えるようになってきた。友達と一緒にになって縫って届けたら、とても喜んでもらえてうれしかったって言うのです。

そこで、私の方からもう一步踏み込んで、「縫っている最中は、どんな気持ちでしたの？」と聞きましたら、こう言うのです。仲良くしてくれたおばあちゃん、おじいちゃんの顔が浮かんできてうれしかった。届けたらやっぱりすごく喜んでもらえて、とてもうれしかった、と言います。

それに対して、高齢の方々がお返しにマスクを縫ってくださったのですが、この方々にもどんな気持ちでしたのかお聞きしたのです。

そうしましたら、こんな大変な時に、親御さんたちも心配で仕方がなかっただろうに、自分たちのためを思って子どもたちがマスクを縫ってくれた。このことに、まずもう感激をした。それだったら、私たちも子どもたちのために何かしなきゃということで、声掛けをしたらこんなに集まってくださった。ちょっと距離を取りながら、マスクをしながらだけでも、久々にみんなで集まって、世間話でゲラゲラ笑いながら一緒になってマスクを縫った。やっぱり縫っている最中に子どもの顔が浮かんできたって言うのです。そして、届けたら喜んでもらえた。こういうことができる自分たちに対してもやっぱりうれしかった、という言い方をされたのです。

これは新聞報道にもなりましたが、やはり相手のことを おもんばか 慮って、「何かしてあげたい」と思ったわけですし、それから相手のことを慮って「うれしい気持ちでした」といっています。

ここでちょっとまたまた英語になってしまいますが、「Compassion」という言い方があります。この「Compassion」は、よく「共感」と訳されますが、実は二つの部分からなっていて、「Con(m)」と「Passion」とに分かれています。

「Passion」は一般に「情熱」や「感情」と訳されますが、元々は「悲しみ」や「苦しみ」という意味なのです。「Con」は「共にする」「共有する」と訳されますが、本当は「分かち合う」という意味になります。

ですから、苦しみや悲しみを分かち合う、相手を慮って我がこととしてそれを受け止めていく、ということが「Compassion」の基本です。

そういうことが起こる中で、相手のために何かしたい、そうすることが実は自分にとっても良いことなのだという感覚を持て

るようになっているのではないか。それは日本語でいうと「恩送り」のようなものなのです。「恩返し」ではなくて「恩送り」。

高齢の方々がなされたのは「恩返し」かもしれませんが。送ってもらってうれしかったからお返しをしたい、ということでした。では、子どもたちは高齢の方々にマスクを縫って贈る時に、何か返ってくることを期待していたのかというと、期待をしていなかったはずです。

おじいちゃん、おばあちゃんのために何かしたいと思い、できることを探した。そして、マスクを縫って渡したらうれしかった、喜んでもらえた。高齢の方々も、これにお返しをするという形ですが、子どもたちにマスクを贈ったことによって、何か返ってくるという期待をしていたわけではないはずです。

その意味で、もらった恩を次へ渡していくという言い方をします。恩を送っていく。恩を返すのではなくて、送っていく。そんなことが起こっているということではないでしょうか。

しかも、何かのときにこういうことが起こる。それは先ほど申しあげた、例えば被災地の公民館で起こっていること、さらにはお互いに助け合っていこうと、いろいろな関係のあり方を考えていく、そんなところにも起こっているのではないか。それが実は、私たちがこの社会を作っていることの基本なのだといわれたりします。

ここで求められてくるのが、相手への想像力、そして良いことに気づくということです。何かしたい、相手の身になって考えてみたら、実はこんなことができるのではないかなと思えていく。そんなことが子どもたちの中にも、高齢の方々の中にも起こっていた。そうしたことを、私たちはやはり見ておかなければいけないのではないかと思います。

コロナ禍で大変だった。確かに人々が孤立をし、新しい生活様式といってもなかなか馴れない。そういう中で、私たちがこの社会を作っていることの本質、人間的な基礎といったりしますが、そんなことを垣間見ることができたのではないかと、とも思います。

実は昨夜こちらに伺ったのですが、久しぶりに来たので松本城を見ようと思い、何も知らずに行きましたら、プロジェクションマッピングをやっていたのです。ちょうどよかったと思って見ていましたら、こんなことが起こりました。

私の隣に若いご夫婦がいて、ちょっとヤンキー風なのですが、子どもを二人連れて来ていた。ご夫婦ともちょっと背が低くて、前に人がいたので見えなかったのです。子どもが下のほうで、「お城の屋根しか見えない」と言ってぐずっていたのです。そうしたら、お父さんが何と言ったか。

「ちょっと待っててね、我慢してね」と言って待たせていると、プロジェクションマッピングが始まってしまったのです。子どもは「見えない、見えない」と言って騒いでいる。そしたらお父さんが、「肩車してあげるからね。1回だけだよ」と言ったのです。分かりますか、なぜ1回だけなのか。「ずっとじゃないよ、後ろの人が見えなくなっちゃうからね」と言ったのです。

ちょっと驚いたのですね。驚いた自分にも驚いたのですけれども。こういう相手への想像力といったことが、本来であれば普通にあっていることではないか。

私はずっと東京にいますが、朝から不機嫌な方々と付合っていると、どうもそういうことがどこかへ行ってしまう。喧嘩腰で電車に乗っている方々を見ると、「相手のことを配慮しているのだろうか」といつも思うのですが、それが普通になってしまおうと、かえって昨日のような出来事に驚く、

というか感動する。さすがに松本だなど、一瞬思ったのです。

ただ、その一瞬思いながら、普通はこうなのではないかなと思ったのです。そうしたことが実は日常生活の中で起こっているのではないかと。

相手のことを慮って、お互いが気持ちよく過ごせるように良い環境を作ろうとする。当然、お互いプロジェクションマッピングを見たいでしょということなのですよ。自分だけが見えればいいのではなくて、みんなが見ることでお互いに楽しみましょよという関係ができていく。そういうことがあるのではないかと。

2 転換点の社会

ここを押さえておいていただいた上で、今の社会がどうなっているのかということなのですが、「転換点に入った」といわれてもう長いのです。

日本はバブルがはじけた頃、1992年、93年ぐらいから、転換点だ、転換点だといわれてもう30年経ってしまいました。その転換点と呼ばれ続けたのが「平成」という時代です。

最近うちの学生が「今年昭和99年ですね」と言うのです。「来年昭和100年です。いつまで昭和なんでしょうかと。」と。どういうことかということ、「いや、なんかずっと昭和のような感じじゃないですか」と言うのですね。「君ら平成の生まれでしょ？」と私が言うと、「いや、年号はそうなんですけど…」「平成ってあったんですか？」と言います。

しかし、見てみれば「平成」って激動の時代なのです。例えば2度の大地震があった。これに関しては、ついこの間、ある著名な評論家の方と対談したときに、こういう議論がありました。

関東直下型地震がもうじき来る、それに

備えよ、と。実は昨年が関東大震災100周年だったんですね。日本は関東大震災を機に国の構造が変わり、人々の生活も大きく変わった。我々は次に来る関東大震災に備えよ。もっといえば、子どもたちをそういうふうに教育して、社会の変革に備えなければならない、とその方はおっしゃったのですね。

私は不思議に思ったのです。では、例えば東日本大震災は大震災ではなかったのか。または、その前の阪神淡路大震災、これも平成時代に起こっていますが、大震災ではなかったのか。

国の構造が変わるから備えよといいますが、大震災では、人がたくさん亡くなるわけですね。過去の関東大震災では変わったけれども、東日本や阪神では変わらなかったのか、と質問をしました。そうしたら「いや、それは首都じゃないからね」と言われたのです。

ということは、日本の人たちは東京が何か被害に遭わなければ変われないのか。さらにいえば、多くの人を犠牲にして初めて変わることができるのか、ということを問うたのですが、答えてもらえませんでした。

何が大事なのかといったことが、どこかに行ってしまうのではないか。平成時代に阪神淡路があり東日本があった。2度の震災を経てまでも、実は社会の構造は変わっていない。学生たちに「いつまで昭和ですか？」と言われるようなことになってしまっている。

最近、株価がバブル後最高値になったといわれていますが、バブルの当時、東京23区の値段でアメリカの全土が買えるといわれたぐらいの経済力を持っていました。それが急転直下、株価が暴落をする。アメリカに次いで2位だったGDPが中国に抜かれ、最近ではドイツに抜かれたといわれている。

このように規模で考えることがいいかどうかは別として、経済発展という観点から見れば、停滞したままになっている。

さらに、地下鉄サリン事件があったり、東西冷戦構造が終わったりと、いろんなことが起こっていたわけですね。それでも「この社会は変わっていない」と、若い人たちが感じてしまうのは一体なぜなのか。

そうこうしているうちに、いわゆる危機の時代、「根源的な危機の時代」に立ち至ってしまったといわれています。

例えば今日も暖かいです。二、三日前、東京は20度ぐらいあって、もう4月か5月だといわれた。私は一昨日まで北海道にいたのですが、北海道は、これから農業はいいですよと皆さんが言う。これからマンゴーも作ります、というくらい暖かい。

この気候変動について、例えば東京大学の名誉教授の岡村さんがこうおっしゃっている。50億年後には太陽が膨張するから、地球が飲み込まれてなくなることは予測ができています。それから、本当にごくわずかな可能性ではあるが、数か月後に天体衝突で人類が滅亡するかもしれない。

ただ、ほぼ確実なのはこれなのです。100年後のこの世界で、日本は、私たちは、私たちの子孫は、毎年夏に40度を超えるような、そして冬にはどこか雪が降るような中で生活をしなければならなくなる。

なぜそうなってしまったのかというと、人間の経済活動や生活のあり方がそうしてしまった。少しでもこの地球を冷やしていくことを考えるのであれば、今すぐに生活様式を変えなければならない、というふうにいい始めています。

これはちょっと分かりにくい絵ですが、一番右のところが1900年から比べて平均気温が4度上がっている状態です。1.5度上がって、そこを超えてしまうと後戻りができないといわれていますが、今はもう1.3度

から1.4度のところですよ。私の知合いの天文学者たちは、今から変えないともう無理だろうといっています。

さらに、これは教育にも関わりますが、安倍政権の頃に「ムーンショット型研究開発制度」というものが作られています。「ムーンショット」というのは、月を射るように難しいけれども当たればすごいですよという、そういう研究開発ですが、32項目ぐらい出されてきたのです。

そのうち私たちに相談があったのがこの8項目です。ほとんど理系の方々が考えているので、文系的に見てどうですかという相談がありました。

今話題になっているChatGPTという生成人工知能が出てくるより前の話ですが、例えば、「どこでも医療アクセスの実現」というものがあります。

朝スマホで自分の顔を20秒ぐらい撮ると、私の血圧、体温、脈拍、自律神経つまり交感神経と副交感神経の動きが全て測定できる仕組みがある。それを1回か2回撮っておくと、バックグラウンドで動いていきますので、「牧野さん、今日はちょっと情緒的に乱れていますね」とか、「緊張していませんか」とか、スマホが言ってくれるのです。

そうしてデータを取っていく中で、例えば血圧が高かったりすると、医薬品メーカーに連絡が行って、そこで私向けの薬品が調合されてドローンで飛んでくるようになりますよ、と。もうかかりつけ医や薬局がいらなくなるのではないかというようなことが、もうじき実現できるということなのです。

教育という面から見て、これで何が起こるのかというと、「私が私であることを強く意識しなくても、外部の人工知能が『あなたですよ』と言ってくれるようになる」ということなのです。

こういうもので実用化されているものが、

すでにたくさんあります。例えばマッチングアプリなど、結婚紹介のアプリがあります。仮に私の年齢や性別、さらには学歴、職業、自分の好きなことを入れていくと、「あなたはこういう人間です」と外部が言ってくれます。そして、あなたに合った女性はこの女性ですと紹介してくれて「マッチ度は99.8%です」とか言ってくるわけです。

そこまでマッチしている人を紹介されてうまくいかないと、私が駄目な人間なのか相手が駄目なのか、みたいなことになってしまう。うまくいかなければもう1回やり直して、ゼロに戻してということになると、何が起こるか。

笑っていらっしゃいますが、笑っていらっしゃる方も、駆け引きをされてきたはずですよ。いかがですか。自分が好きになった女性がいたとして、その人に振向いてもらうために、手練手管を繰り出し、駆け引きをされたのではないのでしょうか。

駆け引きをしてゼロであったものが10になり、20になり、50になり、80になり結婚となっていくのが、今は最初からマッチした人が紹介されて、ゼロか100ですと言われてしまう。あなたはこういう人間ですよと外部が言ってくれるようになる、ということですよ。

そうすると、常に完成品でなければならなくなってしまう。もっといえば、試行錯誤ができなくなっていってしまう。そして、「私が私である」といったことを強く意識しなくても、外部のシステムが「あなたですよ」と言ってくれるようになる。簡単にいえば、自我や自己意識といったものが要らなくなるかもしれない。そういう社会でよろしいか、ということなのです。

アニメや映画でもありますが、職業なども自分に合ったものを紹介してくれて、人生を外部のものが決めてくれますよという

ような社会がやってくるかもしれない。そうすると、個人の意思はほとんど問題にならなくなる。それがあと二、三十年でやってくるかもしれない。

これは国がやっていることですが、社会変動のスピードが大きくなってきている。今までは一生涯に一度、運悪く社会変動に出くわして失業する、といったことが起こっていたわけですが、これからは10年に1度ぐらい、そんなことが平気で起こるような社会になってしまう。

これはあとから申しますが、子どもたちの平均寿命は100歳を超えていますから、彼らは人生のうちで、10回ぐらいは大きな変動に見舞われるのではないかと、といわれ始めています。

そういうことの中で、今いろいろな政策がコミュニティに下りてきています。

日本の政策は、ある種の癖を持っています。どんな癖かという、国がイケイケどんどんで、みんなが一つの方向に向かって動いているときには、国土計画であったり経済発展の計画であったりと大きなことを言いますが、国の枠組みが動揺すると、すぐコミュニティに手をつけるという癖です。

例えば、明治維新で最初にやったのは、やはり小学校を作って、草の根から社会を作っていくことでした。それから、明治から太平洋戦争の敗戦まで、日本は10年に1度ぐらい対外戦争を繰り返し、そのたびに経済が疲弊するのですが、そのたびにやってきたのも全てコミュニティで始末をつけるという政策でした。戦後、新しい社会を作るときにも、公民館や社会教育を活用しながら、コミュニティ活動を組織してきました。さらに、高度経済成長が終わって社会が動揺した時、これも明らかにコミュニティという名前を使った政策が作られました。そして、バブルがはじけたあとも作られ、最近もそういう形になってきています。

総務省が、それから厚労省、国交省、経産省、農水省までもが、コミュニティを焦点化し、社会教育が大事なのだという言い方をし始めています。

一つだけ例を挙げますと、いま農林水産省が農村RMO、日本語にしますと「農村地域づくり事業体」というものを作っているとしていて、私もそのアドバイザーに入っています。

何をやろうとしているかというと、農水省はもう農山村、特に山村を維持することは困難であると考え始めた。一つは少子化・高齢化、さらに人口減少、担い手不足です。それからもう一つ、農業では食べていかれなくなっているということがある。

ではどうするのか。廃村にすればいいのか。そういう議論もありますが、農水省はそう考えていない。なぜかといいますと、日本のこの国土の自然の豊かさは、人が手を入



れることによって保たれているし、多様性がより豊かになっているということが分かってきているからです。

簡単にいうと、人が手を入れなくなると力の強い木だけが大きくなり、上を覆ってしまうので下草が枯れ、とても単調な森林になってしまう。それを人間が切って保全をすることで、豊かな多様性が保たれているということが分かっている。そうすると、そう簡単に農山村は廃村にせよ、とはいえない。では、どうしたらいいのか。農林業では食べなくなっている。

そこで農水省がやり始めているのが、農

業と文化、農業と観光、農業と福祉、そうしたものを絡めて新しいライフスタイルを作りつつ、農山村が維持できるような方策を考えましょう、と。その時に大事になってくるのが、社会教育や公民館活動なのだと思います。

彼ら関係者も全国を調査し、農山村が活発に動いているところは、実は社会教育活動が活発だということを発見してきている。住民の方々が自分たちでその村を治め、都市やいろいろなところと交流をしながら、新しい生活のあり方を模索している地域があることが分かってきている、ということなのです。

そういうことの中で、各地でコミュニティ政策が展開しているわけですが、もう一つ、「戦争」がありますよね。

今回の戦争も温暖化に貢献しているといわれます。あれだけ大量の農地を焼いてしまうわけですから、当然、二酸化炭素がたくさん出ます。その意味で、彼らは温暖化に貢献していると批判されていますが、しかもそうしたものが今、SNSやスマホなどを通して、子どもたちの掌に入ってくる時代です。

悲惨な状況が子どもたちの掌に入ってきて、それによって動揺している子どもたちが多くいることも分かっていますが、そういう意味では、先ほど申しあげたような大きな社会変動、さらには根源的危機といわれるような気候変動の問題、さらに戦争というようなことを、私たちは日常生活で引き受けなければいけなくなった時代に生きていると、考えざるをえなくなっているのではないかな。

そういった中で、私たちがいかに新しい生活をして、自立していくのかが問われている。しかも、その自立は一人ひとり強い個人が、俺が俺がと言って生きていく社会ではなく、一緒になって協働していくような

社会のあり方を考えなければいけなくなっている。そうすると、やはり「学ぶ」ということが大事になってくるのではないかな、ということなのです。

3 人生100年時代の到来

さらに、人生100年時代が到来しています。今年高校3年生の子どもたちの予測平均寿命の中位数は107歳。これは世界的によく知られていることです。特にリンダ・グラットンさんの『LIFE SHIFT』の中で紹介されてから有名になりました。今年生まれた子どもたちの予測平均寿命は112歳だそうです。人間の限界が120歳だそうですから、もうほぼ限界に近づいているのです。

そこまでいかななくても、2016年の数字で死亡最頻年齢、一番たくさん亡くなる方々は、もう91歳なのです。そこを超えないと長生きとはいわないという社会に、私たちは入っている。

いかがですか。まだ大丈夫ですね？ 私あと、どうでしょう、20数年、30年近くありますけども。

人口構造がこうなることは、もう皆さんご存知のとおりです。あのピラミッドと呼んできたものもピラミッドではありません。

あと30年経つと子どもは全体の1割くらい、高齢者は約4割を超えるという、そういう社会がやってくることが予測されています。

人口もこのように推移をしていて、今すでに減り始めています。毎年ほぼ70万人ずつ減っていて、もう少し経つと100万ずつ減るという予測が出ています。今世紀半ばには1億を割り込み、今世紀末には約5,000万人になるだろうといわれています。

(グラフの) 反対側の山の斜面を見ると、明治維新から今年が157年なのです。明治維

新以降、急速に人口が増えた。

これには理由があります。簡単にいえば、経済発展をして、栄養が行き渡り、さらに医療も発達し、環境が改善されたということなのですが、実はもう一つ理由があります。戦前の人口増は多産によるものなのです。たくさん子どもを産んだのです。戦後の人口増は、少子化ですけれども長生きになることによって増えた。

この推移を見て悲観的になり、もう駄目だという議論がずっとあったのですが、ちょっと見方を変えるとどうでしょうか。

これは日本人の平均寿命の伸びです。戦後70年間で約35歳延びています。明治期・大正期の人口急増期には、平均寿命は約40歳で、ほとんど変わっていません。終戦直後でも50歳ぐらいでした。

なぜかは、お分かりだと思います。明治・大正期は子どもがたくさん亡くなる社会であり、戦争を繰返していましたから、若者を消費する社会であった。しかも、経済発展の果実が国内に回ってこない。簡単にいえば、みんながお腹いっぱい食べられたり、栄養を改善したり、医療を発達させたりすることが十分にできなかった社会。そこで多産であることによって人口が増えたけれども、平均寿命は延びませんでした。

戦後はどういう社会かというと、約80年間戦争したことがない国、稀有な国だといわれます。経済発展の果実を、人の生活の向上に使うことができた社会に、私たちは生きています。

栄養が改善され、医療が改善・発展し、生活環境がきれいになって、衛生的になったことよって、みんなが長生きする社会を作ってきたのです。これは悲観的になるべきなのかということ、ある意味では、よい社会を作ってきたということなのですね。

今度は逆に見ます。乳児死亡率を取りますが、どういう数字かといいますと、新生児

1,000人あたりで、1歳前に死んだ赤ちゃんの数です。現在、日本は1.9人で、世界で一番少ない国の一つです。

今回のコロナで、よく100年前と比べられています。100年前はちょうどスペイン風邪の頃ですが、この頃は約10人に2人の赤ちゃんが1歳にならなかったのです。いまや1,000人に2人なのです。本来、これはゼロになるのが一番いい数字ですけれども、残念ながら生物学的にゼロにはならないといわれています。

いまや日本は、子どもが生まれれば、特別な事情がない限り、ちゃんと大人になれると、誰もが信じ込むまでもなく普通に思っている社会になった。

皆さんいかがですか。お子さんをお持ちの方で、お子さんが生まれた時、「いや、この子は大きくなりたくないかもしれないからもう一人」と思った方はいらっしゃるでしょうか。多分いないと思います。

その意味では、ごく自然に子どもは大人になれる社会を作ってきた。いい社会のはずです。たくさん産まなくても、自分の家族がつながっていくし、社会がつながっていくと思える社会を作ってきたということなのです。これが少子化の大きな要因です。

そうした中で、今まで産め産めと言っていた経産省が何とやっているかというと、もういいんじゃないですか、と。いい社会を作ってきたのだから、名前を変えましょうよといい始めた。「超高齢社会」というから何となく悲観的になってしまうのであって、「健康長寿社会」と名前を変えたらどうですか、といい始めているのです。

さらに彼らは、明治維新から250年間の日本の人口における年齢の割合を示す図をつくっています。これ実数ではありません、割合です。これは、予測も入っていますが、三つの部分に分かれます。左側と真ん中と右側です。約80年ずつぐらいなのです。

少子化とは一体何なのか、私を例にお話をしたいと思います。

私は1960年の生まれ、今年64歳で、来年定年ですが、ちょうどこの真ん中のところの入口ぐらいに生まれています。私の両親が1930年ぐらいの生まれです。私の祖父母が1900年ぐらいの生まれです。だいたい一世代30年です。

私が1960年に生まれて、少子化の世代です。なぜ少子化なのかというと、私はきょうだいと妹しかいません。2人です。

1930年に生まれている私の両親は、何人きょうだいがいるかというと、私が知っているだけで15人います。母が9人きょうだいの真ん中で、父が6人きょうだいの5番目なのです。

すでに母も父も亡くなっていますが、母が健在な頃に話を聞いたことがあるのです。9人もきょうだいがいるあなたが、なぜ2人しか子どもをもうけなかったのかと聞いたら、何と言ったか。

「あんた大人になったじゃないか」っていうのです。当時は、跡取りとして男の子が欲しかった。だからまず男の子が生まれるまで産み続けたのです。私の父を見てみると、6人きょうだいの5番目で長男。ですから、上4人が女なのですね。とにかく男の子が産まれるまで産み続けた。

今の時代だったら男の子が産まれれば、「これで安泰だ、もうこれでいいだろう」となりますが、当時は「死んじゃうかもしれない」と思っていた。周りもきょうだいが10人ぐらいたけれど、2人や3人亡くしているのだ、というのです。実は母も上に2人兄がいたのですが、母が生まれる前に亡くなっている。そうすると、男の子が産まれても安泰ではないので、普通はこの子たちが小学校に上がるぐらいまでは産み続けた。そこに女の子が入ってきてしまうと、うちみたいにいっぱいになるんだ、って言うの

です。

だけどあんたの頃は、と言うのです。私が生まれた頃は、子どもが死ぬなんて考えたこともなかった、と。だいたい一男一女もうければ幸せだといわれていた。うちも私と妹が生まれて一男一女で、もうこれでいいよねってことになったのです。

私も子どもが2人しかいませんから、少子化の世代が少子化で、どんどん減っていくことになる。

そういう社会だった。簡単にいえば、死にやすいからたくさん産んできた。いまや、ちゃんと子どもが大人になれるということをすごく素朴に感じられる社会になり、たくさん産まなくても大丈夫になってきたのだ、ということです。これが、少子化の根本的な要因です。

しかし反面で、今は産みたくても産めない方がいらっしゃることも分かっていて、これは政治の問題ですから何とかしなければいけません。少子化が必ずしも悪いことではないし、何か怠けているからそうなったということでもないのです。

みんなが長生きする良い社会。子どもが亡くなるのは悲しいし辛いし、何とかしたいといって社会を変えてきた結果、子どもが死なない、そして少なく産んでもつながっていく社会を作ってきたということです。ですから、ある意味ではとてもいいことではないでしょうか。

さらに例えば、私の母方の祖母の話をすると、11人子どもを産んだという人生は、どのような人生だったのでしょうか。15歳で結婚しています。統計上の子どもは14歳までです。子ども期を終えると15歳で結婚し、16歳から子どもを産み始めて、11人目を33歳で産み終えています。計算するとすごいですよ。1年半に1人ぐらい産んでいることになりますから、毎年お腹に赤ちゃんがいた感じになります。

グラフの真ん中に赤い線が入っています。(40ページ参照) これは50歳の線です。どんな意味があるかということ、最後の子どもが自立をする年齢に入る。例えば、その子が結婚して家を離れる。就職をして離れる。祖母を例にすると、33歳で産んだ子が17歳になり、家を離れていくような年齢に、親がなったということです。

見ていただくと分かりますが、50歳を超えてからの人生のある方が、こんなに少ない社会だったということです。つまり、子ども期を終えると家庭を持たされて、出産と育児と家計の維持で一生懸命になって、子どもが手を離れた、ああやれやれ、これから私の人生だと思ってふと気がつく、もう人生残っていませんというのが、この時代の生き方だったということです。

私の祖父も働いていましたし、自分で家業を持っていたんですが、私が生まれた時にはもう亡くなっていて、生きていけば60歳であるはずでしたが、いませんでした。ですので、私は祖父の顔を写真でしか知りません。そういう時代だったのです。

言い方を変えると、子ども期は親元にいますから当然家庭の中にいて、自立をしても家庭の維持で一生懸命になって、一生を終えてしまうような人生の方が多かっただろうということなのです。

では、これからやってくる社会はどうかということ、今多くの女性が働いていて、学歴も高くなっている。35歳ぐらいで1人目か2人目を産んで、産み終えていて、または産まない方もたくさんいる。50歳になった頃に、その子たちが高校や大学に入って手が離れていく。家庭の維持は全自動の機械であったり、様々な社会サービスがあたりするので、過去ほど大変ではない。

そうすると、多くの女性が社会で活躍できるような条件が整ってきた。しかも50歳を超えた方のほうが多い社会というのは、

自分の時間やお金、さらには様々な価値を持った方々が社会で活躍できるということでしょう。そうしたものをうまく活用できるような社会システムに変えていけば、もっとこの社会は豊かで、もっと人々がいいきと生きられる社会になっていくのではないのでしょうか。

それを過去のちょうどこの図の真ん中の辺り、私たちの子どもの頃から高度経済成長のような形で、規模を拡大していくというふうに考えていくと、高齢の方が増えていく社会というのは、また人口が減っていく社会というのは、負担が大きくなると考えがちですが、もっと価値が多様化し、もっと違う生活の仕方ができるのだと考えることによって、新しい社会が見えてくるのではないか、ということですね。

4 「かかわり」が大切な社会へ

そうしたことの中で、今何が問われているかということ、一つは「かかわり」ということです。

今、高齢化社会ですから、高齢の方々の死亡リスクに関する研究が増えてきています。運動と栄養と社会参加は、以前から死亡リスクを減らすといわれていますが、これがどれくらい有効なのかを検証した10年間にわたる追跡研究の結果がこの図です。とても簡単にシンプルな答えが出てきています。

運動というのは、どこかフィットネスか何かに行って、毎日、身体にすごく圧力をかけるということではなく、散歩かジョギング程度。栄養についても、少し減塩するなどちょっと気を付けるぐらいです。さらに社会参加も、ちょっと町内会の活動に出てみるとかその程度です。

そういった習慣がない方の死亡リスクを100とすると、運動と栄養によい習慣がある

方のリスクは3割下がる。さらにそこに社会参加が加わると、5割下がるという結果が出ました。

しかも、このあとの追跡研究があって、運動の中のどんな要因が、栄養の中のどんな要因が、社会参加の中のどんな要因が一番死亡リスクを下げるのに有効なのかということを検証していくと、実は全てに渡って良好な人間関係がある方のほうが、死亡リスクが下がるという結果が出たと報告されています。

それを受けたのが、こういう研究です。ご飯の食べ方と死亡リスクに関する研究なのです。家族と同居していて、一緒にご飯を食べている方々の死亡リスクを1とすると、という研究です。

男女とも一番右の方々が高い。一人暮らしで、一人でご飯を食べているとリスクが高まっています。

ただ、もっと高まっているところがあります。特に男性です。家族と同居しているのに一人でご飯を食べている人の死亡リスクは、約1.5倍になるという結果が出ています。しかも、これを統計処理すると、ここだけに*印がついています。簡単にいうと、ここだけ意味がある違いですよということですが、お分かりになりますか。

よく冗談で言うのですが、ご主人に早く逝っていただきたい奥さんたちは、ご主人に一人でご飯を食べさせておくと早く逝ってくれるそうですよ、と。そういう結果が出たということなのです。身に詰まされている方はいらっしゃるいませんか。奥様に「私忙しいんだから、あんた一人でご飯食べ」とか言われていませんか。

そうしたら実は、男女ともリスクが減っている方いらっしゃるのです。一人暮らしだけど、仲の良い友達とご飯を食べていると、死亡リスクが減ることが分かっています。しかも、男性の方が減り方が

激しい。ということは、奥様に冷たくされたら友達とご飯食べてください、と、そういう話なのです。やっぱりいい関係があると長生きです。

これはアメリカの研究やシンガポールとの共同研究でも全部同じ結果が出ています。アメリカの研究は、例えば喫煙者と非喫煙者では、当然喫煙者の方が寿命が短いのですが、喫煙者でもいい人間関係がある方のほうが長生きであるという結果が出ています。その意味では、良好な人間関係が生き死にに関わっていることが分かってきた、ということなのです。

さらに、こういう結果が出ています。今度は頭、認知能力のことですが、私たちが知っているのは、この山型になっている能力ですね。これは記憶力を基本にした、今までの工業社会で役に立つ力です。学校で教えられたことを一生懸命覚えて、それをテストや社会生活で出していくという形で使われる能力です。

この能力は訓練すると伸びますし、年齢とともに上がっていきませんが、40歳から50歳を超えると、脳の構造上、下がっていつてしまうことが分かっています。ですから、今までの経済の在り方では、定年があります。

私たちも、ゼミ生の顔と名前が一致しなくなったら定年といわれていますが、私も怪しい。一回会っただけでは覚えられなくなっている。来年定年ですよということになっているわけですが、そうではない力もあることが分かってきた。

二つあります。言語運用能力と、それから対人関係の形成能力、または生活上の問題解決能力といわれているものです。言い方を変えると、口うるさくなるだけという話もありますが、これらは良い人間関係があると一生涯伸びるのではないかと、また、この能力があると、良い人間関係を作るのに貢献できるということがいわれ始めています。

短期記憶といわれている記憶力は、いま人工知能が全部やってくれる。一生懸命覚えても敵わないのですね。だけど、言語運用能力や対人関係形成能力は、今のところ人工知能にはできないといわれていて、むしろこういう力を使って社会で様々な活躍できるような仕組みに変えていくことによって、人工知能と共存できるのではないか。もっといえば、高齢の方々も活躍できる社会になるのではないか。

さらに、こういうこともいわれています。ボランティアの経験は、大学生のメンタルヘルスにとってもよく、高齢の方々もボランティア活動をしていると、鬱になる率が下がるといわれています。

さらに子どもたちも、幼い頃からボランティア活動をして、ある意味大人の中で揉まれていくと、社会貢献意識が高まり、将来的に誰かのために何かしたいという気持ちを強めることが分かってきています。

大人とうまく関わっている様々な活動をしていくと、まず自分を大事にしてくれた大人に対する信頼感が生まれ、その場所を提供してくれている地域社会に愛着や誇りが生まれ、最終的に自分が生きている社会や国に対する誇りを持つようになる、そういう言い方がなされ始めています。

さらに最近、医療でも社会的処方という言葉が出てきている。医療行為の中で対人関係を整えることによって、いわゆる病態を安定させるという手法がとられ始めています。

例えば、睡眠障害で夜寝られないんですといってお医者さんに行くと、今まで睡眠薬をくれたのが、この新しい考え方ではそうではない。「どこにお住まいですか」と聞いてくださって「どこどこです」と言うと、地元でこういう活動している団体があるので参加してみませんか、ボランティア活動をやったりウォーキングをやったりしていま

すから、と言う。一緒にウォーキングへ行くと体も動かしますし、参加するとい関係ができてくる。いい関係ができてくるので、精神が安定して眠れるようになっていくし、薬を出すまでもない。そういうことが言われ始めているのです。

さらに、人生を終える最後のところも、私の知合いの癌の訪問医たちが始めていますが、いま病院は最後まで置いてくれませんので、病院を出されたあと、公民館や空き家を使って、地域で良い人間関係を整えて、共感的な関係で一緒になって生活ができる場所を作っていく。そうすると、最後を迎える時に、いろいろあったけども、いい人生だったなと思って終えられるということが分かっている。そうしたこともきっちり処方していかなければいけないとい始めています。

人は「かかわり」の存在でもある。今までは「量」をベースに考えていた社会でしたが、これからもっと「質」のことを考えていく。しかも、その「質」にはいろいろあるのだ、多様でいいのだということになっていく。そんなことを考える必要があるのではないか、ということなのです。

5 人は何が大切なのか

そういうことの中で、一体私たちは何が必要なのか。

例えば過疎化の問題について、知合いの明治大学の小田切さんという方が、こんなことをおっしゃっています。

「過疎地では三つの空洞化が起こる」とおっしゃるのです。一つは「人の空洞化」で、人が減っていつてしまう。過疎化です。二つ目は、土地が使われなくなるという意味で、「土地の空洞化」が起こる。耕作放棄地の増加です。三つ目は、集落機能が低下していく

ので、「集落の空洞化」が起こるということです。小田切さんは、普通はこの三つが起こるとその集落は駄目になってしまうと思うでしょう、ということです。

だけど、彼は全国の集落を歩いていて、いや、実はそんなことはないんですよという。一生懸命生き延びようとしているのです、と。ただ、どうしても駄目になってしまう時が来る。いつかという「諦め」が来る時です。「誇りの空洞化」が起こると、ガタガタと悪くなって、放棄されてしまい、無住化してしまう。集落が消えてしまう、といったことが起こる。

そのため、「人の空洞化」や「土地の空洞化」「集落機能の空洞化」が起こる過程で、誰かが寄り添いながら支えていく関係を作っていくと、その集落は持ちこたえていきます、ということをおっしゃっています。

これは、ついこの間、先ほどの農水省の事業で全国からいろいろな地域の方に集まっていたいた時にも言われました。

「行政っていうのは、今までは水道の蛇口みたいなものだった」って言うのです。

「ひねれば補助金が出てくる。だけど、都合が悪くなると上水で止められてしまうんだ」と。そうすると、我々は干上がってしまう。

それを何とかしようと次に出てきたのが、マラソンの給水所みたいな行政です。困っていると訴え続けると、給水所がやってきて水をくれた、って言うのです。

最近また金がなくなっている。そこで何が起こったかという、補助金漬けになっている状態で、補助金が止まると死にます、と言っていました。給水所で水を飲んできたけど、もう1回苦しくなって給水所があるかなと思っていても、「ない」となってしまうと、そこで倒れてしまいます。

では、本当に必要なものは一体何ですか？と聞いたら、何とおっしゃったか。

「伴走です」とおっしゃいました。「マラ

ソンと一緒に走ってくれること。お金ではありません」って言うのです。簡単にいえば、一緒に走って、一緒に悩んで、考えてくれること。そして、いつまでも自分たちがその主役なのだと思えるように支えてくれること、それが大事なのだと。

つながりが切れてしまっても、行政が関わることで、様々なサービスを提供してくれます。これは大事なことです。ですが、それがあまりにも過度になってしまうと、受ける側はある意味では受けざるをえなくなっていくし、お客様化してしまう。消費者になってしまう。「もっとくれくれ」になっていってしまう。なぜかといえば、それは「楽」だからです。これを責めることはできないと思います。

ですが、気が付いてみると、もらうことしかできなくなっていて、一旦それが切られてしまうと、もう自分では何もできなくなってしまうという状態ではないでしょうか。

本来、私たちはそこに生きることによってプライドを持っていますし、当事者性というものを持っていて、自分ならこれができるよ、といったことが分かっているはずです。そうすると、自己有用感、役に立てるのだという気持ちが湧いてきていて、それがさらに誇りにつながっていくので、自分たちでやろうする、ということが起こるはずなのです。

最初に申し上げた「Well-being」につながっていきませんが、「行政サービス」という言い方をして、「何か渡しますよ」「やってあげますよ」という関係にどんどん入っていくと、それを受けることしかできなくなっていく。それは言い方を変えれば、生きる意欲を奪ってしまう。少しきつい言葉ですが、そういうものは「生きる意欲を奪う暴力」ではないか、ということなのです。

それに対して、やはり私たちは、自分がプ

ライドを持って生きている、そのことを認めてほしいわけですし、認められることによって、これができるよ、あれができるよというふうになっていく。そんなことが本当は起こるのではないかということなのです。そこに自治の問題が関わってきますし、そうやっていけば、問題が起こりにくい社会ができてくるのではないかと。

例えば、「コロナ禍で孤立が…」といいますが、コロナ禍で孤立したわけではなく、孤立していることが、コロナで露わになったと見たほうが良いのではないのでしょうか。

そうすると、孤立していない状態をちゃんと作っておけるかが問われるので、むしろ良い関係、それは簡単にいえば自分たちでちゃんとできるよという関係にしていく。そこに自分が誇りを持てたり、人々との良い関係の中で楽しんだり、嬉しくなったり、そんなことが起こるということが基本ではないか、ということなのです。

さらに、それには文化というものも関わっている。この間、平田オリザさんという劇作家の方にお話を聞く機会があったのですが、平田さんもよくおっしゃるのです。

例えば、いろんな事件や震災が起これば、文化芸術は不要不急のものだからといって予算が切られていってしまう。強烈な不満があるとおっしゃるのですね。

だけど、結局、不要不急で、お金を回すべきところが他に出てくるので仕方がないですよって話をしていましたら、こんなことおっしゃるのです。

我々がやっているような舞台にお金を出すのは確かにそうかもしれない。だけれども、我々のこの舞台芸術が発展をするためには、お金以外にもっと大事なものがあるのだと。

何かというと、地元の伝統芸能や伝統行事、お祭りなのだというのです。そうしたものがしっかり発達をしていないと、その上

にある高等芸術といわれているようなものは発展しませんと。

簡単にいえば、それは各自治体がきっちりと地元の文化を育成できるかどうかということに関わっている。その意味でお金とっているのだ、というのですね。そういうものまで、不要不急だといって、切ってしまってもいいのか、ということです。

それはよく分かる話なのです。例えば、東日本大震災の後、私は半年後に現地へ入って、約3年間地元の方々に伴走してきました。学生たちを連れて毎月1度、3日から1週間ぐらい訪れていました。

日常生活が回復してくる過程で、地元の方々が何とおっしゃるかということ、獅子舞のような虎の舞があるのですが、その「虎舞がやりたい」と言うのです。そうすると、外部から入っていたボランティアの方々が叱るのです。何言っているんですか、こんな大変なときに遊びなんて、と。

違うのですよね。虎舞をやること、自分たちがその地域でつないできた虎舞ができるのだといったことを表現することで、お互いの関係性を確認し合いたいということが、まずあるのです。さらに、そうしたことを通して子どもたちを育成し、自分たちがコミュニティを新たに作って行こうという気持ちを一つにしていきたい。こういうのです。

それは先ほどの「恩送り」と同じなのです。何か見返りがあるわけじゃない。一生懸命やることで、みんなが喜んでくれることが自分の喜びになり、つながっていくことを再現したいということなのです。

それで、私も学生たちにお囃子や太鼓、笛を習わせて一緒にやってきましたが、そうすると、お互いに尊重し合える関係ができてきて、そして受け止め合っていくことになる。

「共通善」と書きましたが、みんなにとっ

て良いことが分かってくる。みんなのために良いことをすると、自分のためにも良いことなのだといったことが分かってくるようになる。自分への見返りを期待しなくても、どんどんやりますよといって、次へ進んでいくのです。

それが自分の出番を準備してくれたり、居場所を作ってくれたりする。お互いに認め合い、巻き込み合っていく形でさらに尊敬し合う関係ができて、結局良い関係ができていく。

そうしたことを社会教育がやってきているし、公民館活動がやっているのではないか。社会の基盤を「耕す」という言い方をしますが、社会教育はそういうことを担っているのではないか、ということなのです。

6 社会教育の概念を問う

そして社会教育の概念も今、少しずつ変化してきています。

今までの教育は、教育行政という範疇はんちゆうの中で、学校教育と家庭教育支援と社会教育という、例えば場所によって分けてきたということがあります。

それに対して、昨年6月に出された教育振興基本計画では何とっているかというところ、基本コンセプトとして、「持続可能な社会の創り手」の育成。持続可能な社会を創らなければいけないので、担い手ではなく、その社会の創り手を育成していくということ。それと先ほど申しあげた「ウェルビーイング (well-being)」が出てきます。

そして、教育こそがまず先に進んで、教育が社会を牽引していく、引っ張っていくのだ、ということが明記されました。今までは経済発展したあとに、お金を教育に回して発展させるという表現が多かったのですが、これからは教育を先に発展させなければこ

の社会を引っ張っていけない、という表現に変わってきています。

そして、社会教育について何とっているかというところ、「『学び』を通じて人々の『つながり』や『かかわり』を作り出し、協力し合える関係としての土壌を耕しておく」という表現が入りました。

文学的な表現ですけれども、社会教育は、学校や家庭という場所によって分けた言い方ではなく、社会の基盤となるような人々の関わりの土壌を耕しておくべきものである、そういう営みなのだという言葉が入りました。そして「持続的な地域コミュニティの基盤となり、ひいては社会全体の基盤になる」といっています。

社会教育が人間関係の土壌をちゃんと耕しておく、という土壌を持ったコミュニティが、この大きな社会の基盤になっていく。言い方を変えれば、社会教育こそがこの社会の中で日常的にちゃんと営まれていないと、この社会は底が抜けてしまうのではないですか、ということが書かれてあるということになります。

さらにこういっています。「社会教育は、地域住民が共に学ぶものであり、地域コミュニティ形成の営みという性格を強く有している」と。教育とはいっているけれども、それは教育や学びを通して、地域のコミュニティを作っていくものであり、さらに防災や福祉、産業振興、文化交流など、広義なまちづくり、地域づくりにそれらは関わっているのだといっています。

ですから、いわゆる教育行政の範疇だけに収まるものではなくて、教育を基本にしながらも、私たちの日常生活全てに関わる問題として、社会教育がちゃんとあるのですよといったことが、初めて計画の中に書き込まれました。

そして、これらの一般行政施策は、地域コミュニティがちゃんと維持されていてこそ

機能する。当然ですよ、人々の関係がしっかりしていることによって、初めて行政が様々な機能を発揮することができる。そのための基盤として、社会教育が役割を持っているのだということが書かれたことになります。

社会教育の概念や定義が変わってきているということなのです。もう少しいえば、社会教育が土壌を耕すことで、この社会が豊かな基盤を作ることになり、それが防災や福祉、産業振興、文化交流といった一般行政がきちんと機能することにつながっていくのだということが書き込まれたのです。少し踏み込んだ言い方をすれば、「一般行政の社会教育化」というようなことがいわれることにもなってくるということです。

その基盤は何かというと、住民自治ということになり、住民自治が大事だということになります。

7 地域をつくる公民館・社会教育

そうしてみると、地域をつくる公民館、社会教育ということになっていくわけですが、今年は公民館構想78周年で、社会教育法が制定されて75年になります。

元々公民館はこういうものとして構想されました。社会教育機関、社会娯楽の機関、自治振興の機関、さらに産業振興の機関。次が大事なのですが、次の世代を育成する場所である、ということが最初の構想にある。あらゆる社会教育、娯楽、自治振興、産業振興、青年の育成を目的とした地域の中核機関なのだと書かれてあります。

そして、その後少し経ってから出された『公民館図説』というものがありますが、公民館の機能を体現した絵が6つ描かれています。簡単にいえば、公民館は社会教育機関であり、戦後の新しい社会を作る民主的な

ことを勉強する場所でもあった。さらに産業振興の場所でもあり、文化交流の場所でもある。郷土を振興するための拠点施設だとい、さらにこれが描かれている。

「村の茶の間」と書いてあるのですが、これがいい絵なのでちょっと好きなのですが、囲炉裏を囲んで、おじいちゃんおばあちゃんから乳飲み子まで描かれています。和気あいあいとみんなて話をしている風景ですが、よく見ると全ての世代が描かれている。おじいちゃん、おばあちゃんが孫世代までちゃんと面倒見ながら教育をし、育てていく場所なのだということが描いてあるのです。

戦後、日本は7年間主権を失っていて、連合国に占領されていました。その時に日本人を教育するための映画が作られました。ナトコ映画という映画です。約400本作られていて、200本ぐらい見つかったらしいのですが、1本、『公民館』というのがあったのです。これは当時の優良公民館取材して作った映画です。その中の一部分だけ抜いてきたので、当時の公民館はどんな場所だったのかご覧ください。

※以下、映画ナレーション音声より

菅田町（すがたちょう）公民館。

おや、自転車が止まりました。

この公民館では、パンを作っています。風呂敷の中身は小麦粉でした。公民館に粉を持っていくと、パンと取替えてくれます。手数料が少し要りますが、それはこの事業の維持費になります。公民館は、儲け仕事をしたり、個人の商売と競争することはありません。ここの公民館でパンを作っているのは、食べ物の改善運動のためであり、また菅田町が深い山奥で、パン屋の店がないからです。

パン屋の隣は、歯医者さんです。この町には歯医者がいません。公民館では日を決

めて、遠い隣町の歯医者さんに来てもらっています。

その隣の部屋は、おやおや、パーマネント屋さん。これでさっきの娘さんの髪之谜が分かりました。町にはまだ美容院がないので、公民館がこのような仕事をしているわけです。

それではあの娘さんのスタイルの秘密もここにあるかな。ははあ、これこれ、公民館の青年学級の講座。

菅田町の新しい姿は、ここから始まるでしょう。

乳牛を飼うようになったのも、公民館の世話したことでした。

菅田町の公民館を造るためには、町で持っていた林の木を売払って、その金で費用を作りました。そのために裸になった山に、今新しい苗木を植えています。この苗木は大きくなって、さらにより良き公民館を作ってくれることでしょう。

ここの公民館には、附属の図書館があります。誰でもここに来て、自由に本を読むことができます。農村の人々は本を読みたくても読めないというのが一般の実情ですが、こうした設備ができて、熱心な読書家がたくさんできました。また、ここの本は、自由に貸出しもしています。ただし、手数料1円也を納めます。

図書館の2階は会議や集まりのために使われます。大勢集まっています。何をしていますのでしょうか。公民館の俳句の集まりです。みんな楽しそうに俳句の互選をしています。どうですか、いい句ができましたか。ちょっと見せてください。

ここではまた独特の結婚式を行っています。全国の公民館の多くは、結婚改善のために努力し、衣装道具を備え付け、特定の宗教だけを支持するということなく、式場として使うようにしています。

だが、菅田町では新しい形の式をつくり、

それを実行しています。農村では、特に結婚には金がかかり、無駄が多いと分かっている、今までのしきたりを変えることが容易ではありません。式の内には新郎新婦は誓いの言葉を述べ、結婚記念録も既に幾組かの署名のある後に、2人の名を記して新しい人生の出発をします。

(ナトコ映画『公民館』)

いかがだったでしょうか。これは、岐阜県の菅田町(現:下呂市)というところですね。

公民館というのは、生活の最先端の姿を見せてくれる、希望が抱けるような、そういう場所だったのではないかなと思います。しかも、次の世代をちゃんと育成をしていくという場でもあった。その後、当然社会が変わってきますから、役割もどんどん変わり、今のようになってきたということかもしれません。

その中で、私たちがちゃんと考えておかなければいけないのは、例えば、今の飯田市竜丘地区、当時竜丘村の公民館報第1号でこんなことをいっています。

公民館には観客は1人もいない、と。

どういうことかというと、みんなが主役を張ろうとするし、みんながより良い劇を作ろうとして、脚本家になったり、舞台を作ったり、道具を作ったりする主役なのだ。傍観しているような観客は一人もいないのだ、といっているのです。

やはりそういう受け止め方、これは言い方を変えれば、自治のあり方を示していると思います。

自分たちで自分たちの村のあり方を考えて、自分たちで地域を作っていくのだ。誰一人として傍観者ではられないのだ、といっているのです。そんなことを私たちはちゃんと受け止めていかなければいけないのではないかと思います。

9 松本市町内公民館に見る公民館の可能性

私たちが入れていただいた皆さんの町内公民館から、何を学べるのかということですが、先ほど申しあげたように、新型コロナの影響で途中3年間ブランクがあり、計6年をかけて調査に入らせていただきました。最初の年に20地区、56館に伺った上で、最終的に三つの町会が選ばれたことになります。

調査結果としてはどうだったかというと、それぞれに特色があるわけです。合併地区もあり、当然地域の歴史や人口構造、役員選出の仕方がそれぞれありますが、共通項もあるのです。地域活動が活発になされていることにかかわる共通項です。

例えば、伝統的な行事があり、そこで皆さんがまとまれるような関わりの作り方があり。それから、キーパーソンがいらっしゃったり、役員同士の仲が良かったり、町会が信頼感や安定感というものを作り出している。役員も輪番ではなく、きちんと説明をして説得をしていく町会が活発に動いていたということもあります。

もう一つあります。次の世代、子どもをしっかりと受止めていて、子どもの数が多い少ないにかかわらず、子どもを対象にした事業がたくさんあるということが共通項として見えてきました。子どもを対象にすると、親世代も積極的に地域に関わるようになるので、活発に動いているという特徴があるのではないかと思います。

そして調査2年目から、鷹匠町町会（中央地区）、新井町会（里山辺地区）、橋場町会（安曇地区）がモデルとして選定され、何度か訪問をしながら、地域の方々とのワークショップなど、議論の場所をいくつか設けて、私たちも勉強させていただきました。

いろいろなワークショップをやってきましたが、各町会の特徴として、例えば鷹匠町

は旧市街に位置付いていて、子どもの数はとても少ないのです。ドーナツ化現象といいますか、松本市の中心市街地の人口がどんどん減ってきている。しかも、高齢化も進んでいて、子どもが少ない。けれども、町会長を中心に、三世代交流会などの子ども中心の活動がとても活発に行われている。民生委員と何か一緒にやろうとって、子ども合宿を発案されて、一緒に動いてきました。

当然いろいろ問題はあって、町会長はアイデア豊かな方なので、どうしてもトップダウンになってしまう。そうすると他の役員にやらされ感が出てきてしまう。

ただ、こういう活動を行っていく過程で何が起こるかということ、子どもや親の中から「もっと私たちの意見を聞いてくださいよ」とか、「我々の事情をちゃんと理解した上で、町会として動けませんか」みたいなことが上がってくるようになるのです。

必ずしも上からの命令で進行していないので、良い関係ができてきている、ということなのですね。そうすると、子どもたちも自分の意見を言えるようになっていくし、それをちゃんと町会長や役員が受け止めることで、次の活動に生かし、やり方を転換させていくという動きが起こっていました。

さらに新井町会ですが、こちらは役員の方々の仲がとても良く、結束力が感じられました。ただ、新しく入ってこられた方が多い地域なので、調査に入った当初、いわゆる新旧住民の関係をどう調整しようかと悩んでいらしかった。これ、よくある話なのだろうなと思っていたのですが、ワークショップをやってみたら、どうもそうではなかった。

旧住民の方々、新住民の方々、子どもだけでそれぞれワークショップをやってみて、何が分かったかというと、新住民と旧住民の間で何かわだかまりがあったり、対立関

係があったりするのではなく、お互い遠慮しあっていて、どうしていいか分からない、というようなことが見えてきたのです。

「どう声を掛けたらいいんだろうか」「旧住民の方が楽しそうにお祭りをやっているんだけど、我々新住民はどう手伝ったらいいかわからないので口が出せないし、手も出せない」と。

さらに、子どもたちには、「この地域をどう見ていますか、どう思いますか」というワークショップをやったのです。大人たちは、例えば「交通の便が良い」とか「自然環境が豊かである」とか、何となく生活の利便性のような、外的なものをおっしゃるのですね。子どもたちはなんと叫んだか。「仲がいい」「大人が子どもを大事にしてくれる」といったことを言うのです。

私たちが、「みんなのお父さんお母さんは、自然環境だとか交通の利便性だとか言っているよ」と言うと、「えっ？」ってなるのです。それは当然ですよ。生活環境が違いますから。子どもたちはそんなことより、「だって大事にされているし、すごく仲良いんだよ」と言ってくれるわけです。そういう町会です。

当然、新住民の方々も子どもをお持ちだし、旧住民の方々も子どもを大事にしたいと思っていることが見えてくるので、そこで今度は、子どもを中心にしながらお互いが交流できるような仕組みがあるのではないですか、という話になっていくわけです。そして、いろいろな取組みがなされてくるようになったということがあります。

それから橋場町会ですが、中山間部で子どもはいませんが、若い移住者の方々が増えている。この若い移住者たちともワークショップをやっていくと、若い方々は自分たちなりの捉え方があって、地元の資源を活用して自分たちの事業をやっていきたいという議論がありました。旧住民の方々か

らすると、高齢化していく中で、彼らと一緒にやっていくという議論もしにくいという意見も出ていた。

それでどうしようかといって一年が終わってしまったのですが、2019年度、私たちが関わらせていただいた上で、話し合う場を何度か作っていただいた。

お互いのコミュニケーションがうまくとれていない。コミュニケーションが取れないとはどういうことかということ、お互いに対する遠慮やお互いを理解できていないというのが根本にあったのではないかと。反発し合っていたわけではなく、気づく必要があったのではないかと。

そうすると、例えば町会長さんが引っ張っていくような今までのやり方から、もう少し住民の方々に関わってもらおうという動きが出てきたり、新住民の方々と一緒になって、子どものために何かできないかという議論が出てきたり、町会としてどうこうというよりは、有志の団体で何かできないか、といったことが出てきたりする。

そういう意味では、地域住民の方々が話し合う場所を持つということは、とても大事だということが分かってきます。ただ、日常生活の中で話し合う場を作るのは、なかなか難しいのかもしれない。そこへ私たちという外部の者、よそ者が入ることによって、そういう場所を作ることができる。気づきを作っていくきっかけづくりができた。

また、いわゆる町会単位の町内公民館という仕組みのあり方と、それを地区に広げていくときに、地区単位のあり方をどう考えるのかといったことも、一つのネックになるのではないかと。

地域づくりセンターと福祉ひろば、それから地区公民館があって、それぞれの関係性やあり方が問われていますが、それと同時に町内公民館、または町会との関わりをどう捉えていくのか。それがもしかしたら

この松本市という大きな全体を考えると、とても重要な鍵になるのではないかと考えています。

本調査でモデル町会を決めていく過程で何があったかという、最初に20地区、56町会を回らせていただき、それぞれにお話をさせていただいた上で、こんなことやるのですよね、という意識を持っていた。ところが、2年目に、ちょっと失礼な言い方をしますと、私たちとあまり関係がないところで、モデル3町会が決められてしまったのです。

調査で訪問していない町会も入っているのです。最初、私たちは反発をしました。議論もしたことがないところが選ばれて、そこでまた新しくやり直さなければいけないのですか、と。しかし、マスコミ発表もされていて変えられないということもあり、2年目から、先ほどお話しした3町会に入らせていただきました。

そのような経緯があったので、1年目の議論と2年目の継続のあり方が切れてしまうのではないかと懸念したのです。どうしようかといういろいろ試行錯誤しましたが、私たちの頭の中にあったのは、ある種のPDCAサイクルみたいなもの、新しい自治を作るために、どうしたらいいか目標設定をしながら、そこに動いていくための議論をしようとしていたのです。

共同研究1年目に試した結果、それがうまくいかない、今度はR-PDCAといって、調査をかけて実態を理解しながら次へ行きましょう、というやり方を考えていたのですが、1年目と2年目が切れてしまったので、それができなかったのです。

それで、2年目どうしようかというときに始めたのが、AARという手法です。何か目的設定をするというよりは、むしろ私たちが入らせていただいて調査し、私たちが実態を理解させていただくことを通して、地

元の方々が自分たちに気づきながら、可能性を探っていくというやり方です。

目的設定をするのではなく、むしろ何か一緒にやりましょうよ、楽しそうなことが起こるかもしれないということから始めて、巻き込んでいくようなあり方として作っていけないだろうか、ということになったのです。

私たちが(地元の方から)教えていただく。すると学生たちが反応する。そんなことを繰り返していくうちに、私たちも巻き込まれていって、「一緒に何かしましょうか」とか「もっと、こういうことはどうですか」と問いかけが来るような関係になっていく。

私たちが介在することによって、例えば「新住民と旧住民」や「役員と住民」といった二者の関係が、私たちを含めた三者関係に組替えられていく中で、「お互いにどうしましょうか」とか、「いや、仲が悪いと思っていたけれど、実は遠慮していただけだったんですね」とか、そんなことが見えてくるようになる。

そして、お互いに気づいていく中で、じゃあ何をやればいいかという議論になり、当事者性といっていますが、私たちも仲間に入れていただき、一緒に考え伴走していきましょうか、という関係ができてきます。

当然地元の方々も自分たちが気づかなかったことに気づいて、「だったら、子どものためにこういうことやると、親も出てくるんじゃないか」とか、親御さんたちの方から「私たちはこれができますよ」と言うような関係が生まれてきた。

そういうことを考える一つの例として、先ほどお話をした岐阜県でのコミュニティスクールづくりですが、そこでもこんなことが起こっていました。

高齢の方々に対して、地元の良いところ、それから自分たちの地元に対する思いを語っていただくようなワークショップを

やったのです。さらに中学生に対しても同じことをやりました。

この地域は、高度経済成長の頃に新規に開発された、いわゆる新興住宅地であって、地元の方にいわせると、モノレールが走るはずだったのに騙されたとかいわれているような所です。山の近くにあるのでとても環境の良い所なのですが、そこで自分たちがいかに地元のふるさとづくりに頑張ってきたかという話をされた。

中学生に同じようにこの地域のことを聞いたら、何と言ったかというところ「自分たちはここが好きだ」と言うのです。

「何で？」と問うと、「素晴らしい自然環境があるから」と答える子が多かったのですが、そのあとでこう言ったのです。「勝手に自然がある訳じゃないんです。地元の大人たちが環境をちゃんと整備をしてくださって、今これがあるんです。だから僕たちはここが好きなんだ」という言い方をしたのですよ。

高齢の方々にそれをお伝えしたら、感激されていました。ちゃんと見ていてくれたということを知ることができた。私たちが関わらなくて放っておけば、たぶん高齢の方々は、何だ、中学生は、と思っている。中学生は思っているけどあまり口には出さないから、お互い理解できていないかもしれない。

だけど、お互いの思いや気づけなかったところを、こうだったんですね、と言語化し、話をしていく中で、皆さんが気づいていく。

そうすると何が起こるかというところ、高齢の方々は、「子どものために一肌脱ぎたい」というようになる。子どもたちは、「大人ってこんなにすごかったんだ」ということが発見でき、もっと好きになる、といったことが起こってくるのです。

そうしたことが、やはり今回の調査でも

起こっていて、お互いを意識していく関係性ができてきたのではないかと思います。

先ほど申しあげたことですが、誇りを持てるようになっていくことが大事なのではないか。地域が壊れていってしまうのは、その地域に対する誇りを失い、自分に対する自信を失ってしまうことが一番大きな要因ではないか、ということなのです。依存してしまうということが起こる。

そして、それをもう少し上のレベルの議論、例えば松本市、または松本の「地区」という議論にしていくと、従来の「地区」の作り方が、地縁関係や上から下へという関係の中で物事を捉えていた面があったのではないか。それが有効に働いた時期はあると思いますが、むしろこの少子化・高齢化、人口減少、担い手不足と言われているような時代に入らないうちで、もう少しこの地縁団体や地縁関係中心の設計のあり方を変えられませんか、ということも議論してきました。

可能性はたくさんある。例えば、町会単位で皆さん動いてらっしゃる。町内公民館がちゃんとある。そして、生活の場において、やはり地域特性があるわけです。

新しく入ってこられた方々もその地域にいらっしゃるし、前から住んでらっしゃる方もいらっしゃって、お互いに何となく遠慮し、気づかないまま、負担感みたいなものだけが増えていってしまっている。だけど何とかしたいという気持ちはずっと持っている。どこでうまく調整をしていくのかが問われるのだと思うわけです。

ある意味、複雑な関係というか裏腹な関係というか、町会の活動を負担だよなど思いながら、だけれど何とかしたいと思っている。そういうことの中で、何もできなくなってしまっている。

そうなるとうち、やはりお互いに相手がそう思っているのだといったことを見つけ出し、気づいていく中で、共通項を作っていくこ

とが大事になってくるのではないかなと思うんですね。

そういったときに、先ほどの小田切さんはこんなことを言っています。

一つは、「暮らしのものさしづくり」といいますが、自分たちが何をしたいと思っているのかを共有しましょう。そうすると、自分はこれならできるよという人が、絶対にいるのだということです。

次に「仕組みづくり」の一環として、対話する場所を作りましょう。町内公民館で週に1回ぐらいみんな集まって、ちょっとお酒でも飲みながら、居酒屋公民館みたいな場所で、お互いに議論をしていくといったことがあるのではないかな。

さらに、少し生臭い話になりますが、地域である程度経済が回ったり、お金が回っていったりする。例えば、お祭りをやって少し収入があったら、それが団体に還元されて次の活動に展開していく、そういうことも少しあった方がいいのではないかな、とおっしゃるんですね。

先ほどのAARは、元々OECD（経済協力開発機構）がラーニングコンパス、学びの羅針盤と呼ぶときに使った言葉ですが、最初のAは「Anticipation」といって、「予測」とか「予期」と訳します。少し裏の意味もあって、良いことが起こりそうだと思うって、ワクワクしちゃうとかウキウキしちゃうというのが「Anticipation」なのです。

すると、当然「Action」次の行動が生まれてくるので、行動しながら「Reflection」振り返る、あまり深刻に評価したり反省したりしない。面白そうだと思うってやり始めると、皆さん上手くいっているかどうか不安になるので、当然振返りますよね。うまくいっていれば、悪乗りしてもっとうまくやっていこうと動いていくし、うまくいかなければ少しやり方を変えて次へ行こうよと言えるような、そういう気軽な関係で回

していくことが、小田切さんがいう、村が再生していくということにもつながっている。

その意味では、モヤモヤしているわけですよ、皆さん自身が。何となくこれをやりたいのだけどうまいかない。何となく新しい人たちと一緒にやりたいのだけど、どうしていいか分からなくて、モヤモヤしている。そこに第三者が入ったり、話し合う場所を設けたりすることによって、言葉にしていけることができる。

そうすると、「それならちょっとできそうだよな」という話ができ、行動へつながっていく。さらに、それを振返りながら次の新しいことを考えて、次へ行こうよと一緒に言えるようになってくる。

「レジリエンス・ポイント」といったりしますが、ぐるぐる何となく回りながら、次へ行こうねということが、起こっているのではないかな。これは、AARの循環といわれていますが、循環よりはむしろ巻込み型になっているのではないかなということです。

このワークショップには、批判してはいけないという決まりがありますから、お互いに言いたいことを言い合うのですが、相手のことを否定、批判はしてはいけない。

そうすると、尊重しながら自分のことを言っていて、お互いに納得できる関係になってくるので、「次にこれやりましょうよ」「ここがネックだったんですね」「だったらここはお互い何とかしよう」という話になり、「これから声掛けしましょうよ」と言えるようになる。

今回、私たちをうまく使っていただいて、皆さん自身が自らの地域のことについて関わっていけるような環境が作れたのだと思います。

その後、コロナ禍3年間を経て伺いました。皆さん、久しぶりだねといって歓待をしてくださいましたが、新井町会へ行ったら私も驚いたのですが、町内公民館の壁に、コロ

ナ禍前に子どもたちとKJ法でワークショップをやった時の模造紙が貼ってあったのです。

たぶん皆さんはこれを見ながら、子どもたちはこの地域をこうやって見ているのだということを思い返しながら、大人として子どもたちをどうしたらいいだろうか、どう関わったらいいだろうかということを、考えていたのだらうと思います。

夏祭りを再開して、子どもたちにもお船(山車)に触れてもらう機会を作ってみた。これは過去になかったことだといいます。そうすると、やはりその子どもの親たちからも、「やって良かったし、嬉しかった」「子どもたちもとても喜んでいた」といった声が上がり、さらに「来年は関わりますよ」とか、「一緒にできませんか」という関係ができてくる。お互いに顔見知りの関係になってくるのです。

よく言われるのですね、挨拶運動をしましょうといっても、全然挨拶を返してくれませんかって言うのですけど、私の知合いに静岡県で「何にもしない合宿」というのをやっている小田さんという方がいて、彼がよく「挨拶が一番あとです」と言うのです。知合いでもないのに挨拶しますか？と。

皆さんいかがですか。大人もしないのに子どもに挨拶しろと言ったってするわけないでしょ、と彼はよく言います。だから、最初に知り合うことが大事であって、知り合ってしまうと、「おはよう」と言えば「おはよう」と返してくれますよ、と言うのです。

そして、挨拶運動を通して声を掛け続けることで、顔見知りになっていく。すると、徐々に子どもたちの方から声をかけてくれる関係ができてくる、といったことが起こるのです。

コロナ禍の3年間、何もできない中で、町会の役員の方々は一生懸命考えていて、子ども中心の活動を行っていくことが一番良

いと気がついていく。

地元のお祭りや伝統行事があって、今まで「山車に子どもが乗っちゃいけない、触っちゃいけない」といわれていたのだけれど、お祭りをつなげていくことが大事なのか、子どもを排除することが大事なのかと考えていけば、当然お祭りを継続することが大事である。そうであれば、お祭りのあり方も変わっていくべきだと考えられていく。

それこそが、「不易」と「流行」という話でもある。変わらないためには変わっていかなければいけないということがあるはずなのです。子ども世代とつながることによって新住民ともつながり、子どもを中心として、町会が新しい活動を始めていくということが起こっている。

さらに、鷹匠町会ですが、ここはなかなか面白くて、コロナ禍で何をやったかというところから公民館に大きいプロジェクターを入れるとおっしゃるのです。そしていま Wi-Fiを整えていると。どうするんですかってきいたら、「ここで子どもたちとスポーツ観戦できるようにするんだ」と言うわけですね。しかも Wi-Fiが通れば、中高生がここで勉強したっていいでしょ、と。

さらに、近くには「タカノバ」という複合施設ができてきていて、町会長さんがマスクを売ったりしていましたが、いろいろな形であちこちに子どもを連れて行ったりは体験をしたり、活動したりしながら地域の人の集いの場所を作っているのです。

コロナ禍をものともしないバイタリティあふれる方々が役員をやってらっしゃることもありますが、様々な規制もありながら、住民の方々の声を聞くということをして盛んにされていたということなのです。

そういうことの中で、子どもたちが集まる場所がほしい。だったら、今の子どもに必要なものは何かというと、Wi-Fi環境が必要なんじゃないか。もっといえば、家で一人で

テレビを見ていてもつまらない。だったら大きなスクリーンで、みんなでスポーツ観戦したらどうか。

しかも、そういうスクリーンがあれば、今度はそれを通して誰かとつながることができる。離れた町会同士でも、いろいろな交流ができるのではないかと考えることができます。

さらに、青山様やぼんぼんも復活させて、子どもが関わり、地域全体が巻き込まれていくような取組みが進んできている。三世代交流キャンプをやってみたり、空き家活用のプロジェクトやったり、移住者の方も含めて新しいアプローチがどんどん進んでいくということが起こり、学校とも連携しながら、子どもを大事に育てようというコミュニティ形成が進んできました。そういった形で地域が動いていく。これが大切ですね。

コロナ禍で活動を停止しなければならなかった。そのときに多くの方々から、町会の活動はしなくたって損はないし、今まで一生懸命やってきたけど、やらなくたって何も変わらないんじゃないかといわれた。その時に、体制ややり方を考え直そうと思ったそうです。そして、支え合う関係を作ったり、安心できる場所を提供したりすることが必要ではないかと考え、子どもを中心に結び付こうとしてきたけれども、居場所を作るためには、Wi-Fi環境やディスプレイを置かなきゃねという話になってきた。

さらに、公民館に人を呼ぶだけではなく、外に出て行く場所として「タカノバ」のようなものを活用したらどうかというようになった。そして、コロナ禍で都市部から移住してきた新住民がいるので、彼らにも関わってもらいたい。

実は若い子たちには、町会活動ってけっこう魅力的らしいのです。皆さんにとっては負担かもしれませんが、私が都内でいろ

いろ活動していても、高校生たちは、「町内会活動は面白い」ってみんな言うのです。

「何で？」と言うと、「だって、みんなでまちつくるんでしょ？」って言うのです。役員が負担だとか、彼らあまり思わないのです。この鷹匠町でも、新住民の方々はみんな町会に入ってもらっしやる、そんなことが起こってきています。

さらに橋場町会ですが、ここは子どもがいないのです。ですがこの間、若い住民の方々が伝統芸能や行事を復活させているのですね。

例えばこの「雑炊橋祭り」。地元で雑炊橋という橋があって、橋の架替えを記念するお祭りや行事があったそうですが、高齢化や担い手不足で止まってしまっていた。それを若い方々が自分たちで発掘してきて、物語の人形を作ったり、布切れで橋に飾り付けをしたりして、地元の方々に声を掛けたとおっしゃるのですね。

そうすると、懐かしいといって高齢の方々も出てきてくださり、そこで新しい関係ができて、他のいろいろな行事が動き出すようになった。こういう若い方々がいて、議論をしながら新たな動きを作っている。

これもやはり「恩送り」なのです。何か見返りがあるとは彼らは全然思っていない、それ自体が嬉しいし、楽しいし、地元の方が喜んでくださることが見返りと言えば見返りですね、という話が出てくるようになってきた。そういったことが、このコロナ禍を経て出てきた新しい動きなのではないかと思います。

さらに今回、最後に大庭町会（島立地区）に入れていただきました。ここは御柱祭の担当が回ってきたのですが、コロナ後、御柱祭を再開するかどうかと、議論になったらしいのです。結局やることになったのですが、やり方を変えようということで、子ども木遣りなどを基本としながら、行

事を復活させていったというお話を伺いました。

1年以上前から準備をされてきて、その途中でコミュニケーションが取れて、次の世代が参画するようになってきたということなのです。

さらに、この「おれんち」ですね。居酒屋公民館を復活させた。今は子どもも来るそうです。もちろんお酒は飲んでいませんが、一緒にジュースを飲んでいると言っていました。大人たちがしょっちゅう乾杯しているので、子どもが横で「何べん乾杯するんだー」とか言っているそうですが、そういう関係の中で地域の方々が自分たちで地域を作っている。そして、困りごとがあれば、そのような場で気軽に相談すると、誰かが助けてくれる関係性が生まれてきているということでした。

やはり町会を持続可能なものとする要素として、お互いに想像力を働かせる、相手のことを慮るということ。また誇りを持つ、ある意味「意地」ですよね。ここで負けちゃならないとか、ここで諦めちゃいけないという思い。そこに私たちよそ者が関わることによって、ちょっと違う見方ができたり、悩んでいるところが本当はそこだったのか、ということが見えてきたりする。

さらに、子どもを基本に考えていくといったこと、また、次の世代をどうするか考えていくことが大事になるのではないかな。

そこに地元が持っている伝統行事や伝統芸能、そうした古いものをそのままではなく、むしろ伝統行事をつなげるために、伝統行事そのものが変わっていかねばいけないのだと考えることで、子どもたちが主役になっていく。そうすると、当然子どもたちもお客様ではなくなっていくから、自分たちでやっていくのだという感覚になるのではないかな、ということなのです。

そして、もっといえば地縁関係にこだわ

らない。地縁関係ベースかもしれませんが、外部から来る人もちゃんと受入れ、関係をつくりながら、交流の中でさらに自分たちの特性を高めていく。そんなことが各地域で起こっているのではないかな。そのようにも見えます。

改めて先ほどの話です。伝統文化や行事、芸能の力といったものがあって、それが形を変えながらつながっていく。担い手が変わりがらつながっていく中で、全ての人たちが、お客さんにならない。みんなが観客ではなく、担い手になろうとする動きが出てくる。

それこそが、実は自治のあり方ではないかな。自治は何か政治的に難しい話をするということではなく、むしろ自分たちが自分たちの地元の主役であって、自分たちが地元を担っていく、そういう形で地域を作っていくということなのですね。

11 FOR ALLの上にBY ALLへ

行政は「FOR ALL」という形で、全ての人にちゃんと機会が行き渡るように政策を作っていきます。それに対して、サービスをくれよ、ということではなくて、むしろ今あるものを使いながら、我々全員がやっていますよという、「BY ALL」の関係に変わっていくことが必要ではないでしょうか。

子どもたちも、実はもうすでに社会の当事者になる力を持っています。これは有名な話ですが、今、全国で私が知っている限り十数名の中高生が、町内会の役員や会長をやっています。

この子は横浜の巨大マンション群の自治会長です。中学校3年生。この子がやった結果、さらに中学生高校生が4人ぐらい仲間に入ったそうですが、そういうことができる子たちが今増えてきているのです。

ですから、子どもたちはお客様じゃなく、大人の仲間なのです。そのように見ていくと、やり方が変わってくるのではないかと思います。

その意味では、「学び」というのは、先ほどいったAARを回していくような関わりを作っていく、プロセス全体を「学び」というのであって、いわゆる「お勉強」ではないということなのです。

12 「はまる」と、「育つ」

各町会で起こっていることは何かというと、今までは一人ひとり強い「私」が積極的に動いて、最終的に自己実現をすることが基本といわれていたのが、本当はこの強い個人が自己実現するためには、良い環境がないと駄目なのだといったことが見えているのではないかな。

私に関わっている大阪のあるホームレス支援事業をやっている方々がおっしゃるのは、路上で転がっているホームレスのおちゃんたちを放っておいても、強い個人にはならない。けども、適切な支援があり、適切な人間関係があると、驚くほど力を発揮して、自分たちで仲間のあり方を変えようとしたり、まちに貢献しようとしたりするようになるのだ、とおっしゃるのです。

それは、本人がそうしようと思っているということではなく、周りの環境の中で力を引出されているかのように見える。それを「ジグソーパズルモデル」と呼んでいます。うまく「はまっていく」ということなのです。

今、まちは新しい三世代といわれている状態になってきています。「世代交代」や「世代間の関係」というと、私たちはすぐに「親子」と考えますが、私たちのこの人間社会は、親子でつながる社会はほとんど経験をして

きませんでした。なぜすぐ「親子」というかという、日本では高度経済成長期に地方から都市に出た若者が、都市で結婚して核家族を作ったので、親子関係しかないのです。

ですが、本来人間の社会は、三世代の中抜きでつながっているといわれます。三世代の中抜き。じじ・ばば・孫でつながって現役は抜かれてしまっているのです。

私たちがすぐ現役親子で考えてしまうのは、都市化したからなのですが、今、都市で三世代の中抜きができる状態になってきています。各家庭は核家族かもしれませんが、独居かもしれませんが、地域で見れば、じじ・ばば・孫がいるはずなのです。

そうやってつながっていく可能性が出てきたということを考えると、家庭内の問題ではなく、コミュニティや町会の問題として、じじ・ばば・孫がつながれるような関係を、作っていくことが可能ではないかな。

さらに「おばあちゃん仮説」ってご存知ですか。生物学の知合いにいわせると、「老後」というのは、子どもを産めなくなったあとの時間のことだ、というのです。老後がある動物って3つしかいないそうです。人間とシャチと鯨だけなのだそうです。犬や猫は子どもが産めなくなるとすぐ亡くなってしまいますよね。

特に人間は、子どもが産めなくなってから死ぬまでに、生まれてから子どもが産めなくなるまでの間とほぼ同じくらいの時間があるのです。今は30年、40年という時間が残っている。

なぜか、というのが生物学的に大きな課題らしいのですが、その仮説として、「孫の面倒を見るように、生きながらえさせられてしまったのではないかな」というのが、「おばあちゃん仮説」なのです。

だから、女性が閉経して子どもが産めなくなっても、まだ30年、40年の時間があ

るのは、実は自分の次の世代をちゃんと育てるためじゃないか。

では、おじいちゃんはどうなるのか。

おじいちゃんは、元々いらないものだと いわれているらしいのですよ。ゴリラの研究をやっている山極先生に言わせると そうなのです。

山極さんがおっしゃる「おじいちゃん仮説」という冗談があつて、おじいちゃんが年を取ると、なぜ体が丸くなっていって、毛が抜けていくのか。子どもに遊んでもらうためではないか、といっています。体型が赤ちゃんみたいになってくるのは、子どもに かわいがってもらうためじゃないかって。

そういうことも含めて、やはり関わって いくことが必要だろうということなのです。みんなの中にちゃんと「はまっていくな」こと によって、楽しいことが起こってきて、次へ 次へという気持ちが湧いてくるので、一歩 踏み出そうとする。お互いがそういう関係 で関わり合っていくと、まち全体が楽しい ものになっていくのではないか。そういう ことを考えていきませんか、ということな のです。

そうになると、もう子どもたちも大人もお じいちゃんおばあちゃんたちも、みんなが 当事者であり、担い手であり、主役でありと いう関係の中で、まちを作っていくことに つながるのだろう、ということなのです。

14 だれもが「ふるさと」の当事者になる社 会へ

「Be-ing」であることで「Do-er」になる、 という言い方が出てきています。ちゃんと いい関係に置かれて「Be-ing」でいると、

「Do-er」「やる人」ですよ、やらないで はいられなくなってくる。気持ちとしてや りたくなってしまう。動いてしまう。無理矢

理ではない。

良い環境に置かれて、お互いに認められ 認め合つて、そして気持ちよく過ごせるよ うになってくると、一歩踏み出そうかな、あ れやってみようかな、これならできるよ、と いうようになる。そういうことをつなげて いくことが大事ではないか。

再び言いますが、これが最初の公民館の 構想の頃にいわれていた、「一人も観客はい ない」という言葉とつながってくるのでは ないか。そして、誰もが主役であり担い手 である。そういう意味では「リーダフル」、み んなが主役で、みんながリーダーとして互 いに協調関係を作っていく社会につながっ ていくのではないか。

そこに松本市の町内公民館の可能性があ る。そうしたものを基盤にしながら、それを 地区へ、さらに市へという形で持ち上げて いくと、新しい松本市のあり方が見えてく るのではないか、そんなふうに思います。

少し長くなりましたが、以上で終わらせ ていただきたいと思います。どうもありが とうございました。

「ふるさと」をつくる公民館

—松本市町会公民館調査からみる公民館の新たな可能性—

牧野 篤
(東京大学大学院教育学研究科)

松本市と東京大学社会教育学・生涯学習論研究室との共同研究

多世代参画型地域共生コミュニティづくりモデル事業

2018年度 市内20地区56町会にヒアリング

2019年度 3モデル町会
(新井町会・鷹匠町会・橋場町会)
町会公民館への訪問
・インタビュー
・ワークショップ

コロナ禍で活動停止

2023年度 調査再開
大庭町会を加える

	地区	町会	ヒアリング日時
1	島立	三の宮、小柴、町区、大庭	2018/8/12(日)
2	白板	宮淵東、城西町、宮淵日向	2018/8/19(日)
3	城北	御土町、白金町、蟻ヶ崎東、蟻ヶ崎台	2018/8/20(月)
4	中央	上土、今町1丁目、土井尻	2018/8/21(火)
5	安曇	島々、稲核、沢渡	2018/9/28(金)
6	奈川	大平、金原、黒川渡	2018/9/29(土)
7	寿	寿田町、百瀬	2018/10/18(木)
8	里山辺	薄町、兎川寺、新井	2018/10/18(木)
9	東部	片端町、東町2丁目、清水中、餌差町、下横田町	2018/10/19(金)
10	笹賀	二美町2丁目	2018/11/15(木)
11	岡田	岡田町、塩倉、東区	2018/11/16(金)
12	庄内	並柳団地	2018/11/17(土)
13	第一	中条中、伊勢町3丁目、中町3丁目	2018/12/13(木)
14	松南	芳野、宮田中	2018/12/14(金)
15	今井	中村、南耕地、東耕地	2018/12/14(金)
16	松原	第1、第2、第6	2018/12/15(土)
17	内田	第1、第3、第5	2019/1/16(水)
18	芳川	平田、小屋	2019/1/17(木)
19	梓川	上野、横沢、上大妻	2019/1/17(木)
20	田川	渚本村、巾上南、巾上西	2019/1/18(金)

Well-being (ウェル・ビーイング) :
(幸せを感じられる状態にある)

よりよく生きる	(positive)
よりよくいる	(存在)
よく在る	(状態)
そう在るようにして在る	(常態)
そう在るようにして在らしめられる そう在るように受け入れあう	(passive)



1. 「よきこと」に気づき、実践する : コロナ後の社会への希望

コロナ禍で起こった「恩送り」

地域の高齢者を心配して布マスクを縫って届けた中学生たち

『中日新聞』(岐阜地域欄)2020年4月17日

校区の子どもたちのために布マスクを縫って配付した高齢者住民たち

⇐互いに相手を慮って、うれしかった！！

Compassion

Compassionate Community

共感

基本はPassion=悲しみ・苦しみ

Com=分かちあう

**Compassionとは悲しみを分かちあうこと
相手の身になること**

2. 転換点の社会

日本社会はいま、転換点にある

1. 少子高齢人口減少社会⇒人生100年時代の社会
⇒人生のステージ転換の必要
 2. 経済的な「変われなさ」⇒経済の停滞
 3. 人々の階層格差の拡大
 4. 人工知能の急速な発達
 5. 依存から自立・自律が求められる
 6. 認知症の急速な拡大
(2060年には総人口の13パーセントが認知症を患うとの予測も)
 7. リモート生活の拡大⇒生活の中に「働くこと」を組み込む
- 加えて、コロナ禍・激甚災害の頻発
さらに、気候変動
そして、戦争

危機：crisis＝岐路

危機の時代には、未知の大海に向けて「希望」を描く「勇気」が必要

希望へのビジョンが「危機の時代」の痛みを耐えさせる

だが．．．．．

いまや、根源的危機の時代へと立ち至ってしまったのでは？

天文学的には、50億年後には地球は消滅し、

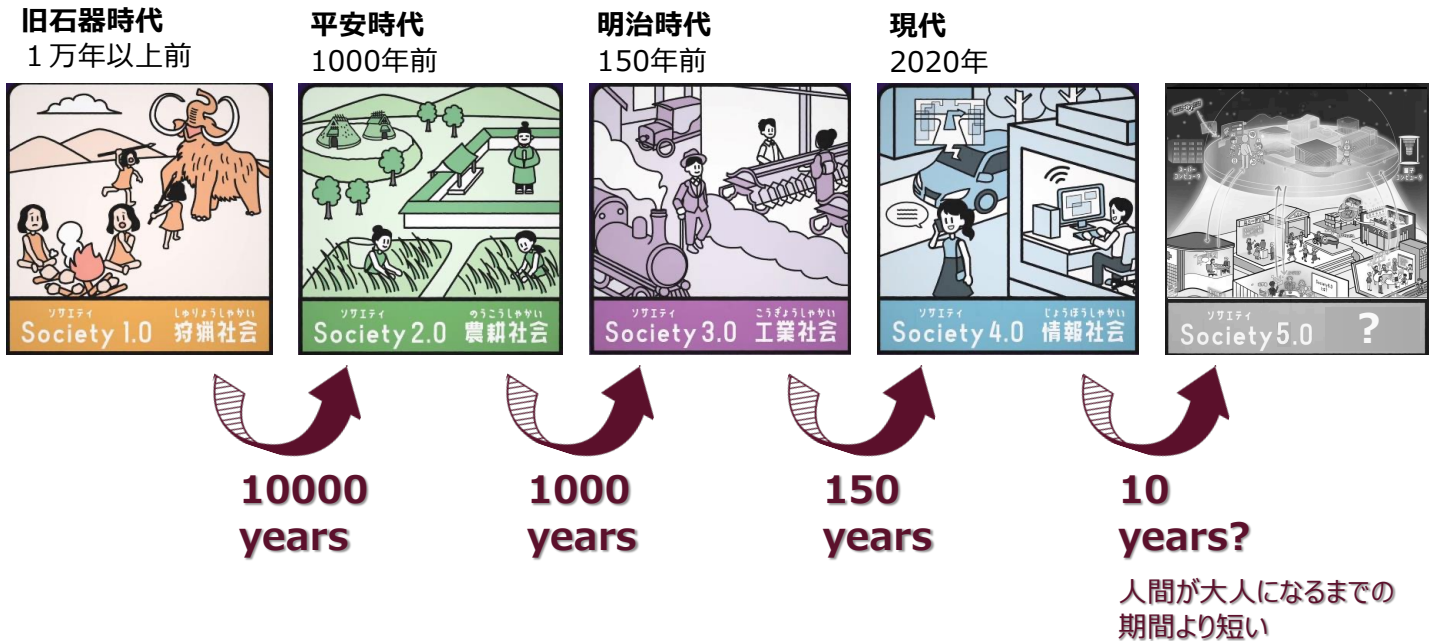
また数か月後に天体衝突で人類が絶滅する可能性はある。

しかし、今世紀末（100年後）には人類は、過去に経験したことがないほどの過酷な環境で生きることが余儀なくされる。どれくらい過酷な状況になるかは、現在の我々がとる態度次第である（天文学者・岡村定矩東大名誉教授）

（神野直彦氏提供資料[人生100年社会デザイン財団フォーラム20230510]参照）

Rapid social change

社会の変化のスピードが速くなっている



岩岡寛人・(一社)ディレクトフォース・シンポジウム資料(20230726)より

コミュニティと「学び」が焦点に

⇐日本社会は明治以降、国の枠組みが動揺すると
コミュニティが政策的ターゲットになる

総務省：地域運営組織・地域生活総合支援サービス

厚生労働省：地域包括ケアシステム・地域共生社会づくり・孤独孤立防止

国土交通省：国土強靱化・防災訓練・孤独孤立防止

まち・ひと・しごと創生会議：小さな拠点

経済産業省：未来の教室、半径50センチ革命、STEAMライブラリー

農林水産省：農村地域づくり事業体

文部科学省：コミュニティ・スクール、地域学校協働活動、GIGAスクール

全国社会福祉協議会：福祉教育から社会教育へ

政府：人生100年時代構想会議

主要テーマ：学び直し・リカレント教育

世界的課題・社会の構造的変化

根源的危機の時代

**これを人々の日常生活で引き受けざるを得ない
⇒地域社会でどう受け止めるのか**

コミュニティと自立が課題化

**どれも〈学び〉を基盤にしないと機能しない
〈学び〉が社会の基盤となる**

3. 人生100年時代の到来

2007年生まれの子どもの予測平均寿命=107歳

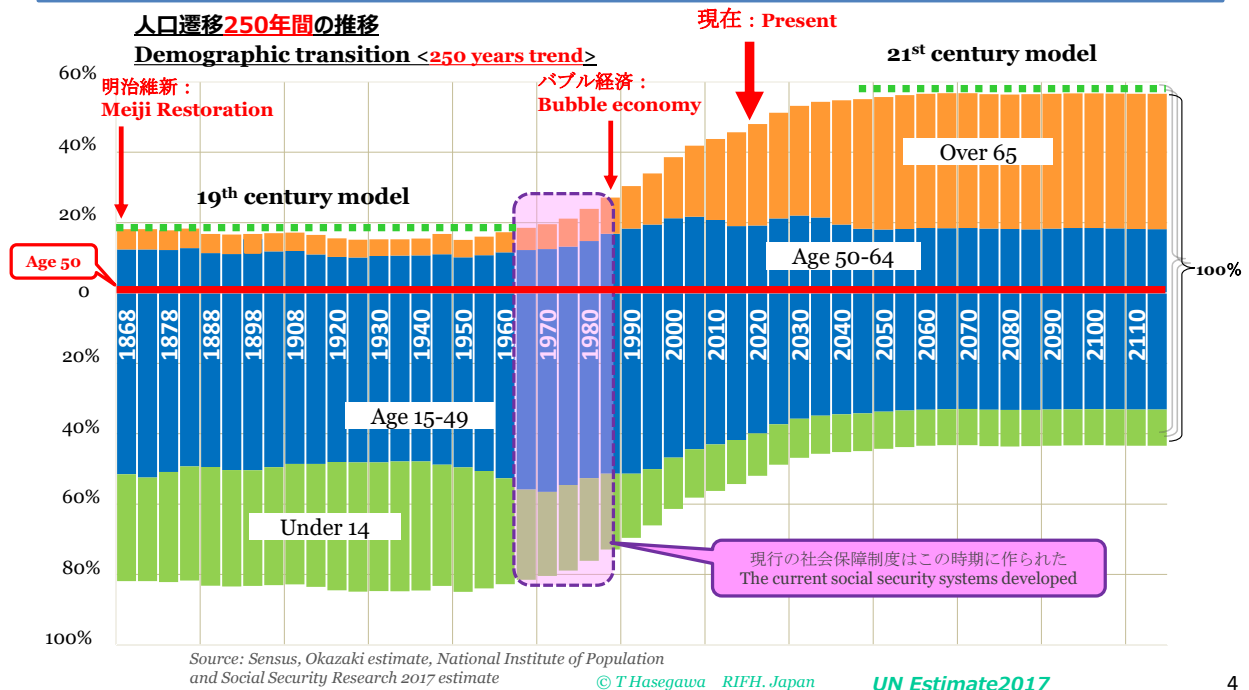
日本人の平均寿命=男性：81歳 女性：87歳

死亡最頻年齢=男性：87歳 女性93歳

健康寿命=世界で最も長い

人口構造の遷移 Japan's demographic structure & transition

- There has been a **major shift in the population structure** from the 19th to the 21st century.
- It will be **impossible** to maintain the **social security systems** established in 1960-80s.



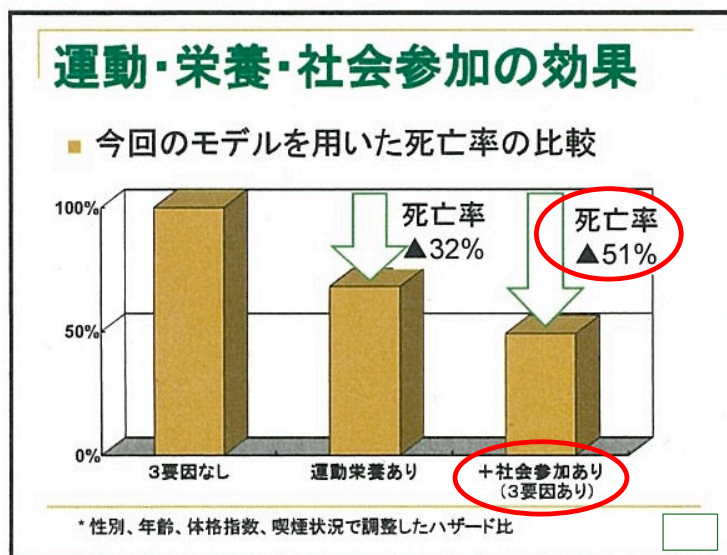
少子高齢人口減少社会
から
人生100年社会へ

高齢者への対応から
子どもたちを主役に
持続可能な社会をつくる

4. 「かかわり」が大切な社会へ

静岡県高齢者コホート研究

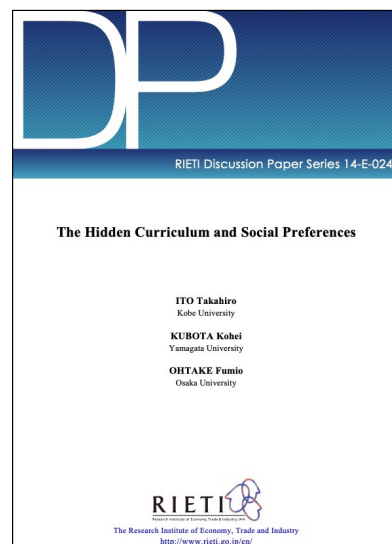
【高齢者14,001人の追跡結果】
の運動・栄養について良い習慣を持つこと、更に**社会参加**により死亡率が大幅に低下



出典:「静岡県高齢者コホート調査に基づく、運動・栄養・社会参加の死亡に対する影響について」
2012年、東海公衆衛生学会、平山朋他

小学生時代にボランティアなどの
経験を積んだ者は社会貢献意識が高まる

参加・協力を経験した子どもは、
他者のために行動することを好み、
利他性と互惠性が高まり、
他人への協力を好み、
国への誇りを持つようになる傾向がある

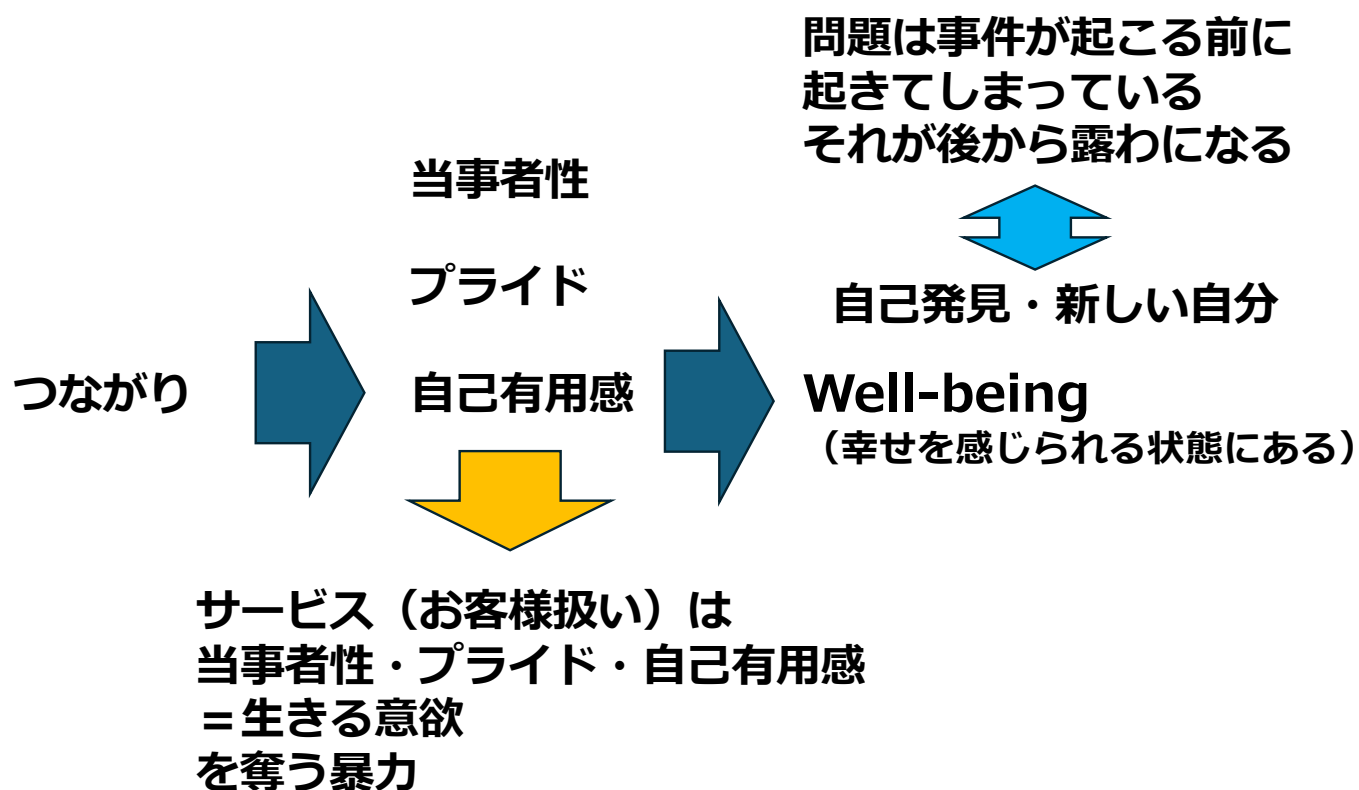


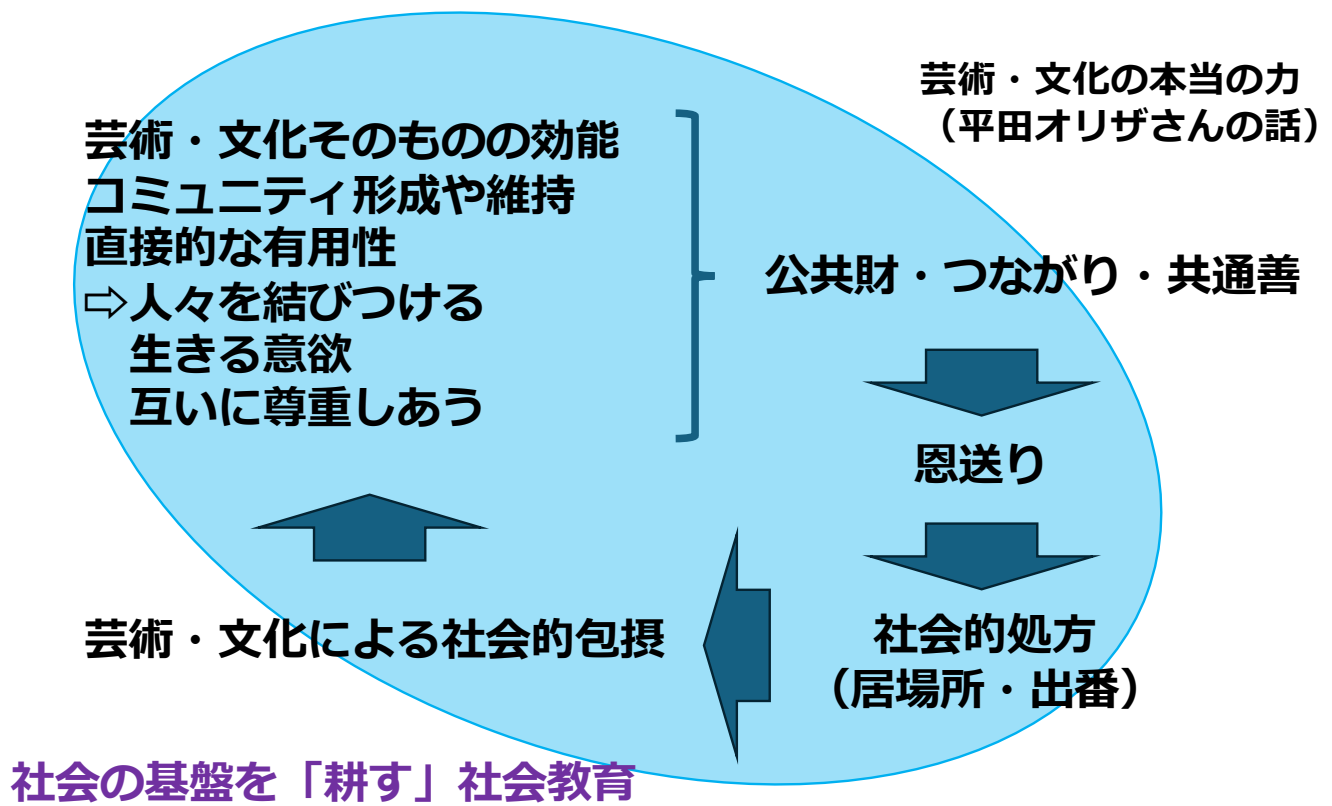
5. 人は何が大切なのか

過疎地三つの空洞化（小田切徳美：明治大学農学部）

人の空洞化
土地の空洞化
集落機能の空洞化

⇒誇りの空洞化 ⇒集落の解体・自治の解体
⇒無住化





恩送り

6. 社会教育の概念を問う

第4期教育振興基本計画（2023年6月閣議決定）

基本コンセプト：

「持続可能な社会の創り手の育成」

「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」

**「我が国の将来を展望したとき、
教育こそが社会をけん引する駆動力の中核を担う営みであり、
一人一人の豊かで幸せな人生と社会の持続的な発展に向けて
極めて重要な役割を有している。」**

社会教育は、
本計画において、
改めて地域コミュニティを基盤とする社会の土台である
人と人との「かかわり」や「つながり」の土壌を耕しておく
という役割が強調され、
それが社会の持続可能性およびウェルビーイングと
結びつけられている

社会教育が土壌を耕すことで、
この社会が豊かな基盤をつくることになり、
それが防災や福祉、産業振興、文化交流など、
いわば首長部局の一般行政が有効に機能することにもつながることが指摘

少し踏み込んだいい方をすれば、
一般行政の社会教育化とでも呼ぶべき方向性が示されている

「学び」による住民自治を
社会により深く実装することが求められる時代となったとの認識

7. 地域をつくる公民館・社会教育

公民館の機能

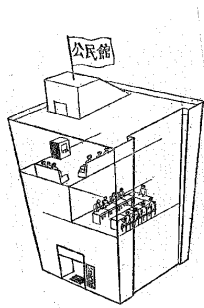
『公民館の建設』（寺中作雄著）より

1. 公民館は社会教育機関である。
2. 公民館は社会娯楽機関である。
3. 公民館は町村自治振興の機関である。
4. 公民館は産業振興の機関である。
5. 公民館は新しい時代に処すべき青年の養成に最も関心を持つ機関である。



要するに公民館は**社会教育、社交娯楽、自治振興、産業振興、青年養成の目的を総合して成立する地域の中核機関**である。

民主的社會教育機関です

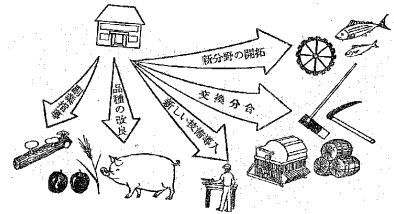


村の茶の間です

親睦交友を深める施設です



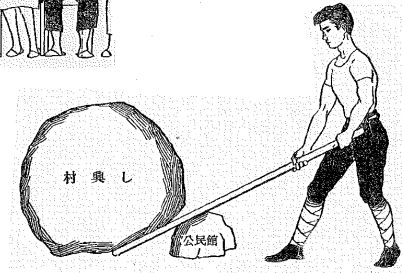
産業振興の原動力です



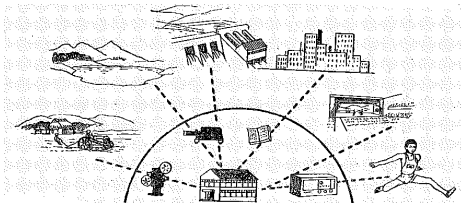
民主主義の訓練場です



郷土振興の機関です



文化交流の場です



小和田武紀『公民館図説』(1954年)より：文部科学省提供資料

地域コミュニティの最先端

最先端を住民が支え、担う

ワクワクする生活が生まれる

ワクワクがさらに次の生活をつくり出す

次世代を育成する

8. 「認めあう社会」「かかわりあう社会」をたくさんつくる

a. 都市部の空き家を開放し拠点化する

「住み開き」：

自分の空間をちょっと開いて、公共空間にする

(財)世田谷トラストまちづくり：

「地域共生のいえ」

岡さんのいえTOMO



定期的な居場所をつくる / 開いてるデーカフェ＆駄菓子屋



b. 「学び」と「人づくり」を一つなりに ： 島根県益田市「人が育つまち」「人が輝くまち」

益田版カタリ場の種類

小学校カタリ場

小学生 × 高校生



「思春期」を終えた高校生から、これから「思春期」の小学生へ

- 卒業前の高校3年生とこれから中学生の小学5-6年生によるカタリ場
- 小学生が、中学・高校生活の未来のイメージを描くことができる
- カタリ場を受けてきた高校生は、学業生活を終える最後に、自分が語り手として、小学生に語る

中学校カタリ場

中学生 × 地域の大人



「挨拶」の関係から、「相談」の関係へ

- 中学校区の地域の大人と中学生によるカタリ場
- 公民館と連携をして、地域の担い手がカタリ場に参加
- 地域で会う機会があるからこそ、しっかり関係をつくり、その後の地域での活動づくりのきっかけへ

高校カタリ場

高校生 × 企業の大人



ちょっと年上の先輩と、ちょっと先の未来を描く

- 社会人の若手や大学生と高校生によるカタリ場
- 市内企業と連携をして、若手職員がカタリ場に参加
- 住んでいる地区を超えて、多様な大人との繋がりづくり、活動づくりのきっかけへ



公民館を拠点とした、中学生地域活動チーム



【北仙道地区】
陽光会



【豊川地区】
とよかわっしょい



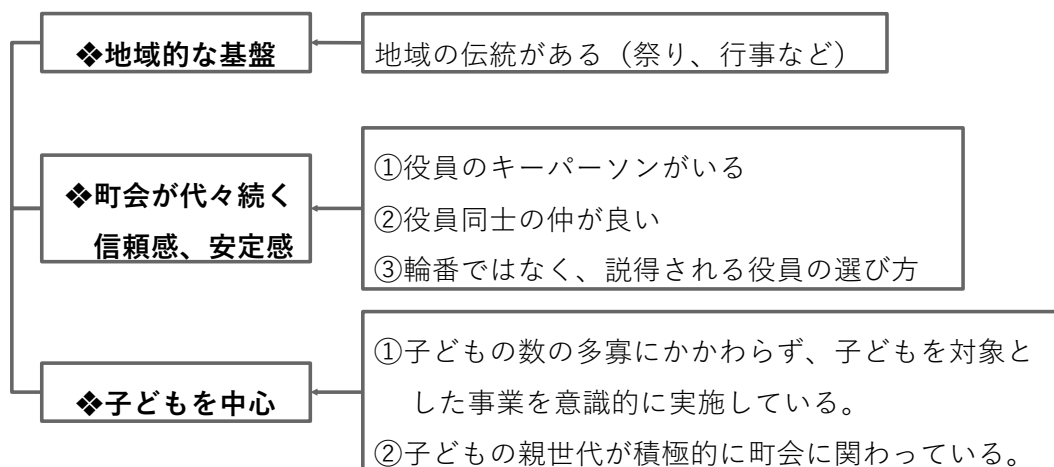
【匹見3地区】
匹中会

9. 松本市町会公民館に見る公民館の可能性

2 2018年度調査の振り返り

2018年度の考察と課題

地域活動が活発に動いている町会の傾向



⇒ 2019年度の調査へ

各町会の調査報告：鷹匠町会（旧市）

子どもは少ないが、**三世代交流会など子どもを中心**とした行事がある。

➡ **子ども合宿**を新たに実施。

町会長を中心にしたトップダウン形式

町会役員や地域住民を“巻き込む”仕組みや、地域住民たちで話し合えるシステムづくりが課題。

➡ ワークショップ・子ども合宿の実践を通して、**町会内のコミュニケーション問題への気づき。**

43

各町会の調査報告：新井町会（新市）

旧住民役員同士の仲がよく、**町会の結束力も強い。**

➡ **新住民との関係づくり**に踏み出せていない。

➡ ワークショップを通して旧住民と新住民との間の**共通認識の存在**への気づき。

「子ども」や「自然」といったキーワードが町会の魅力として挙げられた。これらは新井町会の強みでもあるため、これらの要素を十分に活用しながら町会活動をしていけると、もっと住民間に交流が生まれる可能性がある。

——【新井町会の良さを考える】新旧住民交流ワークショップ

願望：子どもを中心にした今ある行事を活用して、新住民と旧住民の交流を盛んにしたい。

44

各町会の調査報告：橋場町会（中山間部）

若い移住者が入ってきており、町会活動にも積極的に参加している。**町会に子どもはいない。**

近隣の大野川小学校・中学校では学校と地域の交流が盛んだが、安曇小学校・中学校のほうは少ない。

➡ 学校と地域の連携の促進

➡ 町会単位を越えたつながりへの模索
安曇地区全体でのまちづくりの可能性

45

2019年度、3町会に見られた「変化」

この1年は、町会単位で役員や住民同士が「話し合う場」を、東大を媒介として作ってきた。

➡ **コミュニケーションが課題**であったことへの気づき

➡ 「反発」ではなく「気づく」ことへ

鷹匠：トップダウンから**住民を巻き込むシステム**づくりへ

新井：結束力の強い旧住民中心の町会から**新住民とともにつくる町会**へ

橋場：地縁組織から**有志団体**へ

46

「町会」単位のコミュニティ

**「住んでいること」の共通性
「生活」の個別性**

地縁団体の負担感

それでもなんとか、という気持ち

裏腹な感情が背中合わせ

47

「気づき」とは

**それを相手の中に見つける
第三者が否定しない
自分の中に見つける**

**何とか、という気持ちを
第三者も含めて共有する**

何かできるのでは、という感じ

48

モヤモヤしているものが、
なんとなくはつきりする

それを言葉にしてみる

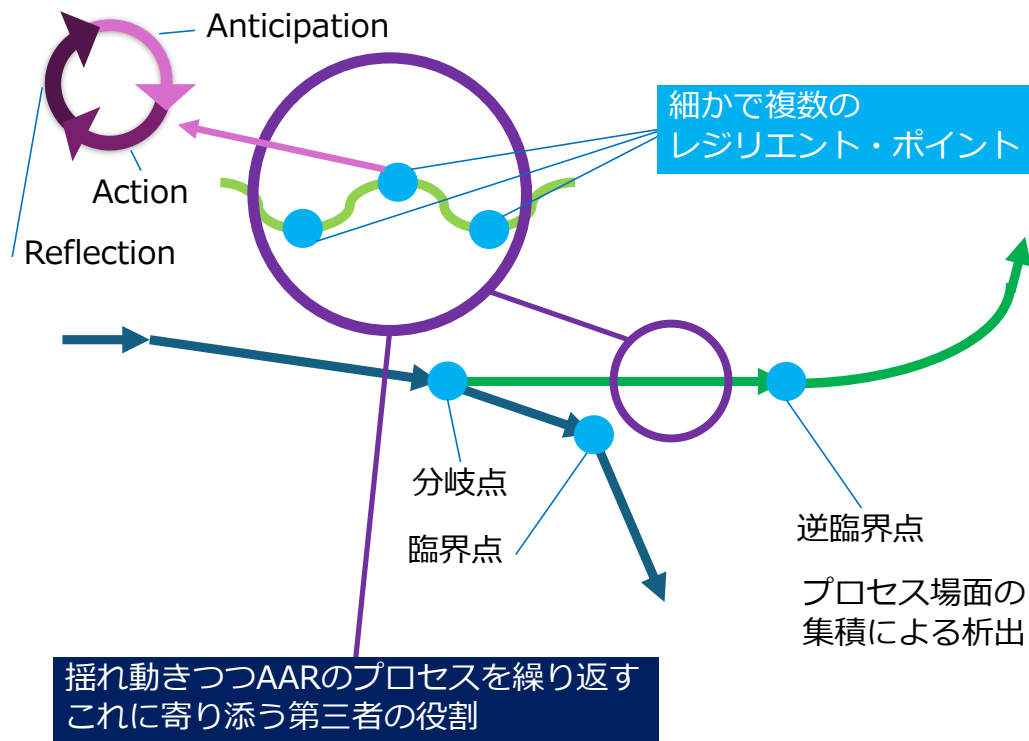
それを行動にしてみる

振り返って、次の楽しいことを考える

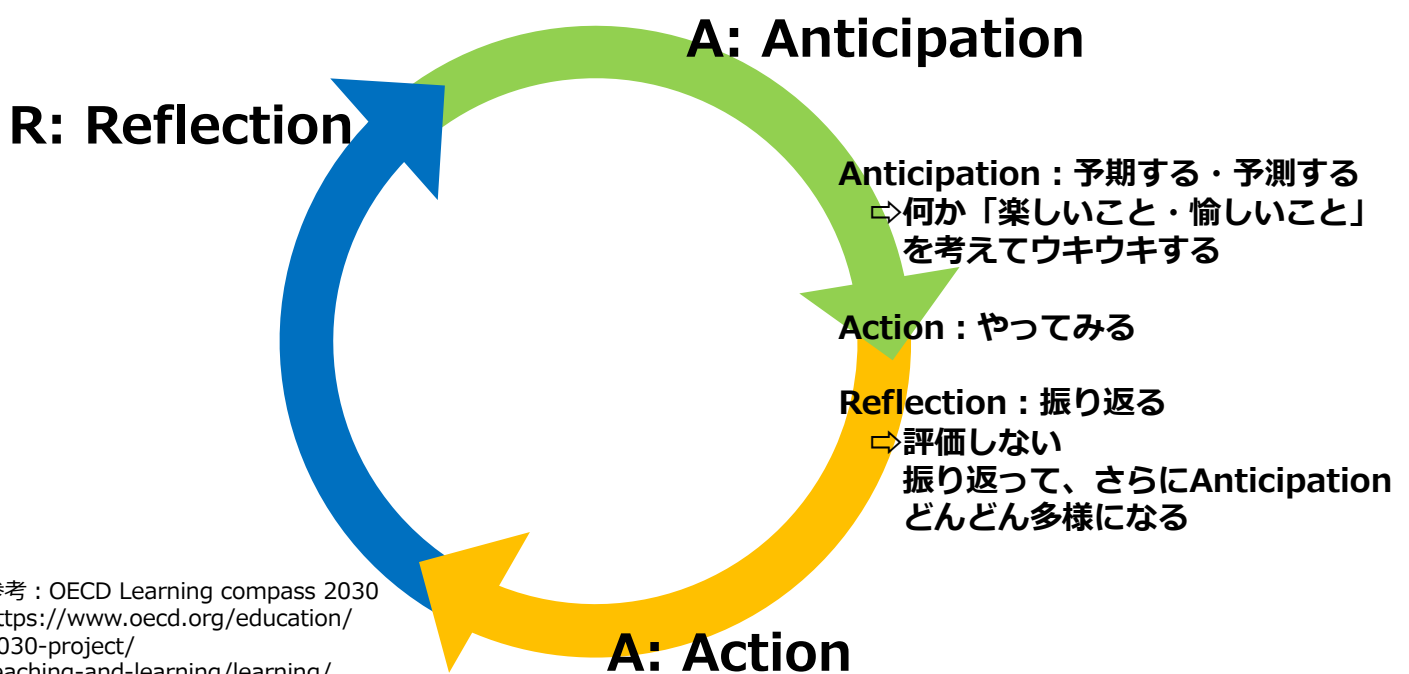
49

この過程に、**第三者**が介在する

50



51



参考 : OECD Learning compass 2030
https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning-learning-compass-2030/in_brief_Learning_Compass.pdf

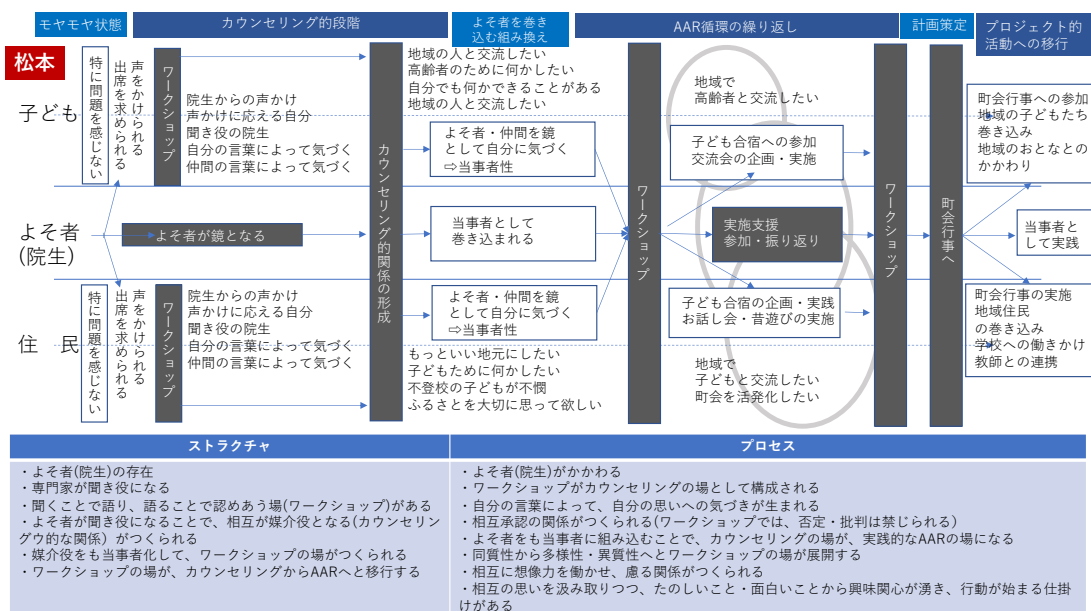
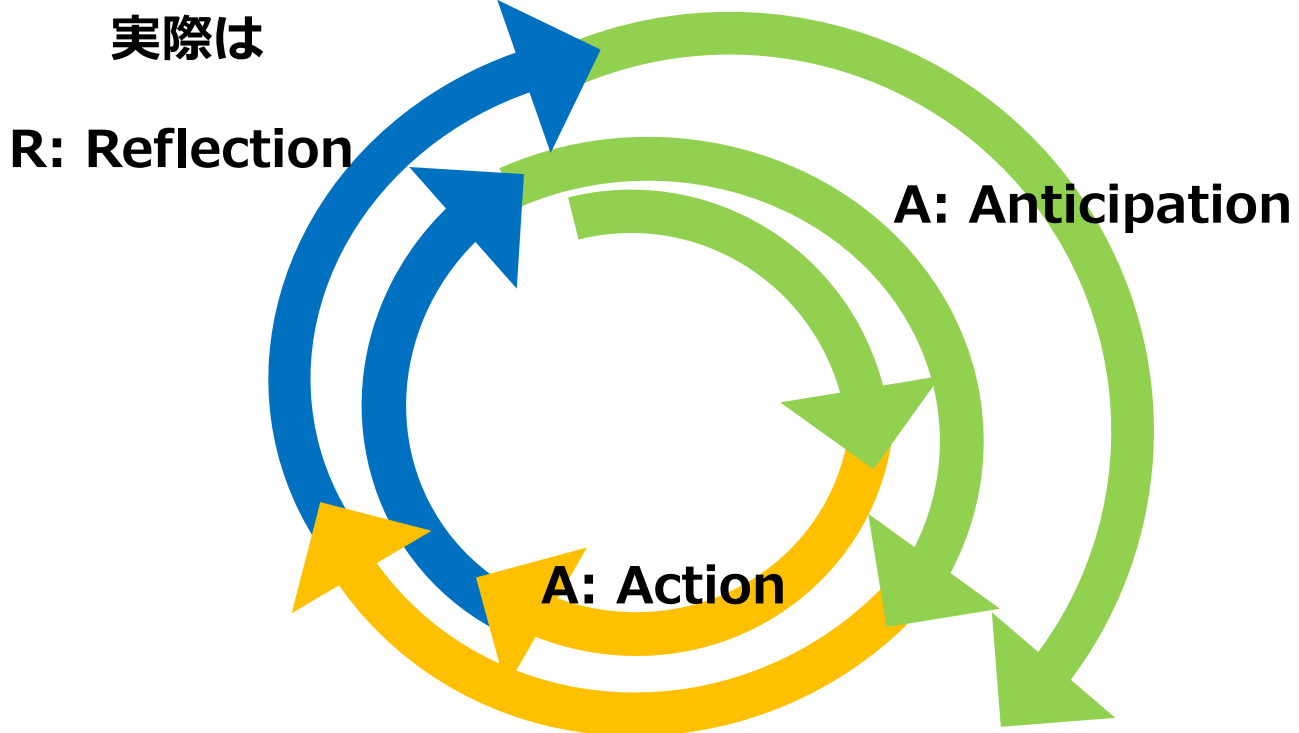


図 松本のワークショップのストラクチャーとプロセス

第三者が介在することの意味

55

コロナ禍後の動き

新井町会



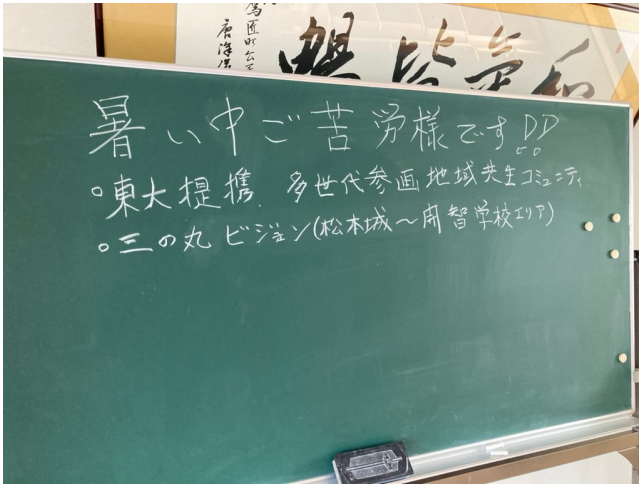
行政依存または地域離れを防止するために、
町会の「子どもが多い地域」という特徴を十分に理解した上での工夫を模索

子ども世代とのつながりと新住民とのつながり

町会の新旧住民が子どもを中心としてつながる

伝統を継続することと子どもを育てることが結びつく

鷹匠町会



これまでの活動の上に、子どもを中心として、住民が結びつく在り方を模索

公民館のデジタル化・大画面ディスプレイの整備

⇒子どもの居場所化

公民館に呼び寄せるだけでなく、外に出て人々を結びつける

⇒タカノバ

コロナで都市部から移住してきた新住民が新たな事業を開きつつ、町会加入

新しい動きをつくりつつ、住民が地域に展開する

橋場町会

若い新住民が伝統芸能・行事を
新しい感覚で復活

地域住民を新たに結びつける

子どもはいないが、住民の結束が強化

橋場新聞 一雑炊橋祭りー

橋場公民館会報

今年の夏祭りは雑炊橋祭りとして実施予定です。感染予防をして祭りをするという事で「展示」や「展示」という手法で実施することが公民館で可決しました。14日をメインにお盆の時期3日程度実施いたします（7月中旬に決定）

- 1 雑炊橋の伝承「お節と清兵衛」人形を制作し東屋に展示（人形約70cm）
- 2 雑炊橋に旗を装飾 橋の横干左右に古布で和風なカラフルな旗を渡す
- 3 東屋の装飾 セタや風鈴・お手水などを飾り、彩とお盆の時期お迎えも含む演出する
- 4 見学形式の祭りを内外にインフォメーションする

【地区のみなさんにご協力をお願いする活動】

☆ 雑炊橋の旗を作る ☆

- | | |
|-------------------------------|-----------|
| ①古布のご寄付 | 7月中旬 |
| ②浴衣を裁き反物にする作業 | 7月中旬～8月初旬 |
| ③旗の紐通し口を作る（ミシンでも 手縫いでもなんでもOK） | 同上 |
| ④作った旗に45m紐を通して橋の左右横干に設置 | 祭り当日 |

無理なくできそうな作業をお願いしたいのでよろしくお願致します。
※作って頂いた旗は毎年使用する予定で大切に使っていきます！！

7月10日ごろ迄 ご不要の古浴衣 古反物（綿or化繊）回収

※井上家 不在時裏の縁側に置いて置いてください

- 一古浴衣や反物の綿や化繊を集める理由としてー
- ・旗作るのに 縫しろが少なくて良い（縫うのは 紐通しだけ1箇所）
 - ・雨が降っても数日野外に設置できる
 - ・洗濯やアイロンなどしやすく 保管もしやすい

1987(562)竣工5.8日 35軒 PC斜張橋



橋場



大庭町会

御柱祭の担当に当たる：子ども木遣り
一年以上前から準備

⇒コミュニケーションが取れる
実施

⇒町会の行事も復活

伝統行事だけでも子どもたちに伝えたい
子ども向けのイベント開催⇒楽しかった

高齢者から子どもまでが伝統行事・防災にかかわる
「おれんち」も復活

子どもをお客様にしない

全戸配布 平成26年6月18日

大庭町会の皆さんへ

「おれんち」オープンします！

公民館長 藤森喜久代

日頃から町会・公民館活動にご協力ご理解を頂きましてありがとうございます。

“明るく元気で楽しい”をモットーに身近な交流の場として町会の皆さんに気軽に公民館を利用して頂きたいと思ひまして、7月5日（土）より毎月第1土曜日午後6時から公民館居酒屋「おれんち」をオープン致します。公民館居酒屋は市内公民館活動の先駆けとして修賀地区二栗町2丁目公民館長の“住民の心をつなぐ”活動の一環として公民館居酒屋「よってけや」を開きました。そしてそんな活動の中から皆が支えあい、豊かに生活できるまちづくりの理念が芽生え地域づくりのモデルケースとして注目されています。

そこで「大庭公民館でもやってみよう！」と若い人達が手を挙げてくれ今回企画致しました。

「おれんち」は飲み物やつまみは予め用意はしません。又会費もありません。お出掛け頂く皆さんに自分用の飲み物、つまみを持参して頂き、二十歳以上であれば男女の別は勿論の事、お酒を飲める人、飲めない人に関わらずおしゃべりが好き、楽しい事が好き、仲間づくりや地域づくりに関心のある人など、みんなで集まっておいに語りませんか。そしてそこから町内の人たちがより深く知り合い、互いの違いを理解し、支えあう地域づくりのきっかけとなる事が出来たらこんな嬉しい事はありません。

より良い町会目指して心とこころの交流を深めていきましょう。みなさん是非お出掛け下さい！

記

1. 日時	7月5日（土）午後6時～9時（以降毎月第1土曜日午後6時から）
2. 場所	大庭公民館
3. 持ち物	自分用の飲み物、つまみ
4. 会費	無し

以上



町会（地域コミュニティ）を持続可能なものとする要素：

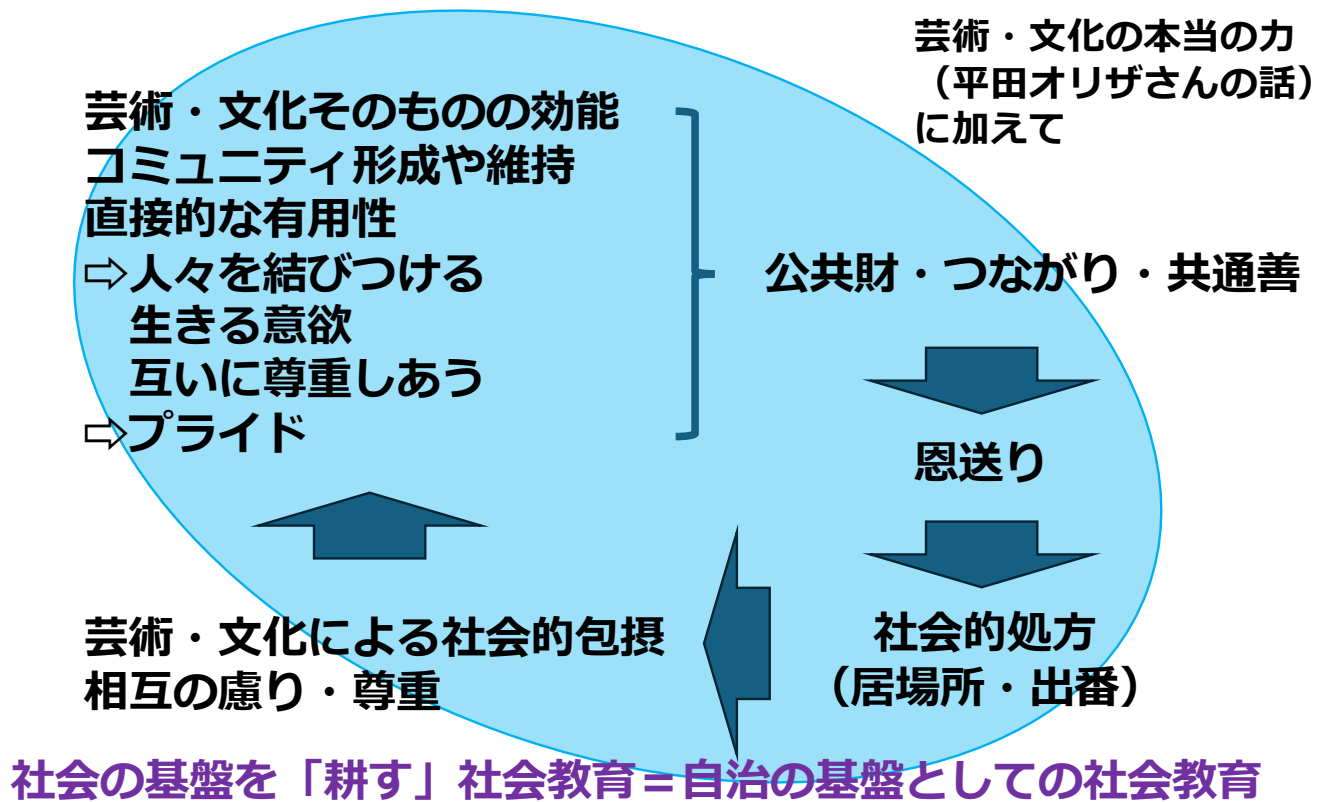
思い・誇り・意地
よそ者
子ども

伝統行事・伝統芸能
伝統と革新

子どもをお客様にしない

誰もが当事者となる

地縁関係にこだわらない⇒アウトリーチ、外からのかわり、交流



「自治」とは何かを教えてくれる
↓
誇りと他者への思いに定礎された
誰もが当事者となる関係をつくり続けること
↓
人と人とのかかわりを耕し続けること

10. 当事者になる要素

〈ちいさな社会〉づくりの取り組みは
何をやっているのか

相互承認関係をつくる
非認知能力を向上させる
社会に信頼感をつくる

人々が自律する
自己肯定感を持てるようになる

⇒ **誇り・プライドを保ち、認めあう関係**

11. FOR ALLの上にBY ALLへ

「学び」 = 「よきこと」に気づき、実践する
⇒社会に「共通善」を実践する営み

「学び」を「公共財」として実装する事業

「よきこと」 = 「共通善」 = 「在る」こと

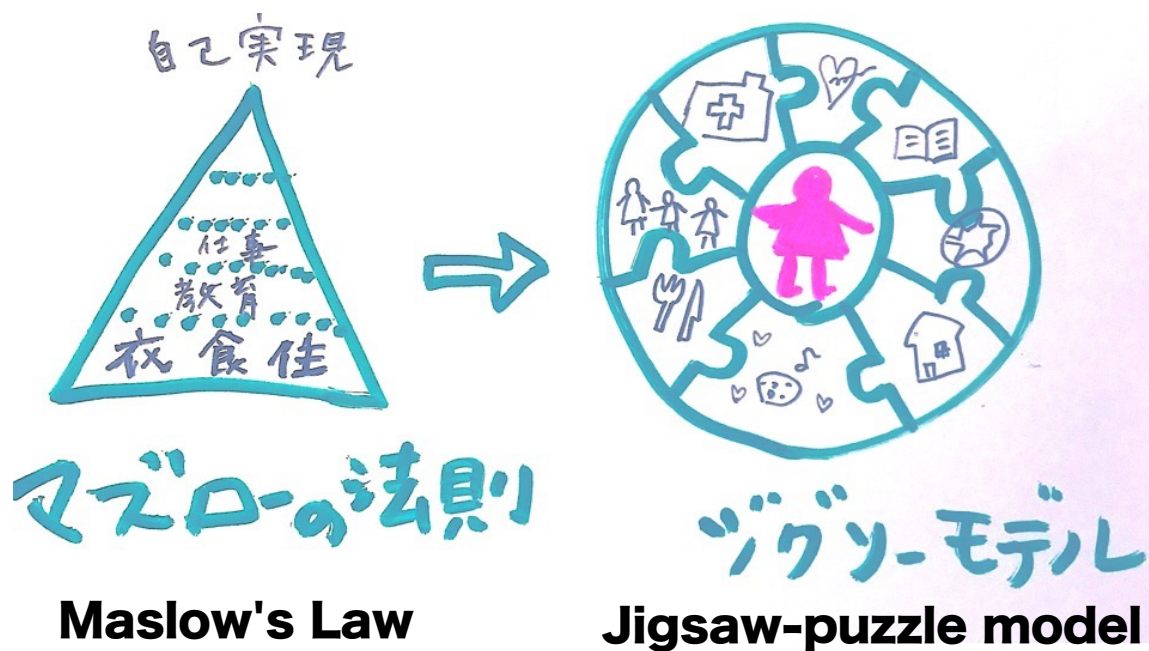
全員が当事者になる

自分を尊重してもらえ
相手を尊重している

信頼感と想像力

「楽しい」「嬉しい」

12. 「はまる」と、「育つ」



上田假奈代「こえとことばとこころの部屋コロシアム」、東京大学大学院教育学研究科社会教育学研究室主催公開講座「社会教育の再設計・シーズン3」における講義（第2回・2022年2月17日、オンライン）

「はまる」とは、認められること

受け入れられ、受け止められること

お互いに思いやり、一緒に「在る」こと

「はまる」とは

みんなに巻き込まれて
みんなと一緒に、
Well-being(在るように在らしめられる)に、
なること

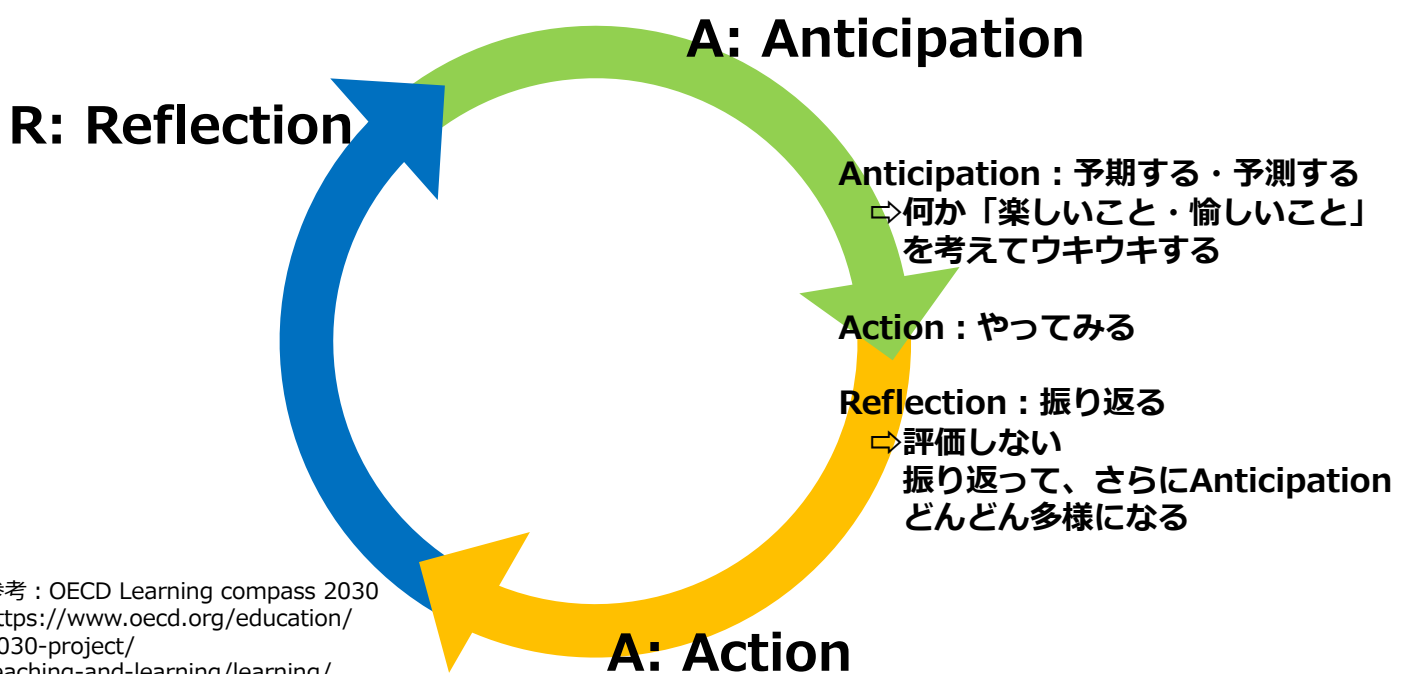
⇒自ら在る「自治」の主演となること

13. 「ちいさなしあわせを重ねあう」社会

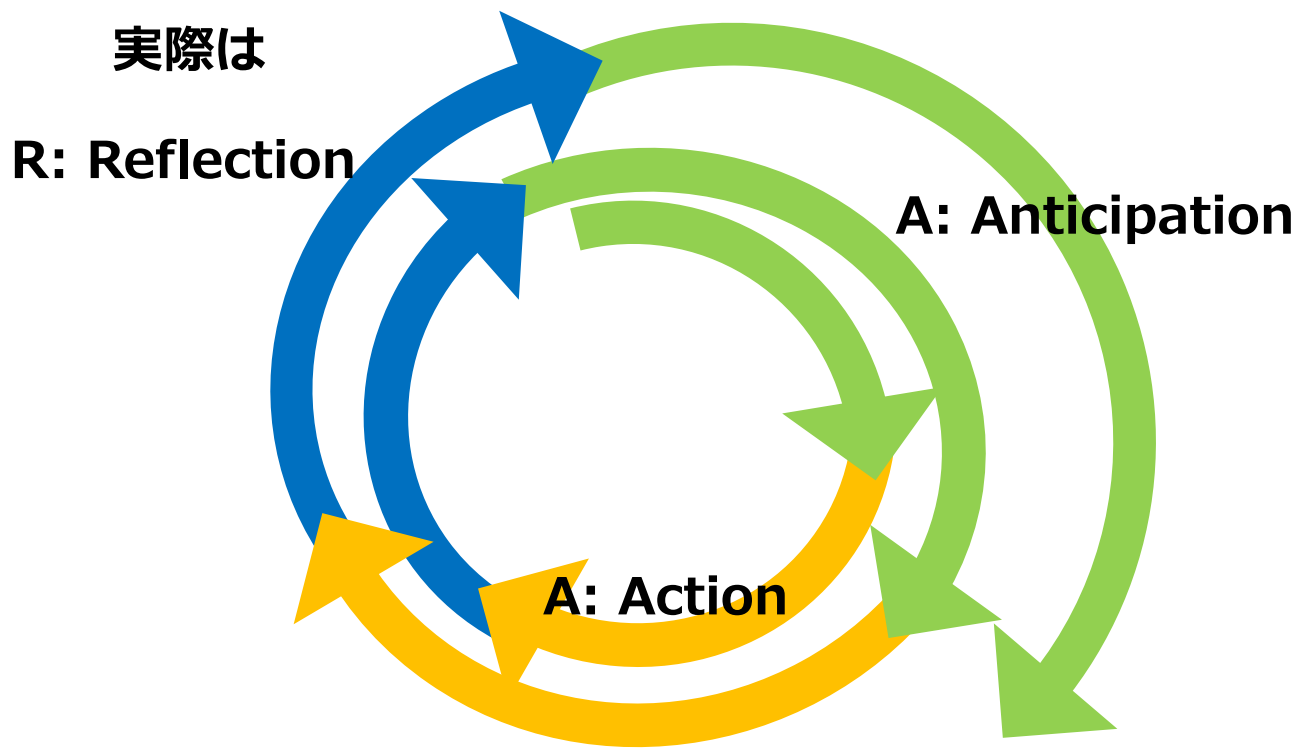
「ひと」との「あいだ」が自分の居場所になる

「ひと」が「ふるさと」となる

「ふるさと」とは自分に「誇り」を持てること
そのように在るように在ること



参考 : OECD Learning compass 2030
https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning-learning-compass-2030/in_brief_Learning_Compass.pdf



この開放系の試行錯誤のプロセスそのものが「学び」

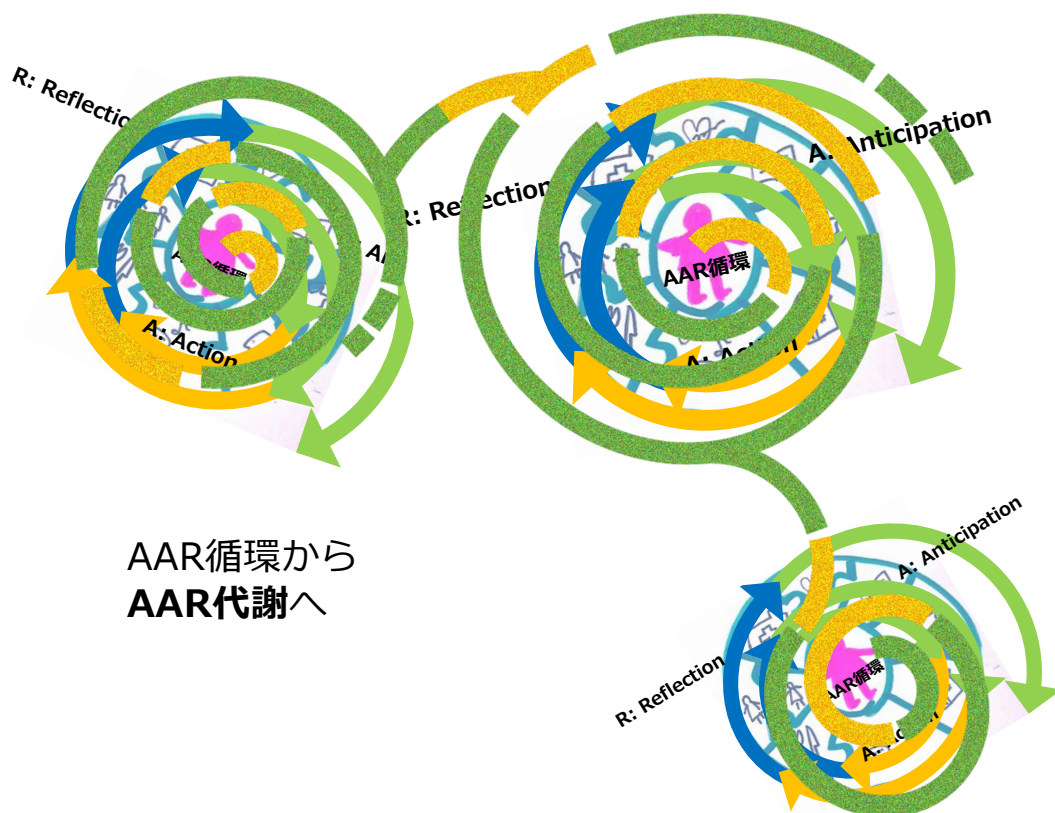
「楽しさ」「愉しさ」に駆動される「在ること」

R: Reflection

A: Anticipation

AAR循環

A: Action



人を切り分ける社会



人と人との「かかわり」を紡ぐ社会へ

14. だれもが「ふるさと」の当事者になる社会へ

ちいさなしあわせ＝「在る」ことを重ね合う社会へ

誰もがWell-beingな社会とは
誰もがそう在るように在ることができ
そう在ることで変化を引き出しあい
新しい自分で在り続けることができる社会



代謝

社会は到来し続けるものとなる

「よきこと」をつなげる〈社会〉へ

Be-ing であることで Do-er になる

長野県竜丘村（現・長野県飯田市竜丘地区）の公民館報はその第1号でつぎのように述べている。

「公民館には特定の役者も演出家も用意されていない。舞台装置も演出家も何もかも一切合財皆がやるのだ。そして観客は一人も居ないのである。そういうのが公民館であろう。面白い芝居を観ようとするのではなく、よい芝居を演じようとするのである。そして一人ひとりが皆揃って千両役者や偉大な演出家になろうとするのである。公民館には観客は一人も居ないのである。」

橋本玄進「みんなの公民館」『竜丘村公民館』第1号、1948年3月1日

誰もが主役、誰もが担い手

**⇒自治を耕し、自治を担う
＝リーダーフルな地域社会へ**

第1分科会 地域と若者

～みんなが参加したい、参加してよかったと思える地域づくり～

話題提供者：	小 股 祐 希	(松本大学総合経済学部観光ホスピタリティ学科1年)
	川 上 夏 希	(松本大学総合経済学部観光ホスピタリティ学科4年)
	杉 江 夏 実	(信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野4年)
	村 松 駿	(松本大学総合経済学部観光ホスピタリティ学科3年)
司会・世話人：	朝 倉 光 貴	(第一地区公民館)
記 録・世話人：	小 河 原 萌	(内田公民館)
	降 旗 一 博	(東部公民館)
	小 林 弘 幸	(城東公民館)
	宇 治 樹	(中山公民館)
庶務：	吉 田 望 花	(里山辺公民館)
会場：中央公民館 6階ホワイエ／参加者：37名		

1 協議の柱

「石芝まつり」「中央地区縁日」において、行事の運営に大学生が携わったという事例から、「どうしたら若者が地域と関わることができるのか」や「世代を超えた人とのつながりづくり」について気軽に意見を交わし、新たな気づきを得ることを目的とします。

2 話題提供

(1) 石芝まつり（話題提供者：小股祐希氏）

ア 事業の概要

「石芝まつり」は、松本市石芝地区の「石芝商店街」が主催する年1回の納涼祭で、令和5年度で第27回を数える。ポップコーンや綿あめなどのお祭り屋台が並ぶ縁日、太鼓演奏などのステージやワークショップなど、地域に密着した夏のイベントとして毎年大いに盛り上がっている。

イ プロセス

(ア) 参画したねらい

このイベントに参画するきっかけとなったのは、松本大学の学内組織である「地域づくり工房『ゆめ』」を通して行われた石芝まつりへの参加呼びかけに興味を持ったこと。学生の地域交流、参画の場の一つになればと思い、同じく「ゆめ」のメンバーであった同級生2人を誘って、企画が始まった。



(イ) 取り組み内容

まず6月から行われた石芝まつりの実行委員会に、学生数名が参加して主

催者と意見交換を行った。その内容を受けて7月に学生ミーティングを行い、参加内容の確認、決定した。8月には実際に学生のみで運営する手作り輪投げなどの屋台や看板の作成に取りかかった。

ウ 成果・課題と今後の展望

- (ア) 来場者、実行委員会から好評だったため、次回はより積極的に参画したい。
- (イ) コロナ前に先輩方が参加していたが、ノウハウが途切れてしまった。今回、数年ぶりに学生が関わることとなり、当日はトラブルもあった点が課題。
- (ウ) 学生は、「地域づくり」よりは、「友達が参加するなら自分も」という気持ちで気軽に参加した。お祭りが地域づくりに関わっているとは思わず、「楽しい」の延長として参加した。

エ 質疑応答・感想（抜粋）

- (イ) 「石芝まつり」のどこに興味を持ったのか？
 - もともと観光や地域振興を学ぶ学部に所属しており、地域のことを学びたいという気持ちはあった。「石芝まつり」の地元のお祭りの企画段階から関わる学生の募集を見て、自分がやりたいことにマッチすると思った。他の仲間には「地域のお祭りを企画からやろう」ではなく、「子どもたちに楽しんでもらう遊びを一緒にやらない？」とわかりやすく、気軽な雰囲気です誘った。
- (ウ) 「石芝まつり」との関わり方
 - 第2回実行委員会から参加し、「学生は何かしたいことがあるか？」と聞かれ、自分たちがやりたいことを伝えた結果、アイデアを取り入れてもらった。決められていた部分が半分、提案した部分が半分というイメージ。
- (オ) 参加して気づきや学び、参加してよかった点、地域の問題点はあったか？
 - みんなで実行して、学生が地域に関わった成功体験や地域の方からの感謝の言葉があり、想像以上に子どもたちが来てくれて、うれしかった。今後学生であるうちは関わりたい。グループを継続するかは未定。何もしない状態でも、自分のように手を挙げる人がいるかもしれない。学内で新しくやりたいという人がいるのを待つのも良いと思う。

(2) 中央地区縁日（話題提供者：川上夏希氏、杉江夏実氏、村松駿氏）

ア 事業の概要

中央地区では、コロナ禍による事業の中止や伝統行事のマンネリ化、やらされ感が課題となっていた。そこで、「大人も子どもも楽しめる」「PTAに負担をかけない」「企画は若者、実行はみんなで」をコンセプトに、伝統行事の青山様・ぼんぼんを始めとして、縁日屋台や花火大会を行う「中央地区縁日」を開催した。

イ プロセス

本事業は夏祭り実行委員会を中心に定期的な会議を行い、企画内容について練っていった。会議には幅広い世代の参加者がおり、地域の学生もその一人だった。この事業に学生が関わろうと思ったきっかけは、「社会教育実習」「卒業論文」「地域文化への興味関心」など様々だったが、地域で若者が活躍する場を

増やし、また地域にどんな人がいるのかを知り、地域と若者との壁をなくして
いきたいという地域の願いと合致し、地域と学生の協働事業が始まった。

ウ 成果・課題と今後の展望

(ア) 中央地区縁日という大きなイベントを通して、地域の一体感が増した。

(イ) 学生や若者がより地域と関わりを持っていけるよう、若者が地域と対等な
立場で自由に発言ができる環境が重要。若者を単なる人員として見るのでは
なく、同じ舞台を作る一員として参画できる体制の整備が必要。

エ 質疑応答・感想（抜粋）

(ウ) 大変な中でモチベーションになったことは？

→ 地域づくりのイベントがもともと好きだった。自分の知らないところでつながりができて
いく様が良い。また、コロナ禍で文化祭ができ
なかったため、学生同士で文化祭のように進め
られた。

→ 地域行事の調査に協力してもらったお礼とし
て地域の役に立ちたいという思いがあった。

(ウ) どの町会でも若者に関わってほしいという気
持ちはあるが、企画段階から関わってもらうと
ものすごく時間がかかる。積極的な人とありがたいが。

→ 自分たちは目的を持って参加した。地元の学生はきっかけがあれば参加す
るのではないだろうか。一からの企画段階は難しいが、「屋台を一つ任せたい」
「こういう遊びをしたいけど、今流行っている遊びは何？」などの呼びかけ
も効果的だと思う。

(オ) 卒業後、自分の地域に戻って活動に参加、または参加を呼び掛ける横展開
を考えているか？

→ 大学生までに地域活動に参加していると参加へのハードルが下がる。自分
の役割は、「地域づくりってこんなものだよ」と形を見せる橋渡し役だと考え
ている。また、ぼんぼんがどうなるか見守りたい。卒業後も関わりたい。



3 意見交換

(1) 意見交換のキーワード

ア どうして若者は地域に関わった方がいいの？

イ どうしたら若者が地域と関わるができるの？

ウ 世代を超えた人とのつながりづくりのメリットって？

エ 各年代の思いや意見

(2) 環境づくり

- ・若者を便利な存在と見るのではなく、一緒にやろうという気持ちで地域へ巻き込む。若者の視点と地域の経験が融合し補い合うような雰囲気だと良い。
- ・地域と関わりたいと思う若者もいるがすでに完成されたコミュニティに入るきっかけがない。地域で若者が意見を言えるような受け入れる環境づくりが大切。

⇒変化を認める。守っていくべき伝統文化を引き継ぐためにも、若い世代を運営に入れて、意見を聞き、やり方の見直しを考えるべき。

(3) きっかけ

- ・松本大学の「地域づくり工房『ゆめ』」は、若者（学生）が地域に関わるきっかけになる。
- ・防災ならば、全世代が関わることのため、若者も入り込みやすい。
- ・地域に住む学生より、学校を窓口に学生へ呼びかけるほうが現実的ではないか。
- ・学生に依存しすぎてはいけない。学生の発案したイベントで、地域に住む若い人が地域に関わるきっかけになると良い。
- ・若いママさんに文化祭への協力をお願いしたところ、相手もこちらからの声掛けを待っていたことがわかった。

(4) 事例

- ・もちつきをしたいが、量を食べられない地域住民とたくさん食べられる学生という組み合わせでもちつき大会を行った事例もある。
- ・県外から松本へ移住した学生が、地域と関わり楽しいと感じた結果、「ここに残りたい」と思ってくれた。松本で就職が決まった。
- ・コロナ後、子ども向けのイベントを開催したが、参加者が少なかった。上級生からの口コミやつながりの大切さを実感した。
- ・移住者から見ると、松本市のように地域住民が集う行事がある環境は貴重。



4 まとめ

- (1) 様々な立場の参加者と話すことにより、お互いの考えていることや地域の様子を聞くことができ、良い機会となった。
- (2) 若者は地域との繋がりを自ら繋げるのは難しい。声を掛けてもらい、相談することによって自信に繋がる。
- (3) 若者の武器は『発想力』と『柔軟性』であるが、弱みは経験値である。
- (4) 若者と地域のやりたいことは必ずしも一致しない。否定からではなく、まずは受け入れる環境を作らなければならない。
- (5) 学生は地域に出る機会が少ない。このような意見交換の場を、松本大学や信州大学で行えば、若者の参加も増えて様々な意見を聞くことができる。

実践事例

「中央地区縁日だよ！全員集合」

松本大学 川上夏希
群馬大学 杉江 夏実



= 目次 =

1. 「中央地区縁日だよ！全員集合」の背景・経緯
2. 事業内容について
3. 参加した大学生の感想と気づき
4. おわりに

1. 「中央地区縁日だよ！全員集合」の背景・経緯

(1) 課題・背景

(2) 事業に携わった経緯

(1) 課題・背景

- コロナによる事業の中止
→伝統行事「ぼんぼん・青山様」の文化継承の危機
- 運営する保護者への負担
→準備や役割などが保護者にとって大きな負担に
- 住民から求める声
→新しく夏のイベントを

(2) 事業に携わったきっかけ

- 松本大学の社会教育実習をきっかけに
- 伝統行事「ぼんぼん」についての卒論調査を
目的にボランティア募集から参加

2. 事業内容について

(1) 目的・コンセプト

(2) 夏祭り実行委員会

(3) 企画詳細

(4) 今後の展望について

(1) 目的・コンセプト

目的

コロナで失われた地域住民の交流の場づくり
みんなが参加しやすい伝統行事



「中央地区縁日だよ！全員集合！」

(1) 目的・コンセプト

コンセプト

大人も子どもも楽しめる
PTAに負担をかけない
企画は若者、実行はみんなで



夏祭り実行委員会を結成

(2) 夏祭り実行委員会

中央地区夏祭り実行委員会組織図



(3) 企画詳細

ぼんぼん・青山様

縁日屋台

花火大会



中央地区 縁日だよ！
2023 8月8日(土) 17:00~

中央地区に縁がある若者、夏休みで帰省中の若者、
ぼんぼん・青山様と一緒に楽しみましょう！ (16:00 集合)
会場：中央地区に縁がある若者、夏休みで帰省中の若者、
ぼんぼん・青山様と一緒に楽しみましょう！ (16:00 集合)
会場：中央地区に縁がある若者、夏休みで帰省中の若者、
ぼんぼん・青山様と一緒に楽しみましょう！ (16:00 集合)

対象範囲を中央地区に限定せずに開催

会場では
●屋台を運営
●「ぼんぼん・青山様」の発着地点
→地域住民だけでなく、観光客も訪れた

松本大学 MIC総合美術部作成

中央地区 縁日だよ！
2023 8月8日(土) 17:00~

●ぼんぼん
・「ぼんぼんを習う会」で歌の練習
・花飾りは参加者の手作り

●青山様
法被を持っているお子さんには豆絞りを貸出

参加したお子さんには
縁日屋台で利用できる
500円分の金券と一回無料券
(体験ブース)

松本大学 MIC総合美術部作成

3. 参加した大学生の気づきと感想

(1) 伝統文化の継承

(2) コミュニティについて

(3) 若者の位置づけ

(4) ifの世界線

(1) 伝統文化に触れる機会について



- ・「ぼんぼん・青山様」を全く知らない親子
→大人も伝統文化に興味を持っているのでは？
- ・本当に伝えたい「ぼんぼん・青山様」について理解できたらどうか
- ・本来の「ぼんぼん・青山様」とは違う形ではあるが、このようなイベントで気軽に参加できる場があることが文化継承に必要な足掛かりであるのではないか

(2) コミュニティについて



- ・過去に「ぼんぼん・青山様」を経験した大人が、子供たちのために経験の場を作っていることに心動かされた
- ・「子供の頃に経験した」という思い出が地域や土地などのコミュニティへの帰属意識につながるのではないか
- ・地域文化はただの行事ではなく、高齢者と若者とのギャップを埋める重要なコミュニケーションの鍵になっている

(3) 若者の位置づけ

●若者を巻き込めたワケ

- ・学生を受け入れる環境
→役割がありサポートをしてもらえる
→学生自身の主体性があった
→参加した学生にもともと地域への関心があった
※社会教育実習など
- ・学生同士のつながり
→イベントに興味がある学生を引き込んだ
(学生同士の人脈とボランティア募集など)

(3) 若者の位置づけ

●若者が地域参加で求めるもの

- ・学生の力を必要としてくれるか
→対等な立場で意見を発信しやすい場所
→学生が活躍できる場所
⇒継続的に関わるためには企画段階から
- ・やりがいのある場所
→コミュニケーション
※学生という肩書きだけでなく、個人としての関わり

(4) ifの世界線



●来年も続けていくにあたって

- ・地域づくりに関心のある学生を中心とすれば...
- ・当日参加者に負担がないようにできれば...
- ・若者に求めているボーダーラインを知ることができれば...

4. おわりに

• 地域の課題には地域に属している者同士で向き合うべきだが...

⇒ 参加しやすい環境づくり (NGワード: 強制) が大切

→ 学生、社会人、高齢者などそれぞれが歩み寄ること

→ 声を出しやすい場づくり

→ 異なることはいいこと



ご清聴ありがとうございました

松本大学 川上夏希
村松 駿
信州大学 杉江 夏実

聞いて、しゃべって、つながって。
中央地区縁日、石芝まつりに携わった学生の話ヒントに
—「若者はどうしたら地域と関われる？」—
若者も元若者も一緒に考えます！

お茶を飲みながら
ざくばらんに
楽しくお話しましょう！



ワールドカフェ形式

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い 第1分科会

若者 # 地域づくり

高校生 # 大学生
活躍の場 # 居場所

世代を超えて意見交換しませんか？

2月18日(日)
13:00 - 16:30

中央地区縁日、
石芝まつりに
携わった学生の
事例発表

金沢大学、
松本大学の学生さんのお話

地域の中の
若者の居場所

学校でも家庭でもない第三の居場所

世代を超えた
つながり

人と人とのつながり

会場 中央公民館 (Mウイング)

6階 ホワイエ

松本中央1-18-1 松本駅から徒歩6分ほど

Tel:0263-32-1132

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い 第1分科会

担当：朝倉（第一地区公民館）Tel:0263-32-1550

▼ 申込・詳細はこちら



申込期限 2月9日(金)

第2分科会 おやこのみなさん公民館へようこそ！

世話人：	中	條	克	明	(大手公民館主任)
世話人：	西	澤	瑞	恵	(城北公民館主任)
世話人：	丸	山	稜	雅	(寿公民館主事)
世話人：	深	澤	佐	恵	(第三地区公民館主事)
世話人：	齊	川	史	徳	(入山辺公民館主事)
庶務：	片	桐	史	門	(白板地区公民館主事)
記録：	大	津	茜		(寿台公民館主事)
会場：芳川みなみ福祉ひろば／参加親子：15組					

1 協議の柱

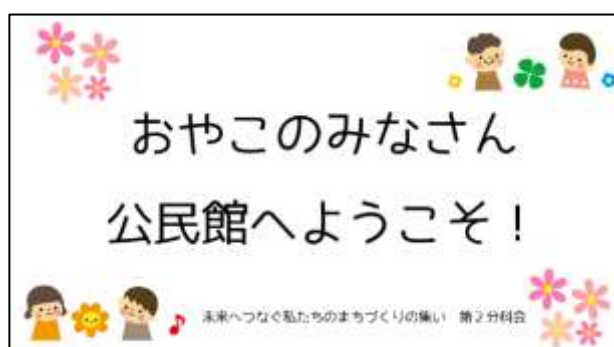
親子がより豊かに暮らすために、家庭教育支援、子育て支援、育児世代と地域の交流の促進など、公民館は何が出来るのか。まずは、親子の声を聴くとともに、親も子どもも楽しみながら、学びやつながりを生む分科会とします。

2 会場

分科会運営委員会での議論では、「育児世代をターゲットにするのであれば、会場をMウイングにするのではなく、育児世代が集まる場にしよう。」と意見がまとまった。より多くの方へ公民館を周知するため、そして多くの声を聴くために、会場をMウイングではなく、あんさんぶる（芳川みなみ福祉ひろばと芳川こどもプラザの複合施設）内とした。また、こどもも楽しめるお絵かきコーナー、手遊び動画の上映などを行った。

3 話題提供

市内公民館で行われている子育て世代向けの事業紹介を行った。（以下一例）



公民館ってどんなところ？

- もちろん、親子向けにも講座等を実施
- 令和4年度35地区公民館が実施した子育て支援、家庭教育支援の講座

150講座 延べ800回以上！

公民館講座紹介

- 神林公民館
- 「ぼんぼりんのひろば」
- 子育て支援事業として、季節のイベントに合わせて工作や遊びをしたり、果物狩りを行うなど、親子同士の交流の場となっています。
- 毎月1回開催



公民館講座紹介

- 波田公民館
- 「竹の子教室」
- 45年間続く歴史ある講座です。親子一緒に運動や遊びをとおして、体力づくりと生活習慣の基本や情緒の発達を支援しています。保護者同士の繋がりも魅力。
- 5月～12月 年4回開催



4 聴き取り及び意見交換

- (1) 当日の来場者に、公民館における子育て支援、家庭教育支援に関する聴き取りを行い、意見交換を行った。

主な要点は以下のとおり。

- ア 親子が集まる場所へ来てくれると、公民館への興味がわく・親しみを覚える。
- イ 土日開館している施設が少ないので、定期的に来場する回数が増える。
- ウ 転勤族は、気軽に過ごせるこうした施設の存在には敏感に反応する。だから少し遠くでも利用する。
- エ 来場者に公民館を知っているかと問いかけても、「知らない・何をやっているかわからない」といった声しか聞くことができなかった。
- オ 情報の仕入れ先はSNS、イクジィ、児童センター、こどもプラザ
- カ 所属している子育てサークルのメンバーが減ってしまい、存続が危ぶまれる。公民館主事にも協力してもらってメンバー募集をしてもらって感謝している。
- キ こどもプラザのような施設においては、こどもの福祉サービスを提供する側とサービスを受ける側に分かれてしまっているのではないか。

5 アンケートの実施

分科会当日に加え、子育て支援・家庭教育支援に関する声をさらに聴くため、松本市公式LINEにおいてアンケートを実施した。

- (1) 実施期間

3月1日（金）から3月31日（日）

- (2) 回答数（3月14日時点）

89件

年代別内訳 ～20代7件、30代41件、40代24件、50代13件、60代3件、70代～1件

- (3) アンケート内容と結果（一部抜粋）

- ア 公民館で子育て支援、家庭教育支援事業が実施されていることを知っているか？ 回答：はい38件 いいえ51件
- イ 子育て・家庭教育について知りたい情報（複数回答可）
 - ・子どもや親の交流の場 56件
 - ・健康、発達にかかわること 51件
 - ・ほめ方、しかり方 45件
 - ・地域との交流の場 41件
 - ・コミュニケーションの仕方 26件
 - ・相談窓口 24件
 - ・しつけ 19件
- ウ 希望する講座など
 - ・アロマトリートメント、リラクゼーション、マッサージ、ヨガ、体操
 - ・料理教室（包丁の使い方、おやつ作り）
 - ・ベビーマッサージ、ベビーフォト、抱っこ教室

- ・木のおもちゃ体験、木工作、工作
- ・服、おもちゃ、育児用品のお下がり会、交換会
- ・移住者ママの会、一人目ママの会、子どもの年齢ごとの交流会、お茶会
- ・栄養士、歯科衛生士、保健師、保育士などの専門職との相談会・座談会
- ・海外の子育て方法
- ・金融教育、お金にまつわる話
- ・こどもへの性教育、身体のセルフケアについて
- ・発達段階の成長について
- ・子育て世代の企業支援

エ その他いただいた意見

- ・託児があると自分の時間として過ごせるからありがたい。
- ・最低でも月2回 定期的に集まれる場
- ・育児は毎日のこと。困った時、疲れている時にいつでもアクセスでき、支援が受けられる場
- ・長期休暇イベントの充実
- ・休日に行ける場所。児童センターを土日も開放してほしい。
- ・雨の日に行ける場所。有料でもいい。
- ・たくさん走ることのできる室内遊具場
- ・公民館事業はどこを見たら載っているのか。
- ・開催している側の情報発信能力がなさすぎる。
- ・地域や公民館の情報が入ってこない。
- ・地区内優先は理解出来るが、地区外も参加させてほしい。または自分の地区でやってほしい。
- ・公民館はお年寄りが行くところのイメージを払拭するために、現役世代の声を積極的に活かして！
- ・わざわざ公民館に行かなくても、イオンモールや児童センターでの講座やイベントが楽しいので行かないと思う。

6 まとめ

(1) Mウイングを飛び出し、生活の延長に設定した会場

親子の参加者を募るよりも、「親子の参加者がいる場所に行く」会場や内容とした。広く市民の声を聞くには今回のように、参加者を募るだけでなく、人の集まる場所に出て行く方式も必要と考える。

(2) 子育て世代における公民館の認知度は低い。地域との交流機会の逸失。

来場する親子の中には、会場を「こどもプラザ」と認知していない人もいた。公民館は、残念ながら一層認知度が低い（或いは、公民館と認知しないまま利用している？）ことが推測できる。公民館は、親子に限らず住民が気軽に使える場所だが、親子にとって身近な施設の一つとして公民館も認識されなければならない。また、公民館でなければ、その先の地域との交流や地域づくりに結び付かず、

将来の担い手となる機会を逸失してしまっている。

(3) 公民館活動は主体性。サービスの需給ではない

一方で、公民館活動の充実に向けては、利用者が主体性を持つことが不可欠である。子育て中であっても負担なく、楽しみながら主体性を持って活動できる場を作るにはどうしたら良いのか、ママ・パパのニーズを把握することに合わせて、日頃親と関わる機会の多い関係団体（子育てサークル、育成会、PTA、イクジィなど）の知恵を借りること・連携することも必要である。

福祉ひろば、こどもプラザ、つどいの広場等で子育て支援サービスを受けることが当たり前では、主体性や内発性は育たないのではないだろうか。社会教育は提供する側と受ける側ではない。牧野先生の午前中の講演にもあったように、「学び」による住民自治をより深く実装することが求められている。育児世代にも「学び」による「かかわり」、「つながり」づくりを促す必要がある。

(4) 将来の担い手づくりに向けて

今後の公民館活動や地域の担い手のことを考えると、今回のような公民館を知ってもらおう地道な活動が必要になってくると感じる。今回参加いただけた方の中で少しでも公民館に興味を持ち、実際に行ってみようという方がいれば幸いである。

(5) これまでの集いのままでいいのか

過去のまちづくりの集いとはイメージが違い、申込者の中には「イメージと違った」「参加しづらい」といった声もあった。また、一部の関係者から「これは分科会の会場ではないな。」と厳しいご意見もいただいた。生活の延長に分科会を持ってきたことはこれまでに無かったかもしれない。実際、公民館の名前すら知らない方がいた。日本で最も多く公民館がある長野県においても、日頃の生活の中に「公民館」という選択肢がない人が沢山いるということである。

(6) 集うのは「誰」か

私たちのまちづくりの集いの「私たち」とは、地域の実践者のことだけを意味するのか、あるいは「公民館」の名前も知らない方々も含めるべきなのか、集いの在り方を考えるうえで一つの重要な論点として提起したい。

地域の実践者も元々は実践者ではなかったはずだ。実践者になるきっかけは様々かもしれないが、そのきっかけを提供する＝スイッチを入れるのが社会教育であり公民館である。実践者への支援や伴走と同時に、実践者ではない人々へのアプローチも行い、実践者になりうる人たちを増やしていかなければならない。

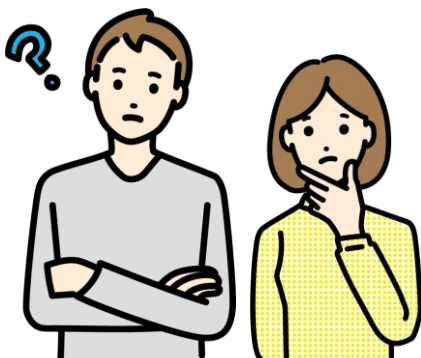
「おやこ」向け 公民館事業・サークル紹介

延べ800回
以上！

公民館では「おやこ」関連の事業を年間約150個
開催しているほか「おやこ」関連サークルも活動中！

ここでは **ほんの一例** をご紹介☆

お近くの公民館にも「おやこ」向け事業・サークルがきっとある!?



うちの近くの公民館は
どこ？どんなことしてるの？



ここから希望の地区を選択し
「公民館から」をチェック！
ぜひぜひ気軽にお問合せください♪

公民館事業（一例）

公民館名	対象	事業名	開催時期
		概要	
第三地区公民館 （中央 4-7-28） （TEL：36-7040） 	親子	おひさまキッズ 第三地区福祉ひろばにて、未就園児の親子を対象とした子育て支援事業を行っています。絵本の読み聞かせ、わらべうた、親子遊び、季節のクラフトなど、親子で楽しめる内容になっています。 	毎月 第1木曜日 10:00～
白板地区公民館 （城西 1-6-17-3） （TEL：35-7740） 	親子	やきいも大会 さつまいもの植え付け・草取り・収穫までの一連を体験し、やきいもにして食します。 	5～11月
松南地区公民館 （芳野 4-1） （TEL：26-1083） 	親子	親子食育講座 年に5回の連続講座で、松本一本ねぎとさつまいもを育て、収穫し、料理を作ります。 	4～11月
神林公民館 （神林 1557-1） （TEL：58-2039） 	未就園児の親子	ぽんぽこりんのひろば 子育て支援事業として、季節のイベントに合わせて工作や遊びをしたり、果物狩りを行うなど、親子同士の交流の場となっています。 	毎月1回
笹賀公民館 （笹賀 2929） （TEL：58-2046） 	親子	ほっとスペース笹賀 令和5年2月から様々な事情により家で過ごしている子どもたちのために少しでもほっとできる居場所を提供しています。	毎週火曜日

公民館名	対象	事業名	開催時期
		概 要	
波田公民館 (波田 4417-1) (TEL: 92-2268) 	2・3歳の 未就園児 と保護者	竹の子教室	5～12月 年44回
		45年間続く歴史ある講座です。親子一緒に運動や遊びをとおして、体力づくりと生活習慣の基本や情操の発達を支援しています。保護者同士の繋がりも魅力。 	

サークル活動（一例）

施設名	サークル名	活動日
	概 要	
第三地区公民館 (中央 4-7-28) (TEL: 36-7040) 	こどもいけばな	第3土曜日 10:00～
	季節の草花を用いながら、生け花を楽しみます。難しく考えずに自由に思いのまま生け花を楽しみましょう。年少から大人まで、初心者大歓迎。	
	ヒッポファミリークラブ	毎週水曜日 18:45～
	多言語活動および国際交流を行います。多世代で楽しく活動しています。何歳からでも世界が広がります。対象：0歳～シニア年代	
	松本おはなしの会	火・金曜日
	保育園・小学校・福祉ひろばで、ストーリーテリング(昔話などの語り)や読み聞かせを行っています。	
	子育てサークルえるも	第1・3水曜日 午前
	月に2回リフレッシュヨガをしています。ママの運動不足解消、リフレッシュを目的としています。	
	ねっこだっこ	木曜日
	“根っこは抱っこで育ちます”を合言葉に、0～3歳児親子、妊婦さんを対象に、わらべうたあそびや絵本の読み聞かせを通して愛着を育むお手伝いをしています。又、子育て相談も行います。	
	ムジカベベ0才からの音楽会	平日午前
	赤ちゃんから聴ける音楽会の企画・開催。音楽を通して子育て中の親子に喜んでもらえる活動です。お子さんがいるお母さんを中心に活動中です。	

施設名	サークル名	活動日
	概 要	
笹賀公民館・福祉ひろば (笹賀 2929) (Tel: 58-2046) 	おやこクラブてるてる 0～3 歳のお子さんとそのお母さんを対象とした活動を月 1 回のペースで開催しています！消防署見学やヨガ、手形アートなどを月に 1 回開催中～！活動の後、おにぎりや味噌汁などの簡単なお昼ご飯を用意する「てるてるカフェ」も不定期開催！思い出作りに、お友達作りに、子育て情報交換に、気軽に遊びに来てね！ 	月 1 ～2 回
波田公民館 (波田 4417-1) (Tel: 92-2268) 	波田おはなしの会 読み聞かせ、影絵、パネルシアターの制作・練習をしています。不定期ですが、公民館で親子向けの自主公演をしたり、小学校・保育園等に伺って楽しく活動しています。 	毎週水曜日

公民館一覧 (名称・所在地)

中央 (Mウイング)	中央 1-18-1	鎌田地区	両島 5-50	松原地区	松原 39-1
第一地区	M ウイング 4F	松南地区	芳野 4-1	岡田	岡田町 517-1
第二地区	本庄 2-3-23	島内	島内 4970-1	入山辺	入山辺 1509-1
第三地区	中央 4-7-28	中山	中山 3746-1	里山辺	里山辺 2943-1
東部	女鳥羽 2-1-25	島立	島立 3298-2	今井	今井 2231-1
城北	開智 2-3-39	新村	新村 2179-7	内田	内田 2203-1
大手	大手 3-8-1	和田	和田 2240-31	本郷	浅間温泉 2-9-1
安原地区	旭 2-11-13	神林	神林 1557-1	四賀	会田 1001-1
城東	元町 3-7-1	笹賀	笹賀 2929	安曇	安曇 1061-1
白板地区	城西 1-6-17-3	芳川	野溝東 2-10-1	奈川	奈川 3301
田川	渚 3-2-7	寿	寿豊丘 424	梓川	梓川梓 2288-3
庄内地区	出川 1-5-9	寿台	寿豊丘 649-1	波田	波田 4417-1



おやこのみなさん、 公民館へようこそ！

令和6年

2月18日(日)

9:30~15:30

芳川地区みなみ福祉ひろば

(イオンタウン松本村井2階)

松本市村井町南2丁目21-45

子どもが遊べるおもちゃやボールもあります。
親子で楽しみながら参加しませんか？
アンケートに答えて粗品もプレゼント！



いずれも同じ内容ですので
都合の良い時間に
ご参加ください

分科会プログラム 11:00 / 13:00 / 15:00

- 1 公民館を知ろう！ 公民館での活動や地区事業について実際の事例を紹介します！
- 2 悩みを共有しよう！ 少人数のグループに分かれてグループトークを行います！

公民館のおにいさん、おねえさんと一緒に手遊び

親子で楽しめる手遊びや体操をします。音楽に合わせて体を動かしてみよう！

常設ブース

- ◎ 巨大ロール紙お絵描きブース 巨大ロール紙に自由にお絵描きしてみよう！
- ◎ お悩み個別相談ブース 小さな悩みでもOK。保健師と個別に相談ができます。



参加のお申し込みは、松本市中央公民館（Mウイング）へ

締切
2/9
(金)

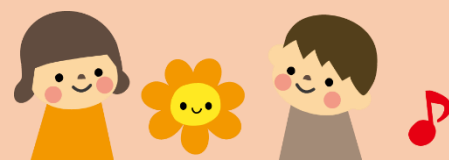
電話 0263-32-1132
FAX 0263-37-1153



Logoフォームからも事前申込みが可能

事前申込み無しでの当日参加も可能です！

Logoフォーム



第3分科会 「担い手人材はどこにいる？」 ～新たな担い手とつながるために～

話題提供者：	塩 原	敏 宏	(松本市社会福祉協議会地域福祉課)
	三 沢	智 子	(筑中りんどう会準備委員会代表)
	児 玉	亨	(筑中りんどう会準備委員会事務局)
コーディネーター：	松 田	武 雄	(名古屋大学名誉教授)
司会：	勝 家	隆	(島内地区地域づくりセンター長)
世話人：	伊 藤	貴 浩	(松南地区公民館・主任)
	木 内	翼	(松原地区公民館・主事)
	小 林	大	(庄内地区公民館・主事)
	清 水	春 生	(中央公民館・事務員)
	瀧 川	航 平	(田川公民館・主事)
	分 部	哲 志	(本郷公民館・主事)
会場：中央公民館 会議室3-2 / 参加者：61名（一般参加者：21名）			

1 協議の柱

様々な団体・組織の抱える課題である「担い手不足」。団体などの活動に関心を持ってもらい、行く行くは新たに担い手となってくれるような人材とつながるために、どのような取組みが必要か考えます。

2 過去の分科会の振り返り

これまでのまちづくりの集いで「担い手不足」について議論した成果をまとめ、今回の分科会やこれからの活動に役立てるヒントとしました。

(1) 成果から導き出されたもの

- ・担い手不足の原因を整理して理解する
- ・(町会が)何のために存在しているのか、その意義を知ってもらう
- ・これまで関わりのなかった多種多様な人を巻き込む
- ・他者を尊重し、他者から学ぶ関係性・環境を整える
- ・まず誰かと何かをやってみる(巻き込む・つながる)

3 話題提供

(1) 松本市ボランティアセンター

ボランティアセンターでの取組み(目標、取組みの中で大切にしていることなど)、具体的な事例の紹介がされました。

ア 取組みで大切にしていること

ボランティアの本来の意味である「自発性」「自分発」を大切に、次のことを心がけて取り組んでいます。①誰かに強制的に言われてであったり、“やらされ感”があったりしない。②得意なことや興味・関心があることをお任せする。③仲間や関わる人との交流など、楽しみを持って参加していただく。

実際に、「ボランティアをしたい。何でもいいから、決めてもらったことをやります。」とおっしゃる方がいて、団体を紹介してみたものの、「やっぱりやめます」と言われることは割合多いです。また、「あんまり意欲がなかったけれどやってみたら楽しかった。」とか、意欲がある方だったら「ある程度任されると嬉しい」とか、それぞれの方の気持ちや意識に合った、「ハマる」活動を一緒に考えていけるように心がけています。

イ 「若者・学生」の参加で活動が活性化した事例

こども食堂、炊き出しや防災訓練、人形劇の活動に、大学生や高校生が加わって、豊かな発想でアイデアを出しながら、楽しんで取り組んでもらっています。学生さんだと本人の卒業を限りに活動から離れてしまいそうですが、卒業する先輩が後輩を紹介して来てくれるということで、継続性も出てきています。

また、市内では中学生によるゴミ出しや雪かきのお手伝いも行われており、地域の大きな力になっているということを感じています。

ウ 活動に参加するきっかけづくり

ボランティアサロンで、お茶しながら気軽に情報交換ができたり、ボランティアに関する講座、地域デビュー講座（地域で何か活動してみたい方を対象）を開催したりして、「ボランティアとして活動してみたい」という人が情報を得て、活動につなげられるよう支援しています。

(2) 筑中りんどう会準備委員会

ア P T A組織の課題と解散の背景

戦後間もないころに構築されたP T Aの体制が、以後の社会変化（核家族化・両親共働き化・雇用形態の変化など）に応じてカタチを変えることなく慣例踏襲によって続いてきた。また、「強制加入」という誤った認識の浸透によって、保護者にとっての負担と“やらされ感”は次第に大きくなっていきました。

保護者からP T A加入は任意だとの指摘を受けたことで、以後、意思確認を行うようにしたところ、役員選考前には退会者が増えたり、加入率が年々低下したりするなど、P T Aを担う人たちの不満は募っており、運営そのものの在り方を改革し、現状の問題点を解決することが必要でした。

イ 新たな任意参加型団体設立に向けて

全家庭へのアンケートをもとに、P T A理事会において、「できることをできる範囲で、ムリなく」「役員・会則・会費を持たない」「保護者、職員、O B／O G、誰もが」参加できる任意参加型団体への移行を提言し、P T A総会にてP T A解散と新団体「筑中りんどう会」の立上げが決定しました。

1年間の準備期間を設けて新メンバーを常時募集し、来年度の担い手を発掘しています。

ウ 成果と今後の展望

準備期間中に行った校内の環境整備作業、制服リサイクル活動、講演会は、やりたい人が、できることをできる範囲で関わり、やらされ感なく前向きに取り組むことができていました（参加者の声から）。恒常的に担い手を確保することが課題ですが、参加者が楽しく活動し、その楽しさが人を通じて広がり、新

たな担い手が見つかりつながっていくものと考えます。今後の運営の中で、生徒、保護者、地域、職員への影響を振り返りながらより良いカタチを模索していきたいです。

4 意見交換（グループワーク）

分科会参加者が6つのグループに分かれ、感想の発表や意見交換を行いました。

(1) 事例発表を聞いた感想（良かった点、気づきがあった点 など）

ア 筑中りんどう会の「できることを、できる範囲で、ムリなく」というマインドはとても良いと思いました。まずは自分自身が楽しむことを念頭に置き、周りを巻き込んでいきたいです。

イ やらされ感なく、役員は無理でも子どものためにという自発的な意識が芽生えることを意識したいです。

ウ 筑摩野中学校の規模を考えると、分母に対して参加者が少なすぎるように感じます。規則（制約）がないということは理想的ではありますが、お金の出どころや責任の所在が気になるので、筑中りんどう会の今後を注視したいです。

(2) 自分は、なぜ町会や団体などに属しているのか（理由、きっかけなど）

ア 町会に加入していること自体は、それが当たり前だからという認識だったため、なぜを問われても考えたことがなかったのですが、役員を引き受けた理由は、地域への愛着や恩返しから。それを続けている理由は、やってみたら意外と楽しく感じたからであり、今ではそれが生活の張りに繋がっています。

イ 自分が住んでいる町会の役員が10年、20年後に突然回ってきたときに大変な思いをしそうだから、今のうちからということで消防団に所属しています。

ウ 役員は順番制で10年先まで既に決まっています。任期をしっかりと決めて、順番通りやることが後継者選びに苦勞しないコツなのではないでしょうか。

(3) 担い手とつながるために、何ができそうか（実践例、自分の団体などでできそうなこと）

ア 担い手不足の解消、担い手とつながるためには、次の担い手が気持ちよくできるようなバトンパスが必要なのではないのでしょうか。具体的には、役割を明瞭にすること、役員となる人たちの負担が少なくなるような仕組みが必要です。

イ 町会の草刈りなどは役員中心で行っていましたが、有償ボランティアを実践したところ、今までは町会内の活動に参加することのなかった地域の中学生などが参加するようになり、役員の負担軽減だけでなく町会と担い手になり得る人材との接点を生み出すことができました。

ウ 「やりたい人がやりたいことをやる」というのは実際には難しいと思うので、少しでも理想に近づくためには、団体が変わる必要があります。コロナ禍も終わりを迎え、まずは顔見知りになる機会を作ることや、子どもを対象とした町会や公民館に関わる機会が必要です。

5 まとめ（コーディネーター 松田 名誉教授）

協議の柱にある新たな担い手と繋がることを考える場合に、二通りの方向で考える必要があります。

- (1) より多くの人たちが活動に参加できる、あるいは役員になることができるための活動の工夫
 - ・時代の動向に対応する（筑中りんどう会の取組み）
 - ・活動しやすくするための改革（負担軽減、町会費の徴収の仕方や有償ボランティアの導入、DX）
- (2) 地域の埋もれている担い手となるような人たちの発掘
 - ・個人情報保護により困難な場面も考えられるが、顔の見える関係づくり（島内地区の隣組単位での防災活動、回覧板を回す取組み）
 - ・関係を継続する記録等の取組み（マニュアル作り）
 - ・多様な参画（女性、若者、学生）
 - ・ボランティア活動をしたい人材が講座等を経て、地域で活動する取組み

R 6. 2. 1 8
1 3 : 0 0 ~

担い手人材はどこにいる？

新たな担い手とつながるために



団体などの活動に関心を持ってもらい、新たな担い手と
なってくれる人材とつながるためのヒントを探りましょう！

事例発表

担い手不足の課題に向き合う2つの組織からお話いただきます。

松本市社会福祉協議会 地域福祉課 ボランティアセンター



ボランティア等の活動紹介・支援の状況や、
ボランティア登録者とつなげる取り組み事
例をお伝えします。

筑中りんどう会準備委員会



「筑摩野中学校PTA組織の解散から新たな
組織の立上げ、そして、今後の活動」から、
新たな担い手とつながっていくための視点を
紹介します。

意見交換

事例発表をもとに、参加者の皆さんで意見交換・対応策を考えます。

◆ 参加申込

2月9日（金）までに、下記の申込書を公民館または集会事務局（中央公民館
Tel 32-1132 Fax 37-1157）へご提出またはご連絡ください。インターネット専
用申込フォーム（QR）からもお申込いただけます。



キリトリ

氏 名	住 所	電 話			
(ふりがな)	〒	FAX			
		E-mail			
備考欄（所属団体・役職・活動等）					
開会式・基調講演	分科会	手話通訳	要約筆記	車椅子	託児保育
参加 / 不参加	第3分科会				

第4分科会 つながる・つなげる、松本らしい“つどいの場”

～地域づくりの事例から～

話題提供者：	藤 原 香 織	(神林地区生活支援員)
	百 瀬 俊 元	(寿地区小池町会子ども広場運営委員長)
	深 澤 昌 彦	(寿地区小池町会子ども広場事務局)
	草 間 秀 成	(寿地区小池町会子ども広場運営委員)
	降 旗 都 子	(第三地区まちづくり協議会副会長)
	太 田 昌 宏	(第三地区四ツ谷東町会防災部長)
	三 澤 和 代	(第三地区生活支援員)
コーディネーター：	大 蔵 真 由 美	(松本大学教育学部准教授)
司会・世話人：	浅 井 勇 太	(島立公民館主事)
記録・世話人：	奥 原 美 鈴	(奈川公民館主事)
世話人：	保 科 黄	(島内公民館主事)
	太 田 正 太 郎	(新村公民館主事)
	小 松 一 成	(波田公民館主事)
	宮 下 明 日 香	(生涯学習課・中央公民館主事)
会場：中央公民館 6 階ホール / 参加者：67 名		

1 協議の柱

身近な地域で“つどいの場”を活用した事例や、その後に発展した助け合い・支えあいの実践事例から、松本らしい“つどいの場”の役割や発展性について前向きに考えます。

2 話題提供

(1) 【神林地区】

「出張サロン i n 町内公民館」

ア いきいき百歳体操

- (ア) 町会ごとに週1回程度実施。(南新井町会、町神町会のみ合同で実施)
- (イ) J A 女性部は農閑期(10月～3月)に実施。
- (ウ) 健康増進はもちろんのこと、体操終了後は語り場を設けており、誰でも気軽に集まれる場所となっている。

イ パイナップルカフェ

- (ア) 平成29年度当時の民生委員が主体となり立ち上げた。
- (イ) オレンジカフェ(認知症カフェ)をアレンジして地域交流の場を企画、体操やコンサート、講演など毎回内容が異なり、情報収集や趣味を楽しむ場となっている。

ウ 出張サロン i n 町内公民館

- (ア) 地域づくりセンターまで行きたくても行けないため近くの町内公民館に職員が来てほしいとの声があったため、スタッフが出向いて事業の紹介を



し、公民館福祉ひろばの新規利用者を増やすことを目標に令和3年度より実施した。

- (イ) 買物弱者の方から食材が買いたいとの声があったため、令和5年度は、よろず相談会&移動販売という内容で地区の生活支援員や、地域づくりセンター職員などで結成した「お手伝い隊」が中心になってサロンを実施した。
- (ウ) 今年度の反省点（住民主体で持続可能なサロンにしていくにはどうすればいいかとの観点から、町会とのかかわり方、サロンの規模、相談会の持ち方、若い人への周知方法）をもとに来年度の内容を検討している。

(2) 【寿地区 寿小池町会】

「子ども広場」～人と人がつながる場づくり～小池町会子ども広場運営委員会
ア 経緯

小池町会公民館行事の日帰り研修旅行が中止となり、代替えとして開催したお茶会を発展させてわいわい広場を開催し、さらに大人だけでなく、子どもの居場所づくり事業として令和2年に子ども広場を開設した。

イ 趣旨

- (ア) 子どもに食事や団らんの場を提供する。
- (イ) 子どもへの学習のお手伝い。
- (ウ) 生活体験の支援、地域文化の伝承などを通じ、子どもたちの生きる力を育む。

ウ 活動内容（於小池公民館及び子ども広場畑）

- (ア) 毎月1回土曜日小学生対象。
10:00～自由学習、10:45～生活体験 など、
12:00～昼食。
夏休み中の学習支援「寺子屋」3回開催。

(イ) 生活体験

モロコシの播種、ジャガイモやサツマイモの定植と、それらの収穫体験。
ホタルの観察学習会、高齢者と昔の遊び、盆踊りの練習、正月飾りづくり、ちびゆりさんとダンスワークショップ、大学生とのワークショップ 他。

エ まとめ

- (ア) 令和5年度はコロナが5類に移行し、毎回会食ができた。参加者が増えた。
- (イ) 寺子屋は学習の後、オセロなどの遊びを取り入れる工夫を工夫した。
- (ウ) 史跡めぐりをしてそれを題材にカルタづくり→カルタ大会を実施できた。
- (エ) 大学生の学習支援効果は大きかった。特に、学習が長続きしない低学年の子どもの支援は、子どもが楽しく安心して活動できた。

オ 発見と課題・展望

- (ア) スタッフ同士の関わりが見られ、子ども広場を通して、大人の関係づくりの場にもなった（子どもの居場所づくり→大人の居場所づくり）。
- (イ) 食事担当スタッフの高齢化→負担軽減、新規スタッフの募集。
- (ウ) 子どもに寄り添う支援と事業に対するスタッフの共通理解の深化。



- (エ) 収穫のよろこび、さらには「食育」についても考えていきたい。
- (オ) 学生による学習支援の継続。町内他団体とより一層の連携。
- (3) 【第三地区 四ツ谷東町会】
 - 「四ツ谷東町会の防災と福祉の取り組み」
人と人との繋がりが住みやすい安全なまちをつくる。
 - ア 防災の取り組み
 - (ア) 安否確認訓練をはじめたきっかけ
平成27年に実施した第三地区の避難所運営訓練に四ツ谷東町会の参加者が少なかったため防災の見直し、平成29年から安否確認訓練を始めた。
 - (イ) 安否確認訓練のやり方と取り組みの効果
 - a 回覧板を回す班ごとに安否確認をし、各班の決めた場所に集まる。
 - b 町会の一時避難場所に班単位で移動集合し、班長が地区部長に報告。
 - c 地区部長は防災部長に報告し集計。
 - d 平成30年の第三地区避難所運営訓練への参加者が激増した。
 - e 令和2年から安否確認タオルを導入した。
 - (ウ) 安否確認訓練を始めてからの効果
 - a 隣近所の居住状態や家族構成が把握できて、住民同士のつながりが強化された。
 - b 安否確認タオルの導入で、身障者・高齢者・留守宅などの安否確認の時短が図られるようになった。
 - c 訓練開始時から一次避難場所での集計作業が短縮された。
 - d 住民からも年に一度はこのような機会は大切だという声が聞かれるようになった。
 - (エ) 今後の取り組みについて
 - a 令和2年より災害時に必要な用品や設備を増強しているが、今後もさらに充実させるべく企画中である。
 - b 四ツ谷東町会の一次避難場所から指定避難所の松本県ヶ丘高校への徒歩での移動訓練を行えるように計画している。



- イ 福祉の取り組み
 - (ア) 取り組みのきっかけ
 - a ケアマネジャーから社協つむぎちゃんサポートへゴミ出し支援の依頼があった。しかし、その当時の四ツ谷東町会にサポート協力会員がいなかったため一旦依頼を断ったが、再度探してほしいとの要望があった。
 - b 町会のボランティア部会班長に相談し、サポートの協力会員の募集と困ったときの助け合いシステム構築についてのアンケートを実施した。
 - (イ) 助け合いポスターの作成
 - a アンケートには様々な意見があり、隣近所には迷惑をかけたくないといった声もあったことから、色々な方法でのサポートが必要だと考えた。

そこで、困ったときには一人で抱え込まず相談できる事が大事なため、町会には助けてくれる人がいるということを知ってもらうためにポスターを作成した。

b ポスターのデザインは配布しても捨てられず目を引くようにと考え、ヤボンスキーこばやし画伯に依頼。

c 町会の約400世帯にA4版で配布し、A3版はごみ置き場などの目立つところに掲示した。

(ウ) 今後の取り組み

ボランティア部会のメンバー増員に取り組み、いざという時にも役立つ助け合いシステム構築に取り組む予定。

(4) 質疑応答

ア 安否確認タオル・助け合いポスターの作成費用について

安否確認タオルは初回は版代も含めて200円程度、2回目からは200円弱くらいで松本市からの補助もある。助け合いポスターはこれまでも関りのあるプロのデザイナーのご厚意により、特別価格でお願いすることができた。

イ 第三地区と四ツ谷東町会ボランティア部会員は何人くらいか

第三地区では70人くらい、四ツ谷東町会は10人くらい。

3 意見交換

分科会参加者が12のグループに分かれ意見交換後グループ発表を行った。

主な意見は以下のとおり。

- (1) 伝統文化を企画して子供が参加できる場をつくる。
- (2) お祭りの仕事を分担して、一人で抱えこまない。
- (3) 公民館居酒屋で男性や若い人が公民館にくるようになった。
- (4) 事業内容を工夫しているが、保護者の関心が少ないためか、子供の参加が少ない。
- (5) サークル活動がないので、料理教室やボッチャなどのサークルをつくりたい。
- (6) 地域活動に参加しようとしたら、地元に断られた。性別や年齢に関係なくオープンな地域になってほしい。
- (7) 若い人にも関心をもってもらえるようにeスポーツなどを公民館活動に取り入れたい。

4 まとめ（コーディネーター 大蔵准教授）

- (1) どれも特色がある事例発表で、他の町内公民館も参考になったと思う。
- (2) コロナ前→コロナ禍→コロナ後の活動の事例発表があり良かった。
- (3) 防災・成り手不足・福祉などの課題は若い人は自分にはまだ先の話だと思っても災害や家族構成の変化で明日にでも直面する問題なので、真剣に取り組ん



でもらいたい。

- (4) 悩み事や困りごとは誰かに話す事が大事。
- (5) 人は学んだ時になるほどと思うが、実際に何か行動したときに本当の学びとなる。
- (6) 今日はさまざまな人と話ができいていい学びがあった。

5 分科会の振り返り（運営委員）

- (1) いろいろな方と意見交換ができて良かった。今後はテーマの背景にある課題の本質に迫る議論を深めることができればなお良い。
- (2) 主体性をもって分科会を継続していくことが大事。
- (3) 分科会運営委員会でのプロセス（学び）を大切にする。
- (4) 分科会での議論を次年度にしっかりつなげる。

人と人の繋がりが住みやすい安全なまちをつくる



1

安否確認訓練を始めたきっかけ

1. 四ツ谷東町会は第三地区内で一番戸数の多い町会(2月現在456世帯)
2. 平成27年 3年に一度の第三地区の避難所運営訓練に参加者が少なかった。子ども参加なし。
3. 平成28年から防災部長が交代して防災の早直しを始めた。



平成27年の第三地区避難所運営訓練の様子

2

なぜ安否確認訓練が必要と思ったか

1. 要支援者名簿は町会長や民生委員しか持っておらず、いざという時に助けられない。
2. いざという時に助け合うには隣近所が要援護者やお互いの顔を知っていることが大事。
3. 役員しか参加しない防災訓練ではなく、より多くの住民に参加してもらう。



平成29年の初めての安否確認訓練の様子

3

- ① 回覧板を回す範囲の班ごとに安否確認をして各班で決めた場所に集まる。
- ② 町会の一時避難場所に班単位で移動集合し、その班をまとめる地区部長に班長が報告。
- ③ 地区部長は自分の班が全部確認出来たら、防災部長に報告し集計する。

初めてなので、わからないことや慣れないことも多くとも時間がかった。
特に集計は大変で、のちに集計用紙を検討していくことになった。

4



5



平成30年の第三地区
避難所運営訓練の様子

安否確認訓練を始めたため、第三地区の避難所運営訓練にも参加者が激増した。



第三地区防災訓練の参加者数

令和2年から安否確認タオルを導入

全世帯に安否確認タオルを配布し、安否確認訓練の際に玄関など目立つ場所に掲示してから集合することにした。



7



令和5年の安否確認訓練の様子

安否確認訓練を始めてからの効果

- ★7年間、安否確認訓練を継続することで、住民の意識が変化した。
- ★数軒～10軒程度の班ごとに住民が隣近所の居住状態を把握できて、住民同士のつながりが強化された。
- ★令和2年に安否確認タオルを導入して、身障者・高齢者・留守宅などの安否確認の短時間が図られるようになった。
- ★安否確認を班ごとに履行した後に町会の1次避難場所に班単位で移動集合して、訓練開始時から1次避難場所での集計作業の時間が年を追うたびに短縮されている。当初は2時間以上かかったが、昨年10月22日の訓練では集計までに要した時間が40分に短縮されて、町会長が最終的に人数を把握して行政への報告及び、支援が必要な世帯への救援を要請する体勢が整いつつある。
- ★住民からも年に一度はこのような機会は大切だという声が聞かれるようになった。
- ★隣近所の家族構成の変化がわかり、いざという時に役立つ。

今後の取り組みについて

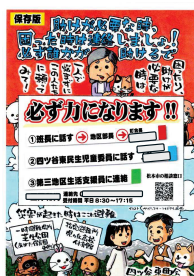
- ★令和2年に救援に必要な担架やパール・その他災害時に必要な用品を購入して設備を増強しており、さらに充実させるべく企画中。
- ★令和5年より松本市から指定された避難所、県立松本県ヶ丘高校の体育館にて、四ツ谷東町会を含めて4町会で構成された『避難所運営委員会』が立ち上がり、初めて高校側の協力の元に避難所設営訓練を行った。
- ★今後は四ツ谷東町会の安否確認訓練の1次避難場所から県ヶ丘高校への徒歩での移動訓練も併せて行えるように計画している。



10

四ツ谷東町会 助け合いポスターの作成

四ツ谷東町会では、令和5年12月に助け合いポスターを作成して約400世帯に保存版としてA4判を配布。A3判はゴミ置き場など、町内の目立つところに掲示した。



11

取り組みのきっかけ

- ① ケアマネージャーから社協つむぎちゃんサポートに四ツ谷東町会の方のゴミ出し支援の依頼が入る
- ② 四ツ谷東町会につむぎちゃんサポートの協力会員がいなかった。
- ③ 四ツ谷東町会のボランティア部会班長に相談する。
- ④ 四ツ谷東町会のボランティア部会の皆さんと一緒に考えてもらうアンケートを取ると同時につむぎちゃんサポートの協力会員を募集した。



12

つむぎちゃんサポートとは？

松本市社会福祉協議会で取り組んでいる高齢者や障がい者の方がより快適な在宅生活を送れるよう市民の皆さんの助け合いによる有償生活支援事業。

現状と課題

- 高齢化が進み、老々世帯や独居高齢者世帯が増えてきている中で近隣住民との関りも薄くなりちょっとした困りごとでも願ひしづらいつ世の中になってきている。
- 人に頼らず自分で出来ることは自分でやるように努力しても、体は衰えて若い頃のように動けなくなってくる。困ったことを願ひし出来るところがわからない。
- 介護認定を受けても認定される確率が減少している。
- 有償サービスに申し込んでも、支援者不足の為、断られる。
- 介護サービスが必要と認められてもサービスには限界があり、それ以上のサービスを受けたい場合は、有償支援サービスを利用するしかない。社協のつむぎちゃん有償サービスを申し込んでも協力会員がいないため、繋がないことが多い。
- 協力会員を増やして体制を整えることには、サービスに繋がない。



13

14

やってみた事

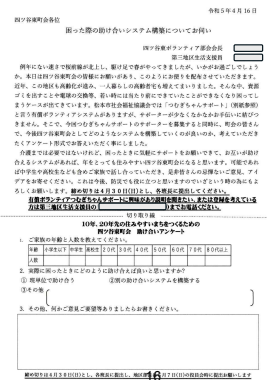
- ★ 町会の四役会に参加させてもらい、地区内につむぎちゃんサポートの募集チラシを全戸配布してもらう。
- ★ 町会内に困った時の助け合いをどのようにしていけばよいかを問うアンケートを配布。



つむぎちゃんサポートの支援員が5名ほど増えた。

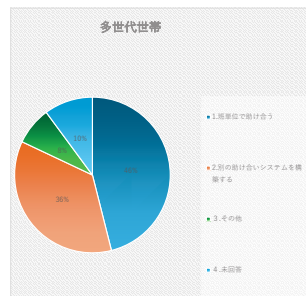
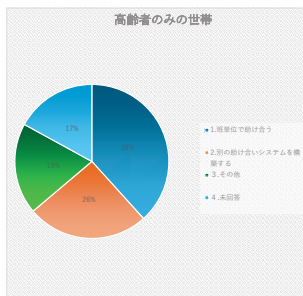
アンケートは31%の回収率で沢山の声を集めることができた。

15



困った際の助け合いシステム構築についてのアンケート結果

【問】 実際に困ったときにどのように助け合えば良いと思いますか？



17

アンケートに寄せられた声

★ご近所付き合いの範中で困りごとの依頼があったら、常識上サポートはするつもりですが、助け合いシステム。構築云々は防犯上の問題から主体は信頼できる他機関にお任せした方が良いでしょう。（例：既存の社協等）

★この機会にこのことを考えることは大切だと思います。

★洗濯やゴミ出しなど、家庭内に入ることにするための抵抗のある方もいると思いますし、個人情報管理の問題等、難しい面も色々考えられます。息子のところでは、子どもを預かってもらうサービスを利用しているようですが、地域で支えあうと言う意識が高まってゆくとうまいと思います。

★「班単位で助け合う」と言うが、日頃班の中で交流が全くないのでそのあたりが問題だと思う。

18

アンケートから、近所で助け合うという声と、近所には頼みにくい、有償ボランティアなどを使う方が良い。等色々な意見を聞くことができた。



困った時に一人で抱え込まず相談できる事が大事



町会には助けしてくれる人がいるということを知ってもらおう為にポスターをつくることにした。



ポスターには、隣近所の助けだけでなく、民生児童委員の名前や生活支援員の連絡先、松本市の相談窓口につながるQRコードなど、助けを求める先を選べるように記載した。



19

イラストをデザインした ヤポンスキーこばやし画伯との記念写真



今後の取り組み

アンケートには新たな助け合いシステムの構築を希望する声もあったことから、ボランティア部会のメンバー増員を来年度に向けて取り組み、災害時やいざという時にも役立つ助け合いシステム構築に取り組む予定です。

21

子ども広場

ー人と人とのつながる場づくりー

寿小池町会 子ども広場運営委員会

1

1 はじめに

(1) 子どもが暮らしやすい社会は

全ての人にとっても暮らしやすい社会

- ・すべての人が地域の中でごくふつうにあたりまえの生活ができる社会
- ・特別なサービスを受ける権利

(2) 人と人とのつながる「場づくり」「関係づくり」が必要

- ・課題の気づき、発見
- ・支え合い 関係機関との連携

2

(3) 小池町会の概要 (令和6年1月1日現在)

- ・人口 1,949人
- ・世帯数 818 世帯
(町会加入世帯 608 世帯)
- ・高齢化率 26.2%
- ・農家組合数 約 100戸
- ・小学校児童 102名 (81世帯)



小池公民館 全景

3

2 経緯

お茶会 → わいわい広場 → 子ども広場

(1) わいわい広場

平成29年度

小池町会公民館主催 日帰り研修旅行 中止(毎年→隔年実施)
代替として「お茶会」「飲み会(自費)」の集い 4回開催

平成30年度

公民館主催 日帰り研修旅行 焼津さかなセンター・久能山東照宮
公民館主催「ふれあい・おしゃべり広場」1回
公民館と農家組合共催「わいわい広場(新そば会)」1回
(「JAモデル農家組合活動」の助成を受ける)

令和元年度

公民館主催「わいわい広場」4回
(「お手玉遊び」「骨密度・体脂肪測定」「講演会」「新そば会」)

4

小池公民館 玄関
わいわい広場 看板



令和元年11月23日
新そば会
公民館と農家組合との共催



わいわい広場 → 子どもの居場所づくりへ

5

(2) 子どもの居場所づくり

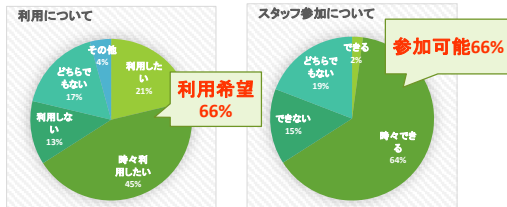
- ① 大人だけでなく、子どもとふれあう場
- ② 小池の伝統行事や文化、歴史、遊びの伝承の場

- ・令和元年5月 打合わせ会(町会三役・公民館長・育成会長)
松本市子どもの未来応援事業
ニーズ調査
- ・7月 小学校地区PTAにアンケート実施(育成会が協力)
- ・9月 町会委員会/幹事会「子ども広場」立ち上げ 提案 承認
- ・10月 町会「回覧板」子ども広場の開設と協力者の募集
- ・令和2年4月 子どもの居場所づくり事業
寿小池町会「子ども広場」開設

6

○ アンケート結果

- ・ 令和元年7月 子どもの居場所づくりニーズ調査を実施
(PTA総会にて小学生保護者にアンケート調査)



7

3 「子ども広場」について（事業内容）

(1) 趣 旨

松本市の補助制度（子どもの居場所づくり推進事業）を活用し、小池公民館を拠点にして、

- ① **子どもに食事や団らんの場**を提供するとともに、
- ② **学習のお手伝い**や
- ③ **生活体験の支援、地域文化の伝承**などを通じ、つながりを深め、子どもたちの生きる力を育むことを目指す。

8

(2) 日 時

毎月1回原則最終週の土曜日 2時間程度

於小池公民館

午前 10:00 ～ 受付、自由学習

10:45 ～ 生活体験 など

11:45 ～ 会 食



(3) 対 象

原則地域の小学1年生～6年生

9

(4) 運営主体 寿小池町会子ども広場運営委員会

構成 ○ 運営委員(12名)

現 町会三役、公民館長、主事、育成会長、

高齢者クラブ会長、PTA

前町会長・前公民館長・前育成会長 → 事務局

○ 協力者(30名) 町会員、民生委員、高齢者クラブ会員

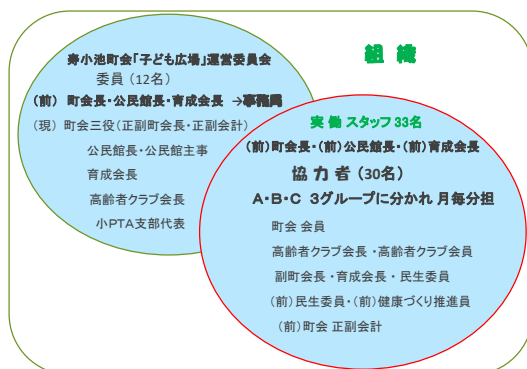
実働スタッフ 33名

3グループに分かれ月毎分担して活動

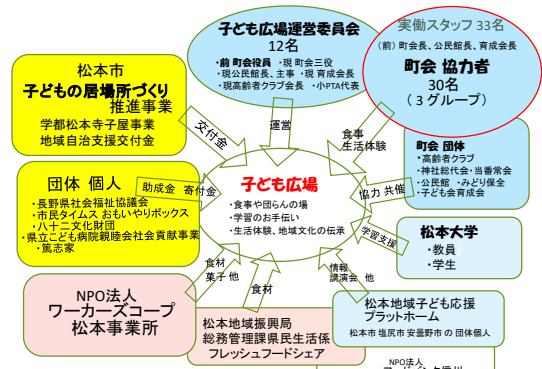
(5) 他団体の協力

町会公民館、育成会、高齢者クラブ、神社総代会、みどり保、松本大学生

10



11



12

(6) 活動内容 (生活体験)

4 月

モロコシの種まき
2粒ずつ播種



ジャガイモの植付・土寄せ



13

5月

令和5年5月20日
カルタ大会



「史跡めぐり」を題材にして
絵札、読み札を作った

14

カルタ大会の後

サツマイモの定植



お昼 学生さんと会食
(ちらし寿司)



15

6 月

ホタル観察

6/24 事前学習会



ホタルの生態について
プロジェクターを使い説明

7/2

町内を流れる塩沢川にて

参加者63名 小赤みどり保全
小池子ども会育成会



16

7 月

モロコシの収穫



茎からとる際「ポキッ」と
折れる音の感触を味わう

夏休み 寺子屋 開催



↑ 夏休み帳に取り組む

17

8 月

ジャガイモの収穫



← 収穫したスイカは食後のデザート

寺子屋

夏休み中3回

学習後「小池音頭」練習



高齢者クラブの方から
ポッチャなども教わりました

18

9 月

昔の遊び

囲碁・将棋・オセロ・手品
高齢者クラブ ↓



神社の話



おはぎづくり



令和2年9月から毎月
のぼり旗 設置 (町内5箇所)



公民館階段に
「右側通行」の表示板



19

20

10 月

サツマイモ掘り



大きな芋がとれました

令和4年10月 史跡めぐり
～史跡・自然・生活を訪ねる～
参加者 33名



史跡めぐりを題材にして
カルタづくり

21

11 月

焼き芋大会

神社境内にて



令和5年度 子ども広場の畑で実施



22

12 月

正月飾り つくり

輪締め 松 南天 紙垂



翌日 子ども会育成会主催
しめ縄づくり講座



リース式正月飾りが人気

23

1 月

令和6年1月27日

たこづくり



昼食はカレーライス



24

2月 令和5年2月18日 ワークショップ

学生と旗づくり



自分の旗

大きな旗

学習が終わってから
積み木遊び

25

3月 令和5年3月18日

変面ショー 公民館と共催

自由学習 学生がサポート



26

4 まとめ

- 令和5年度コロナ5類
毎回 自由学習・生活体験・会食
- 寺子屋事業 夏休み中3回実施（前年より参加者増）
- 史跡めぐり→カルタづくり→カルタ大会
・松本市地域自治支援交付金 活用 100部作成
- 多様な家庭と事業の関係
・生活体験を前面に出す
- 大学生の学習支援効果大
・特に低学年の子ども
- 町内他団体との連携/共催
・高齢者クラブ 子ども会育成会 公民館 他

延べ
参加者
大人は学生
含む

寺子屋除く

令和2年度10回開催
子ども：140名 Ave.14
大人：178名
令和3年度12回開催
子ども：197名 Ave.16
大人：231名
令和4年度12回
子ども：163名 Ave.14
大人：231名
令和5年度1月まで10回
子ども：180名 Ave.18
大人：253名

27

5 発見と課題・展望

- 子どもの居場所づくりは、同時に大人の居場所づくり
・スタッフ同士の関わり、連携 → 事業に対する共通理解
・食事担当スタッフの高齢化 → 負担軽減、新規スタッフ
- 子ども支援の深化
・子どもに「寄り添う」 → 課題の発見 関係機関
・学生による学習支援の継続
- コロナ収束後
・団らんの場の工夫 収穫のよろこび 食育
・居心地の良い場づくり
・町内他団体との共催、連携の継続

28

ご静聴ありがとうございました



寿小池町会 子ども広場運営委員会

29



神林地区について



- ・ 神林地区は、信州まつもと空港の北側に位置し、7つの町会からなる農村地帯。
- ・ 7町会（川西、川東、寺家、南荒井、町神、下神、梶海渡）
- ・ 「神林の歌」に“七区の契り 温かく”と唄われているように、和を重んじ協調性のある風土

神林地区について

- ・地区の公共施設は、ほぼ中央に、地域づくりセンター（出張所、公民館、福祉ひろば）、運動広場、ＪＡ神林支所が集積し、地区住民が集い交流を深めるには良好な環境
- ・地区の南端には、サンプロアルウィン、信州スカイパーク、マレットゴルフ場、室内ゲートボール場、西南公園があり、一大スポーツエリアが形成され、健康づくり・仲間づくりの場となっています。

神林地区について

- ・人 口 4,794人（男性2,365人、女性2,448人）
- ・世帯数 2,064世帯
- ・高齢化率 31.7%（市平均28.5%）
- ・後期高齢化率 19.2%（市平均16.5%）

保存版

いきいき100歳通信

VOL. 1
2023.04.01

神林地区の中では、7つの会場でいきいき100歳体操が行われています。
皆さんのご自宅の近くで、お出かけのひとづつ、体力を維持するためのひとづつとして
一緒に楽しみませんか？新しいグループの設立もサポート致します。ご相談ください。

 開催の曜日・時間 毎週水曜日 午前10:00～ 開催場所 西宮市東公民館 代表者連絡先 大野美代子・木宮由美子	 開催の曜日・時間 毎週金曜日 午前9:30～ 開催場所 下神コミュニティ広場 代表者連絡先 森田はる子
 開催の曜日・時間 毎週水曜日 午前9:30～ 開催場所 川西公民館 代表者連絡先 堀山政清・黒澤子	 開催の曜日・時間 毎週土曜日 午前10:30～ 開催場所 嵯峨南公民館 代表者連絡先 上條公夫・史子
 開催の曜日・時間 毎週水曜日 午後1:30～ 開催場所 神林福祉ひろば 代表者連絡先 佐藤淳子	 開催の曜日・時間 毎週土曜日 午後1:00～ 開催場所 川東公民館 代表者連絡先 吉原寛代・高須弘美
 開催の曜日・時間 毎週金曜日 午後1:30～ 開催場所 JA神林支所 代表者連絡先 三村利子・三島幸子 ※冬場のみ	今回「いきいき100歳体操」の活動を地区内に周知 共有するために、「いきいき100歳通信」という名前 で発行することになりました。 「いきいき100歳体操」は体力に見合った重りを着 けて、少し負荷をかけたゆっくりとした体操です。 また、会場に集まって頂くことにより、人とのつな がりやができ、フレイル予防にも繋がります。 ぜひ、お近くの会場への参加、また新しいグルー プの設立などして、楽しんで体力づくりをして頂き たいと思います。 体力づくりサポーター 木宮 由美子 裏表も見てね

いきいき百歳体操 拡大中！！

いきいき百歳体操とは？

椅子に座って「おもり」をつけて行う簡単な筋力トレーニングです。
おもりを使うことで自重運動（自分の体重を利用した運動）よりも筋力がつきやすくなります。

神林で現在活動している団体を紹介します。お仲間募集中！



🍷 パイナップルカフェについて 🍷

平成29年度 当時の民生児童委員が主体となり立上げ（7年目）

オレンジカフェ（認知症カフェ）をアレンジして、地域の交流の場を企画

誰もが気楽に集まり話せる（相談できる）場、情報収集（見たり・聞いたり）の場、健康増進・介護予防へ取り組む場、趣味を楽しむ場.....などの居場所づくり

月1回程、町内公民館、寺院を会場に開催

R5年度 パイナップルカフェ実施状況

開催日	会 場	内 容	参加人数
5月29日 (月)	下神公民館	いきいき百歳体操を一緒に！ 認知症と向き合うあなたへ 健康づくり課 南西部包括支援センター	27名
6月 6日 (火)	福祉ひろば	豎琴（ライアー）の爽やかコンサート 丸山恵美子&下形和美さん	35名
7月24日 (月)	梶海渡公民館	(元) 赤ずきんちゃんとうっかり八兵衛 社協つむぎちゃん劇団 コグニサイズの時間です！ 木次由美子さん	19名
8月21日 (月)	南荒井東公民館	幸せをつかむ遺言書書き方 ビフォーアフター！ 大沢会計事務所 大沢利充 所長	21名

R5年度 パイナップルカフェ実施状況

開催日	会 場	内 容	参加人数
9月25日 (月)	町神公民館	電話でお金サギにあわないために！ 空港北交番 小池所長 お金の話 信金二子支店 矢澤明奈さん	19名
10月23日 (月)	長久寺	アルパと歌で楽しむ、秋の爽やかコンサート ましゅまろまま 兵藤真美&竹野真彩さん	47名
11月20日 (月)	川西公民館	もしもの時に、あわてない準備 JA神林 丸山支所長 おじいちゃんがおばけになったわけ 南西部包括支援センター	20名
12月11日 (月)	福祉ひろば	クリスマス会 手話の会による手話歌&手話トーク 神林手話の会	39名

出張サロンin町内公民館（R3・4年度）

市内35地区全てにある福祉ひろばと公民館。
知っているようで知らない具体的な活動内容。
知ってはいるけどなかなか.....と思われている皆さんに向けて

お近くの町内公民館へ出向いて、人気講座をご紹介します

年齢関係なく共通の趣味や楽しみを通して、仲間づくりを応援

『からだリフレッシュ講座』（講師：西山知花さん）を持回り開催



**神林公民館・福祉ひろばの人気講座を町内公民館で
出張サロンin町内公民館**

市内35地区全てにある福祉ひろばと公民館。知っているようで知らない具体的な活動内容。
知ってはいるけどなかなか.....と思われている神林のみなさまに向けて、
まずはお近くの町内公民館に出向いて人気講座をご紹介します。いただきます。

年齢関係なく共通の趣味や楽しみを通して、地区の中での仲間づくりを応援します！

内容

からだリフレッシュ講座
座って行う安全で楽しいストレッチです。
講師 西山 知花さん

日時

令和4年10月21日(金)
午後1時30分～午後3時頃まで

令和4年11月4日(金)
午後1時30分～午後3時頃まで

会場

下神公民館

賀海津公民館

参加費 無料

持ち物 飲み物

いつも楽しみに通っています。心地よい疲れが気持ちいいです。

とにかく気持ち良くて、体が楽になる！

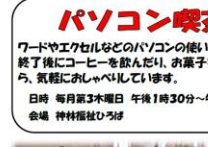
連絡先 神林公民館 電話 58-2039

裏面もご覧ください。他の人気講座・事業も紹介しています。

公民館・福祉ひろばの人気講座・事業ご紹介



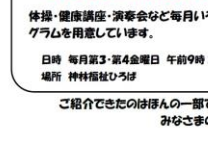
俳句講座
俳句を2句持ち寄り、句会を楽しんでいます。
講師 現代俳句協会会長 小林 貴子さん
日時 毎月第2火曜日 午後1時30分～午後3時頃
会場 神林公民館 大会議室



パソコン喫茶
ワードやエクセルなどのパソコンの使い方を学び、
終了後にコーヒーを飲んだり、お菓子を食べてながら、
気軽にしゃべりたいです。
日時 毎月第3木曜日 午後1時30分～午後3時頃
会場 神林福祉ひろば



大人のぬい絵
花や動物等好きな絵柄を選んで、色を塗って
楽しめます。
日時 毎月第1金曜日 午前9時30分～
会場 神林福祉ひろば



ふれあい健康教室
体操・健康講座・演奏会など毎月いろいろなプログラムを用意しています。
日時 毎月第3・第4金曜日 午前9時30分～
場所 神林福祉ひろば

ご紹介できたのはほんの一部です。この他にも様々な講座・事業を行っています。
みなさまのご参加をお待ちしています。

出張サロンin町内公民館 (R5年度)

『よろず相談会&移動販売でワクワクお買い物』

お手伝い隊として出張

出張スマホ教室（公民館主事）

健康相談（保健師）

介護相談（南西部包括支援センター）

暮らしの困りごと相談（地区生活支援員）

カフェコーナー（ひろばコーディネーター）

戸部商店・JA神林支所・にじいろ工房 出店



カフェコーナーで一息つきながらおしゃべりもできます♪

「戸部商店」JA神林支所、
「にじいろ工房」の移動販売もあるよ！

暮らしのお困りごとをご相談ください！

出張サロンin 町内公民館

相談ことはあるけれど、地場づくりセンターまで行くのがちょっと大変。買い物に出かけるのもしんどいワ〜・・・と思われている神林の皆さまに向けて、今年度は全7回会の公民館にスタッフが出席します。

“あったかい輪〜” 日々の暮らしをちょびり量かにするお手伝いをさせていただきます！

内容 【よろず相談会&移動販売でワクワクお買い物】
公民館・ひろば等のスタッフが勢ぞろい！

日時 令和5年7月26日(水)
午前10時～11時30分頃

会場 町神公民館

相談無料 **持ち物** **お買い物バッグ**

相談はなくてもいいです！どなたでもお話しくださいませ〜

お買い物だけでもOK！
カフェコーナーでランチとひと息入れませ〜

連絡先 神林公民館 ☎58-2039 / 神林地区生活支援員 藤原 香織 ☎57-9373（福祉ひろば）

私たちに相談ください！

お手伝い隊

- ・地区生活支援員 藤原
- ・公民館主事 丸山
- ・福祉ひろばコーディネーター 塩原・赤羽
- ・地区保健師 吉池
- ・南西部地域包括支援センター 浅稿

出張スマホ教室

○公民館主事

「スマホの使い方がよくわからない・・・」
という皆さん。
気軽に相談ください！

健康相談

○地区保健師

健康に関する相談やフレイルチェックができます。

介護相談

○南西部地域
包括支援センター

介護のことや物忘れについてのご相談をお聞かせします。

困りごと相談

○地区生活支援員

その他日常の困りごとについてご相談に乗ります。

カフェコーナー・移動販売もあります！

お茶やコーヒーを飲みながら、近くの人とおしゃべりしたり、困りごとの相談ができます。

- 「戸部商店」・・・日本一になったお豆腐、豆乳のスイーツ、お惣菜、生鮮食品 他
- JA 神林支所・・・Aコープ商品、手打ちそば配布、お肉の試食、「生まれた日」のケーキ販売
- 「にじいろ工房」・・・手作りお菓子、手芸品 他

お店までは遠くてもお買いに行けないという方も、この機会に移動販売でお買い物をしてみてはいかがでしょうか。食材の宅配サービスのご案内もあります。

今後の予定

※日時・会場は変更になる場合があります。

- 8月23日(水) 寺家 福徳寺
- 9月28日(木) 下神公民館
- 10月31日(火) 梶海路公民館
- 11月28日(火) 南荒井東公民館

※すべて10:00～開始予定

R5年度 出張サロン実施状況

開催日	会 場	参加人数
5月30日 (火)	川東公民館	50名
6月30日 (金)	川西公民館	23名
7月26日 (水)	町神公民館	13名
8月23日 (水)	福應寺 (寺家町会)	21名

開催日	会 場	参加人数
9月28日 (木)	下神公民館	30名
10月31日 (火)	梶海渡公民館	19名
11月28日 (火)	南荒井東公民館	28名

令和6年度に向けて

身近で歩いていける距離での居場所づくり

住民主体で持続可能な魅力的なサロン

顔見知り同士、**おたがいさま**・支え合いの精神で

つながりの「**場づくり**」「**関係づくり**」を推進

神林みんなの幸せ計画

○基本理念

『共に支えあい、安全で安心して、生き生きと暮らせる神林』

ご清聴ありがとうございました



第4分科会

つなげる・つながる、松本らしい“つどいの場” ～地域づくりの事例から～

少子高齢化や人口減少、価値観や生活様式の多様化により地域連帯感の希薄化が懸念されています。誰もが気軽に参加でき、緩やかにつながれる場所は身近にありますか？町内公民館を拠点にした事例や、その後に発展した地域づくりの事例など、発表を踏まえながら意見交換しませんか？

日時 令和6年2月18日(日) 13:00～16:30

会場 松本市中央公民館(Mウイング)6階ホール

神林地区 『出張サロン・パイナップルカフェの取り組み』

地域づくりセンターまで足を延ばしにくい高齢者を対象に、生活の悩み相談(健康・介護・スマホなど)や買い物ができる『出張サロン in 町内公民館』を月1回開催しています。



寿地区 小池町会 『子ども広場～人と人がつながる場づくり～』

町内公民館を拠点にして、子どもに食事や団らんの場を提供したり、学習支援や生活体験などを定期的に行い、子どもの居場所づくりに取り組んでいます。



第三地区 四ツ谷東町会 『安否確認・助け合いの仕組みづくり』

防災訓練の際に独自の方法で安否確認をしています。また、日常の困りごとの相談先を記したポスターを町会内に掲示し、気軽に相談できる雰囲気づくりをしています。



【お問い合わせ】

島立公民館 担当:浅井 TEL:47-2049 FAX:40-1258 Mail: shimadachi-k@city.matsumoto.lg.jp

第4分科会 申込用紙

氏名	住所		電話		
ふりがな			FAX		
備考(所属団体・役職・活動等)	開会式・基調講演	手話通訳	要約筆記	車椅子	託児保育
	参加・不参加	有・無	有・無	有・無	有・無

<申込方法> 右記申込フォームからご回答いただくか、上記申込用紙に必要事項を記入し、最寄りの地区公民館(地域づくりセンター)または中央公民館へご提出ください。
※集会当日は午前中に基調講演も開催されますので、併せてご参加をお願いします。

申込締切
2月9日(金)



お申込みはこちら

第5分科会 新たな視点から考える地域づくり

話題提供者：	相馬 落子	(のりくら自然保育木のこ・代表)
話題提供者：	大宮 桃子	(Creative Art Village Aida ムム)
話題提供者：	大宮 大奨	(Creative Art Village Aida ムム・代表)
話題提供者：	五加 文子	(えかきのかい・代表)
運営委員：	小澤 佐智浩	(東部公民館・館長)
運営委員：	川上 正彦	(松南地区公民館・館長)
運営委員：	臼井 美保	(第二地区地域づくりセンター・センター長)
運営委員：	柏原 せつ子	(入山辺地区地域づくりセンター・センター長)
運営委員：	小林 聡	(四賀地区地域づくりセンター・センター長補佐)
リーダー・世話人：	羽田 大樹	(安曇公民館・主事)
副リーダー・世話人：	宮澤 理沙	(今井公民館・主事)
司会・世話人：	田中 貢治	(岡田公民館・主事)
記録・世話人：	浅沼 喜之	(四賀公民館・主事)
記録・世話人：	安藤 ひかり	(梓川公民館・主事)
記録・世話人：	北澤 圭祐	(和田公民館・主事)
会場：	全体会・基調講演(オンライン)	松本市役所四賀支所 会議室 302 / 参加者：17名
分科会		Creative Art Village Aida ムム / 参加者：36名

1 協議の柱

地区外からの移住者による活動を学び、人と人とのつながりづくりに役立つヒントを探ります。ヨガやお絵かき教室等を実際に体験して、一緒に考えてみませんか。

2 話題提供

(1) まつもと お山ですくすく子育てサロン

(のりくら自然保育木のこ 相馬 落子)

ア 概要

子育てをしている親同士の交流及び地域住民や保健師とのつながりづくりを目的に、未就園児を持つ親を対象とした「気軽に集える場」をつくり、活動するもの。令和5年度は4回開催した。

イ 活動の経緯等

松本市安曇地区内にある大野川区町会では、児童館等、子ども（特に未就園児）及び子育て世代同士が交流できる機会や場所がない。このことで生じる孤独感や悩み、日々の暮らしで感じる生活の不便さが、人口減少につながっていると考えた。

近い環境にある者同士が交流できる場をつくることで、悩みを分かち合うと同時に、地域の魅力及び山での暮らしの楽しさを味わってもらえる機会となるよう、この活動を始めた。

ウ 体験

自分が子育て中の親という想定のもと、はぎれを使ったコースターづくりを行った。

子育てのすべてを一人で抱え、心の余裕を持ちにくい親にとって、集中できる自分の時間を持つこと、サロンで親同士が交流できる時間を持つことがどれだけ意味のあるものかを疑似体験した。



(2) わくわく縁側サロン

(Creative Art Village Aida ムム 大宮 桃子、大宮 大奨)

ア 概要

地域の人たちがふらっと縁側でお茶をするような気持ちで立ち寄れる場所を作り、地域の人との密度を高め、地区の皆さんを講師として、手仕事の体験や歴史を学ぶ機会を提供することにより、子どもたちを中心とした世代間交流、地域内交流を広げる。



イ 活動の経緯等

令和5年から多目的スタジオをオープンするも、訪問者が限られていた。また、「移住者のやっている敷居の高いもの、自分とは無縁の場所だ」と思われる方も多く、地域に定着しきれていなかった。これを打開し、気軽に立ち寄れる場をつくることで、多くの地域の人たちと関わりたい、この場を拠点に地域全体のモチベーションや活力につなげたいという思いから、活動を始めた。

ウ 体験

様々な世代に楽しんでもらえるよう椅子に座ったまま出来るヨガを体験した。ヨガを通して体を動かす楽しさと、「また来たい」と思ってもらえるような居場所づくり、仕掛けづくりを体験した。



(3) 地域愛を育てる絵画教室 (えかきのかい 五加 文子)

ア 概要

令和5年から、小学生を対象に絵を描くことを通して子どもたちの感性を育み、地域に目を向けることをきっかけに、地域を愛する子どもを育て、将来地区を離れない行動変化につなげたいと、Creative Art Village Aida ムムを会場に週1回お絵描き教室を開催

イ 活動の経緯等

四賀地区では、生活が不便だから若者が戻ってこないのはやむを得ないとい

う認識が強い。一方で、移り住んだ者の目から見ると、多少の不便さはあっても、静かで伸び伸び生活できる環境や豊かな自然は何物にも代えがたい魅力である。このギャップを何とか解消するために自分ができることを考えた末、この活動を始めた。

ウ 活動の目標

絵を描くことを通して、四賀の自然や文化に触れ、この場所での楽しみを見出すなかで、子どもたちの感性を育み、子どもの能力を活かすこと、伸ばすこと、考える力を養うことにより、無限にある子どもの可能性を引き出したい。この経験を通じて、「地区の子どもたちが地区を離れない」という、遠い将来の行動に影響を与えることが目標

エ 体験

地元産のりんごと松本一本ねぎをモチーフにデッサン体験を行った。デッサンのコツも教わりながら、活動の原点である「地域のものに触れることから地域に目を向けることにつなげる」という意義について考える機会を体験した。



3 意見交換

来場者同士の交流をもつことと視野を広げることを目指し、分科会参加者が5つのグループに分かれ、発表や体験を通して得られたことについて、2つの設問を軸に意見交換を行った。

(1) 本日の発表や体験を通して得られた、“新たな気づき”

ア 体験（はぎれのコースターづくり）では、手を動かしながら話をすることで、話しやすい雰囲気になることを体感できた。

イ 地区外から移住された方は、新たな視点で地域の魅力を捉え、その活用方法を模索し、活動につなげていることが分かった。

ウ 地域の魅力に気が付くことで、ずっとその地域に住み続けようと思うことに繋がる。そのことが地域を良くしていこうと考えることに繋がっていくと感じた。

エ 「やるかやらないか」を考えるだけではなく、行動すると何かが変わっていく。このことを広く知ってもらうことも大切だと感じた。

(2) 活動に広がりをもたせるためのアイデアや、今後に活かしたいと思った点

ア 福祉ひろばと地域の活動について、棲み分けながらも協力して、より楽しく活動できるようにしたい。

イ 事例を聞くことに加え、実際に体験してみることで、次のアイデアが出てくると感じ、自分自身のこれからが楽しみになった。

ウ 特技を持つ大人を生かし、子ども向けのワークショップを実施すれば楽しいと思う。

エ 行政、住民がそれぞれにできること、得意とすることを持ち寄り、補い合うことが、取り組みの広がりや持続につながるのではないかと。

4 まとめ

地区外から移住された方による活動を「新たな視点」と位置付け、その活動事例の発表を聞いた後、実際に体験をした。「新たな視点」で捉えている地域の魅力や課題を、自分のことから取り組み、人と人がつながっていく様子は、多くの示唆を得るものだった。

今回の第5分科会が重きを置いた体験では、はぎれのコースターづくりとデッサンは学生時代以来という参加者も多く、できるつもりでいてもいざやってみるとなかなかできない。集中力がいる。無心になることで色々なことを考える。こうした時間を取ることの重要性を考えさせられた。

最後に行ったヨガ体験では、長時間に及ぶ分科会の疲れがリフレッシュできたと同時に、参加者同士、一日を振り返る姿があった。

一つの活動を通して、人と人とがつながり、集まって“何か”をすることで、自然と会話が生まれる場面も見受けられた。

3つの体験は、どれも“老若男女問わず取り組みやすいこと”とした。体験から得られる効果は様々だが、本分科会を通して見えてきた体験することの効果は、主に次の2点だと考える。

- ・体験は、初対面の人と話す（つながる）きっかけに有効であること。
- ・話を聞くだけよりも、体験はより多くの気づき（学び）が期待できること。

私たちの多くは、日常に追われ、多忙を理由にこうした時間をつくることができないと言い訳をする。しかし、今回の体験によって、意識することの大切さを学んだように思う。また、事例発表を通して、同じような意識をもって各地区で活動している人がいることを知ることができて嬉しかったという意見もあった。

他方、これらの取り組みを持続的なものにするための負担・費用のあり方についても意見が及んだ。「気軽に参加できる金額設定で、参加費を徴収する」という手法もあるが、お互いが得意なことを持ち寄ることや、必要なところを補い合うことが大切だと学んだ。それが、この地域の特徴であり、強みとも言える。

この点で、本分科会では、準備段階を含めて次の特徴的な動きがあった。

- ・今年度の話題提供者の一人、えかきのかいの五加文子さんが、グラフィックデザイナーの技術を生かし、本分科会の周知チラシ作成にご協力いただいたこと。
- ・四賀地区で地元産農産物の良さを広める活動を行っている、のらどこの織田倉悠さんが、本分科会のお茶請けの準備に参画いただいたこと。
- ・昨年度の本集会で、話題提供者だった、たね編集部の中原愛さんと四賀を結び隊の田中ゆかりさんが分科会に参加いただき、田中ゆかりさんは当日の弁当販売にも参画いただいたこと。

今回学んだことを、今後の地域づくりに生かして、このつながりが広まっていくことを望みたい。

第39回松本市公民館研究集会 | 令和5年度松本市地域づくり市民活動研究集会
未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い | 第5分科会

新 た な 視 点 か ら 考 え る 地 域 づ く り 2024.18

会場 | Creative Art Village Aida ムム
松本市会田77-1 Open | 13:00~16:30

「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い」は、住民・職員が身近な地域や生活・暮らしの課題について共に考え、学びあう場です。地域で様々な活動を行う市民の事例をもとに“気づき”や“つながり”を持ち帰り、自分が暮らす地域に生かしていくことを目的として開催します。

第5分科会では、「新たな視点から考える地域づくり」をテーマに、地区外からの移住者の活動を通し、人と人とのつながりづくりに役立つヒントを探ります。ヨガやお絵描き教室等を実際に体験して、一緒に考えてみませんか？お気軽にご参加ください。

9:00	9:30~9:45	9:45~11:50	11:50~12:50	13:00~16:30
受付	開会式 at 松本市四賀支所	基調講演 at 松本市四賀支所	昼食 ※お弁当販売あり	第5分科会 at Creative Art Village Aida ムム

※9:00~12:50までは、松本市四賀支所にて「ふるさと」をつくる公民館 | 牧野 篤 氏(東京大学大学院教育学研究科教授)をオンライン視聴。同所でお弁当販売もごさいます。

Talk and
Trial Session
[お話と体験]

はぎれのコースター作り | 乗鞍すも荘 (相馬 露子)
ヨガ体験 | Creative Art Village Aida ムム (Talk/大宮 桃子、Yoga/大宮 大奨)
お絵描き体験 | えかきのかい (五加 文子) ※敬称略

参加
申込

和田公民館 (電話:48-5445 FAX:40-1259)
まで、電話またはFAXでお申し込みください。
※第5分科会のみのお申込み方法。2.9締切。

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
(第39回公民館研究集会・令和5年度地域づくり市民活動研究集会)
実践事例の掘り起し取りまとめ一覧

地区名	事業名（活動名）	実施主体	取組概要	特記事項
東部地区	園芸交流会（エクセラシオン高校）	・町会連合会 ・福祉ひろば事業推進協議会	・地区活動への若者世代の参画（交流）を模索している中、毎年、市に花の種を寄贈いただいているエクセラシオン高校との交流が持たない相談、快諾 ・花いっぱい運動発祥の地として、東部複合施設（東部地区地域づくりリセンター）前の花壇を色とりどりの花で、利用者を始め地域住民の皆さんにおもてなしをしたい。 ・令和5年6月14日(水)、1月1日(水) ・エクセラシオン高校 地域づくりリセンター（市緑化推進事業で購入）で用意した花を、エクセラシオン高校生徒と地域住民の皆さんで植栽後、茶話会を実施 ・花いっぱい花壇コンクールに初めて応募、優秀賞受賞 ・2回目の交流会時に感謝状を贈呈	・地区活動への若者世代の参画（交流） ・普段交流が少ない地域住民と高校生との交流（ふれあい）ができた。同時に、地区内で活動している信大生にも参加いただき、新たな繋がりができた。 ・花いっぱい運動発祥の地としての緑化活動
東部地区	東部地区減塩教室 (出張ふれあい健康教室)	・地域づくりリセンター ・福祉ひろば ・健康づくり課（北部保健センター）	・KDB（国保データベースシステム）を分析した結果、脂質異常症が東部地区の大きな健康課題であることを踏まえ、地区住民を対象に、脂質異常を改善するための食習慣、運動習慣に取り組むきっかけづくりとして健康講座（2回）を実施 ・1回目：令和5年9月6日(水) 講義（市保健師、管理栄養士）（福祉ひろば、調理室） 調理実習（地区食生活改善推進協議会） ・2回目：令和5年10月4日(水) 講義（市保健師）（福祉ひろば） 調理（健康運動指導士） おやつ試食（地区食生活改善推進協議会） ・参加者：特定健診受診者（中性脂肪・LDLコレステロール高値者）、町会長他	・令和4年度地域ケア会議で取り上げた健康課題を継続的に取り組み、解決していくもの（専門職員の知見と住民の健康増進を支える地域づくりリセンター（現場）の力の融合） ・2回とも参加者は少なかったが、改めて健康課題を理解していただき、生活を見直していただく良い機会となった。 ・継続開催を希望する参加者も多く、地区全体への展開（拡大）を今後計画していきたい（R5参加者（レベルアップ）、新規参加者増）。
東部地区	福祉ひろば事業 (出張ふれあい健康教室)	・町会連合会 ・福祉ひろば推進事業協議会 ・町内公民館長会	・福祉ひろばで月1回開催しているふれあい健康教室を、身近な町内公民館（7か所、全町会如敷）で開催し、参加者増を図るもの ・内容：ストレッチ（日常運動）、健康教室（健康習慣）、ミニ音楽（ギター生演奏と歌（音楽生活））、ランチ会 ・健康教室は、相澤美術館に講師を依頼（脳神経内科医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、リハビリテーション科）。地域拠点病院との連携強化 ・ストレッチは、地区健康づくりサポーターが担当 ・全7回（5回実施済み）	・フレイル予防の実践（食事、運動、社会参加） ・より身近な町内公民館で開催することで、新規参加者の増を目指したが、参加者の固定化は変わらない。 ・同時に、他町会（他日程）への参加も可能としたが、参加者の広がりは見られない。
安原地区	学習支援	・NPO LINKS	・令和5年度にNPO LINKSを設立し、目的の一つである学習支援をスタート ・4月から開催場所を安原地区公民館とし、日曜日14時から17時まで開催 ・対象は地域の小学生から高校生 ・元教諭、英会話学校主催者、信大教員と大学院生がサポーターとして参加	・主要5科目だけでなく、選抜入試にも対応した学習支援を試みている ・2名の生徒が長野県科学振興会の科学研究費助成金に採択 ・卓球クラブとしても活動している
田川地区	自然環境保護活動	・たがわ水辺を守る会	田川地区の河川でポタル調査や生き物観察会を実施し、川に頼り込む機会を設け、田川地区の自然環境を保護していくこととする。 ・生き物多様性のための環境保全・調査（ホタル調査） ・川などで生き物観察会の実施（町島川生き物観察会） ・田川小学校の環境学習の講師（「生き物自然観察クラブ」等への支援）	・川や水路の多い地域の特性を生かし、自然環境保護や環境学習などを行っている点。
松南地区	木陰マルシェ	・松本市希望の家	・令和2年6月から 毎月第3水曜日に、なんぶくプラザ前芝生広場で開催している。 ・希望の家他障がい者の就労支援施設が、施設利用者や地域の方の協力を得ながら、施設で制作したパンやアクセサリなどの商品を販売するマルシェを開催しているもの	・地域に開かれたマルシェの開催により、障がい者と地域の方の交流の場が作られている。 ・地域の方への障がいの理解が深まっている。 ・障がい者の自己実現、自己表現の場となっている。
島立地区	島立買い物集合タクシー	・島立地区町会連合会	・経過と目的公共交通機関や自家用車等を利用できない島立地区の高齢者の要望から近隣の大型スーパーへの移動支援策として令和2年1月からの試行運転を経て、令和5年1月に本格運行に移行した。 ・実施時期と場所 ・地区内を2分割にし、毎週木曜日にそれぞれ1台を運行している。利用料金は一人往復500円を徴収している。不足分は、地域づくり推進交付金を活用し、町会連合会が負担している。	・今後も拡大が見込まれる買い物弱者対策として、地域が取り組んでいる。

地区名	事業名（活動名）	実施主体	取組概要	特記事項
島立地区	島立っ子 森・杜探検隊 （もりもりたんけんたい）	・島立っ子 森・杜探検隊 自然体験学習チーム （協力：島立地区町会連合会、島立地区子ども育成会、島立地区地域づくりセンター他）	・経過と目的 島立地区における住民主体（主に子ども）の地域づくり活動の一環として、平成27年度に発足。地域づくり推進交付金を活動資金として実施。 ・実施時期と場所 概ね8月、10月、11月。山や川をフィールドに自然体験学習を行ったり、三九郎・まゆ玉づくり体験など文化の継承にも取り組む。	・子どもたちの生きる力を育むためには何が良い経験になるか考え、また、子どもたちに何をやってみたいかを常に問いかけて事業を行っている。 ・五感を通じてリアルな体験を提供している。 ・地区内団体の理解と協力の上、事業が実施できている。
島立地区	ゆいまーる こどもひろば	・ゆいまーるこどもひろば運営委員会 （協力：おやこクラブである。松本大学、NP0法人ボットライン信州、島立地区町会連合会、島立地区地域づくりセンター他）	・経過と目的 活動の前身であった「ゆいまーる子ども食堂」の食事提供が諸般の理由により継続困難となっていたが、子どもたちの放課後の過ごし方を豊かにしたいという思いから「ゆいまーるこどもひろば」と名称を変え、学習支援、遊びの支援、フードパントリーを行っている。 ・実施時期と場所 毎月1回、島立小学校の前にある島立公民館を会場として実施。	・大学生が子どもたちの遊び相手、宿題の学習支援を行っている。 ・NPO法人によるフードパントリーを行い、食の確保にもつなげている。
島立地区	おたすけ隊 島立 ※すでに何度か分科会テーマで扱われている	・島立地区ボランティア連絡協議会	・高齢者が生活していくうえで困りごとを、地域住民が無理なくできる範囲でお手伝いする有償生活支援サービス ・令和2年8月より開始 ・ゴミ出し（可燃、廃プラ、資源要相談）草取り、雪かき（生活に支障のある箇所） ・利用申請書を地域づくりセンター（地区生活支援員）に提出 ・協力隊員とつながり合わせ（地区生活支援員）支援する ・利用料...ゴミ出し（1回100円 2袋まで） 草取り（1時間程度）...1人につき200円 雪かき...1人につき200円 ・報償費...ゴミ出し1回200円 草取り...500円 雪かき...500円	
新村地区	新村地区の防災に関する取り組み	・あたらしの郷協議会 （安全安心部会） ・松本大学地域防災科学研究所 ・消防団 ・民生委員児童委員協議会 ・防災士 ・保育園 ・児童センター他	1. 新村地区防災計画策定 (1) 経過 R3年豪雨災害時、梓川左岸・右岸堤防の一部損壊を契機に、地区防災計画の策定を進めたもの。 (2) 目的 地域住民が自ら考え話し合いながら平時の防災活動や災害時の行動を地域の特性等を踏まえ計画に示すことにより自助・共助を推進する。 (3) 実施時期 R3～R4策定 (4) 方法 新村地区防災計画策定委員会を発足し検討・策定 2. 新村地区避難所運営の見直し (1) 経過 新村地区防災計画策定に伴い、松本大学地域防災科学研究所から、すでに策定済みの松本大学避難所運営マニュアルや運営委員会組織の見直しについてアドバイスを受けたことから、見直しについて取り組むこととなった。 (2) 目的 松本大学地域防災科学研究所が東日本大震災時に避難所運営を支援した経験から、現状のマニュアルや組織体制では効果的な運営が難しいとのアドバイスを受けたため、より実効性のあるものとするため、改めて運営委員会の組織及びマニュアルの見直しを図るもの。 (3) 実施時期 R3～R6 (4) 方法 現在、1回/月のペースで避難所運営見直し委員会を開催中 3. 関連事業 (1) 保育園避難訓練 (2) 児童センター夏休み防災訓練、防災講座 (3) 新村地区（高綱中学校）防災訓練	・防災はこの地区でも重要テーマとして取り上げている。 ・新村地区防災計画は、松本市地域防災計画にも位置付けられた市内35地区初の計画である。 ・地区住民と松本大学との協働が図られている。

地区名	事業名（活動名）	実施主体	取組概要	特記事項
新村地区	こどもの居場所、こども食堂 （笑和はうす、寺子屋、信州みんなの食堂）	・笑和はうす （協力：こども福祉課、ホットライン/信州他） ・寺子屋 （主催：松本大学若駒会） ・信州みんなの食堂 （協力：こども福祉課、ホットライン/信州他）	・笑和はうす こどもの居場所づくり・食事提供、第2土曜日・公民館 ・寺子屋 こどもの居場所づくり、月末日曜日、公民館 ・信州みんなの食堂 こどもの居場所づくり・こども食堂、毎週水曜・旧レストラン アーダンテ	・当初は、それぞれの団体が個別に学習支援やレクリエーション、食事の提供に取り組みていたが、現在は相互に情報共有や連携を深めお互いに支援しあうことができるようになってきている。
神林地区	出張サロンin町内公民館	・神林地区まちづくり協議会	・全7回の町内公民館で開催。 ・職員によるようす相談会（出張スマホ教室、健康・介護・困りごと相談） ・移動販売（戸部商店、JA神林支所、にじいろ工房）	・身近な場所での買い物や、気象に集まり話せる（相談できる）場づくり
芳川地区	芳川地域づくり協議会	・芳川地域づくり協議会	・協議会発足から8年目、活動の振り返り組織の見直しを検討 ・事業実施を主とした組織から、地域課題の共有、視点・知恵の出し合いを主とし、実践は各団体の現場とする ・令和4年度 協議会組織見直し 臨時総会において規約等改正 ・令和5年度 情報提供、課題の共有、意見交換のできる場づくり （運営委員会 年1回→毎月開催）各部会がイベント開催だけを目的としない体制づくり	・芳川地域づくり協議会（ゆるやかな協議体）を地区内団体が繋がるための「ハブ」に ・地域住民主体の地域づくり ・各団体が地域の中でいきいきと活動でき、存在を認められる環境へ
芳川地区	芳川地域づくり協力隊 （モデル地区重点課題事業）	・芳川いきいきプロジェクト （芳川地域づくり協力隊）	・地区重点課題「若い世代の地域参加促進」を目的とし発足された団体「芳川地域づくり協力隊」の中で課題検討チーム「芳川いきいきプロジェクト」ができ、若い世代からの意見の出し合い実施 ・若い世代の視点により、「気軽」に参加できるイベントの提案、実施 ・「芳川まるっと青空市」（マルジェ）は、定期定置開催ではなく各町会での開催を企画し効果を検証 ・全4回（4町会）開催により、地区内で認知され次回の開催を期待する声も聞かれるようになる。 ・令和5年でモデル地区最終年、地域の人の交流に効果が見られた活動を次年度以降にも生かすため、「芳川防災フェスタ」「芳川健康フェスタ」それぞれと「芳川まるっと青空市」を同時開催 ・若い世代の参加に効果が見られたが、継続可能か協議を行う。	・若い世代が求める「気軽さ」に視点を置いた企画 ・「こども」を真ん中にした企画
寿地区	寿地区・福祉の文化祭	・令和5年度福祉の文化祭実行委員会 （構成：寿地区福祉ひろば事業推進協議会、寿地区町会連合会、寿地区民生児童委員協議会、寿地区地域づくり協議会（福祉部会）、寿小学校、寿地区高齢者・障がい者施設（8施設）、寿地区地域づくりセンター（出張所、公民館、福祉ひろば））	1 経過 ・寿地区文化祭は、今年で46回目の開催（55から） ・福祉ひろばの開所（H10）、民間の障がい者就労施設の開所（H11）により、ひろば事業への障がいのある方の参加、文化祭参加の要望あり ・平成24年に初めて地区文化祭の前日に開催し、障がいのある方が文化祭に参加 ・今年12回目を数え、コロナ前は、寿体育館で一堂に会し直接交流 ・令和3、4年は、間接交流事業に切り替えて福祉の絆作品展示・交換を開催 2 目的 誰もがくらしやすい街づくりを進めていくため、寿地区の皆さんや福祉に関わる方々が一堂に会し、高齢者や障がいのある皆さんと住民や子どもたちが互いに交流を深め、お互いを知るきっかけとします。また交流を重ねることで、互いに足りないものを補い支え合える「お互いさま」の心を地区全体で育んでいくことを目指すものです。 3 実施時期と会場 ・福祉の絆作品展示・交換の開催 ・寿小学校での展示（8施設・団体の作品を展示）：9月中 ・施設・団体での展示（寿小学校の8クラス作品を展示）：10月中 ・福祉の交流・演奏会は今回初めて企画し、4施設が施設紹介等のブース出展と楽団ケ・セラの演奏会に187名の参加がありました。 4 方法等 ・実行委員会を3回開催し、話し合いを重ね準備しました。 ・福祉の絆作品展示・交換はコロナ禍対策として令和3年から企画し直接交流ができない中、間接交流を進め今回で3回目を数えます。寿小学校2～4学年の8クラスと8施設が作品を交換展示 ・福祉の交流・演奏会は今回初めて企画し、4施設が施設紹介等のブース出展と楽団ケ・セラの演奏会に187名の参加がありました。	・他地区では、地区文化祭とひろば祭りが開催されているが、寿地区では高齢者・障がいのある方と地域住民、小中学生が参加交流できる事業を開催している。 ・民間施設の積極的な参加協力

地区名	事業名（活動名）	実施主体	取組概要	特記事項
寿台地区	寿台ハッピー食堂	・寿台町会連合会（実施主体） ・寿台児童館（協力団体）	・2016年3月より事業開始 ・食事を通して、「生き生き力をつける」「作ってくれた人に感謝できる」「食べ物を大切にす る」そして地域の人たちとの交流により、「地域全体で子育てを応援する」という目的で活動 している。 ・主に寿台児童館にて、月2回不定期で行っている。	・調理学習、生活体験（味噌作り、しめ縄作り、松本七タづくり） ・フードロス、フードドライブ学習、学習支援などを行っている。
岡田地区	暮らしいろいろ 岡田マーケティング	・岡田で楽しむ！実行委員会（借大生） ・岡田地区地域づくりセンター ・岡田公民館 ・岡田地区福祉ひろば ・地域づくり課（ユースサポート担当）	・令和5年度地域自治支援交付金提案事業の一つ ・目的：岡田での暮らしや人とのつながり、新しい出会いを楽しめる空間をつくるもの ・内容：岡田地区住民を主体とした出店者による販売、ワークショップなどを行うもの ・実施時期：令和5年11月18日（土）午前10時～午後3時 ・会場：岡田公民館及び岡田公民館駐車場	・大学生による地域活性化につながる事業である。 ・大学生と地域づくりセンター等との協働事業である。
里山辺地区	地域住民の繋がりづくり	・つながろう会（有志団体） 協力：里山辺地区まちづくり協議会、東部地域包括支援 センター、 里山辺地区地域づくりセンター（地区生活支援員）	○コロナ禍における高齢者の引きこもりや外出控えの対策 ○住民の「顔がみえ 心つながる 里山辺」を目指して取組み ・「ふれあいベンチ」の製作 散歩途中の休憩・交流の場になるよう手作りベンチを製作して設置。 ※設置場所：針塚古墳、八坂神社、薄雲神社、地区公民館等 ・「書空サロン」 とカフェエールの開催 地区住民が気軽に立ち寄れる場として無料のコーヒートとお茶菓子を用意し希望の場所へ出張し てカフェを開催。さとカフェで使用するテーパールや紙コップを入れるカップホルダーもメン バーが手作り。 ・つながろう会メンバー自身が楽しみ交流できる事業を企画開催小グループに分けたメンバー 内で企画し実行する。 ※今年度は、「安曇野めぐり」「地区内施設視察研修」「思い出のレコードコンサート」「そ ば打ち体験」を実施予定 ・その他、ふれあい会食会のプレゼント作り、人材育成講座の開催	・地区生活支援員や包括支援センター職員による生活支援体制整備の一環として住民と 協力して立ち上げたグループであるが、リーダー等を決めず、活動は自由で、緩やかな 有志グループとして活動している。 ⇒その分、地区生活支援員の関わりが大きくなる。 ・自分達も楽しめる活動をするのがモットー。
内田地区	内田ササラ祭り・内田地区大運動会	・内田ササラ祭り実行委員会 ・内田地区大運動会	・同行事とも新型コロナウイルスおよび天候不順により4年ぶりの開催となった。	・役員が改選され、実行委員会のメンバーの中に、同行事に今まで参加したことがない という役員が多くなった。役員になって初めて地区のことを知る良い機会になったと 思う。 ・役員になってみて地区内、町会内に対して新たな発見があったと思う。 ・運動会の選手選考するにあたり、町会間で日ごろからの付き合いの状況に差が出てき た。コミュニケーション不足と思われる。
松原地区	松原地区町会対抗ウルトラゲーム大会	・ウルトラゲーム大会実行委員会	・新型コロナウイルス感染症予防のため、4年ぶりの開催となった。 ・運動会の参加者が減少する中で、ウルトラ〇×クイズ、ウルトラジャンケンなど住民が参加 しやすいゲームにシフトすることにより、事業の継続に結び付けている。	・スポーツ協会主催から町会連合会主催に運営が変更され、実行委員会のメンバーと なった役員も前役員からの引き継ぎもなく、苦労の上、開催に運びつけた。 ・大会を通して、地区住民の交流の輪を一層大きく広げることができた。
松原地区	ひろばを支える会	・ひろばを支える会	・ひろばの事業を行うときのサポート	・男性会員が多く、協力体制が整っている。
四賀地区	四賀「おいしい里山」計画	・のらどこ（代表 織田倉 悠）	・移住し、地元の人との関わりの中で気づいた四賀の里山の価値を維持していくために実施 ・交付金の対象期間は、令和5年8月1日～令和6年3月31日 ・五常地区にある店舗、移動販売、イベント出店等 ・四賀地区の農産物の良さを体感してもらうための惣菜、加工食品の製造・販売（交付金は、 必要な厨房用品の購入に充当）	・移住者の関点から四賀地区の魅力「里山の恵み」に注目し、その良さを 気軽に感じられるよう、また、付加価値を付けられる惣菜・加工品製造・販売に取り組 んだ点（自身は非農家） ・令和5年度新規の地域自治支援交付金採択事業
四賀地区	（仮称）四賀地区未来会議	・四賀地区づくりセンター ・四賀地区地域づくり協議会	・昨年度実施した（仮称）若手未来会議を発展的に解消し、地域の良き、魅力を更につめ直し、 持続可能な地域とするために、地域にあった地域づくりの取り組みを具体化する目的で開催 ・令和5年9月から月1回のペースで開催（令和6年3月までの予定） ・ワークショップや話し合い等を通じて、具体的な取り組みについて検討する。	・強化モデル事業として四賀地区独自で行っている事業 ・従来の在住者と移住者が交流しながら進んでいるため、新たな気づき、アイデア 等からの化学反応に期待している。

地区名	事業名（活動名）	実施主体	取組概要	特記事項
梓川地区	梓川地区 出張どこでもえんがわ	・梓川地区地域づくりセンター ・梓川地区社協	・地域福祉プロジェクト会議で、コロナ禍をきっかけとして、地域の通いの場などの集まりがなくなってきた町会があるという話を聞く。 ・市民タイムス記事で松南地区の出張どこでもえんがわを知り、梓川地区でも出前ふれ健、集いの場等がない町会に対して、身近な場所が集まれる機会を作ってみることになる。 ・8月に1町会で実施、10月に他の1町会で実施予定	
梓川地区	福祉ひろば事業 (出前ふれあい健康教室)	・氷室第2町会	・目的：各町会での健康増進とコミュニティ強化の事業 ・実施時期：令和5年7月27日 ・場所：「1さんほみら」 ・方法：エルダーを使った体操、腹トレ、体サボによる体操 ・参加人員：町会員2名（内容が良いのに参加者が少なく残念であった。）	・今年度より健康づくり推進員が廃止されたことにより、地区で先頭に立って周知、まとめ役となる役員が無くなる事態となった。その代役として健康づくり連絡員を設けてはいるが、他組織役員との兼務となっているため、本事業の内容が細かく伝わっていない。また、組織間の連携が取れていないため、地域住民に本事業の開催内容が周知徹底されないことが課題となっている。 *工夫の一案 案内文書（参加申込書添付）を地区住民へ配付し、この事業内容を周知するとともに参加を促すようにする。（参加人数の把握ができ、準備作業に役立つ）
安曇地区	まつもとお山ですくすく子育てサロン	・豊数すもも荘 ・安曇公民館	(1) 経過・目的 ア 地域の人間関係の希薄化等による子育て中の親（特に母親）の育児への不安感や負担感の増大、育児の孤立化が、少子化の背景の一つと言われている。 イ 子どもが幼稚園・小学校に入ると子どもを通じた親同士の交流により、地域の様々な情報が得られるようになるが、それ以前の子どもが0～3歳くらいの子育て期間では、社会全体で子どもの数が減っていく中、同年代の子どもを周りで探すことも難しい。 ウ そんな中、中山間地域で、子育て支援に係る活動をしている団体と共催することによって、子育て中の親子が、気軽に集える場があることを認識してもらうことを狙い、開催するもの。 (2) 実施時期 令和5年6月を初回とし、年4回（6、10、12、3月）に実施 (3) 場所 乗鞍すもも荘及び奈川文化センター夢の森等 (4) 方法 乗鞍高原の豊かな自然の中で自然保育を实践している「のりくら自然保育 木のこ」を中心とした講師をお迎えし、外遊び、絵本の読み聞かせ、ソーイング、消しゴムハンコ作り等を行なう。	(1) 官民協働の取り組みであること (2) 令和5年度に「長野県移住推進モデル地区」に認定された大野川区での取り組みであること (3) 実施の頻度、参加者からのアンケートを基に、企画内容及び実施場所等、柔軟に対応していること
奈川地区	奈川DAYをつくろう（R5年度）	・奈川えんがわプロジェクト	・信州大学生有志が令和3年に活動をはじめ、今年で3年目の取組み ・奈川に住んでいる人の暮らしが少しでも楽しく充実したものになるにはどうすればよいかをテーマに、学生の視点で、奈川の魅力を発信するとともに、地域の活性化やまちづくりに取り組む。 ・奈川地区の子どものための1日を企画。子どもたちの楽しみに加えて地域の大人や大学生が交流し、奈川の魅力を再発見する機会をつくる。 ・活動場所は奈川地区全域 ・活動期間：令和5年5月から令和6年3月	・地域や行政と連携して、活動を展開していること。 ・拠点（市営住宅）があることで、地域と深くかかわることができている。 ・活動が浸透しつつあり、地域住民に受け入れられ認められている。 ・新たなメンバーを募り、地域と学生の協働マニュアルを作るなど、メンバーの入れ替わりがあっても活動を継続する意図がある。
奈川地区	ながわ青空マルシェ&マーケット	・ながわ青空マルシェ&マーケット実行委員会	・地域のワークショップで「マルシェをやりたい」メンバーがチームをつくり、主体的にイベントを企画した。 ・夏場のスキームの活用を図り、地区内外に奈川の魅力を発信しながら、大勢の人が交流する場づくりをして、地域の元氣と賑わいを創出した。 ・開催日：令和5年8月20日 ・場所：松本市奈川野妻峠スキー場 ・来場者数：延べ300人（スタッフ・出店者等含む）	・持続可能な奈川地区推進協議会の取組みから生まれた、住民主体の新たな活動であること。 ・ボランティアの参加・協力を得て、人と人のつながりでイベントを成功させることができた。 ・初回としては盛会であったが次回以降に課題に課題と期待がある。

地区名	事業名（活動名）	実施主体	取組概要	特記事項
奈川地区	持続可能な奈川地区推進事業	・持続可能な奈川地区推進協議会	・少子高齢化と人口減少が著しい奈川地区において、将来にわたって奈川地区が持続可能な地域となるために、令和3年9月に「持続可能な奈川地区推進協議会」を設立し、地域住民をはじめ、関係団体や行政、専門家などが、様々な意見交換や調査、ワークショップなどを経て、令和5年8月に知地域づくりの基本姿勢と具体的な行動を示した「持続可能な奈川地区推進計画」を策定した。 ・令和4年11月から地域でのワークショップが始まり、住民主体の活動を生み出す取組みがスタートした。令和5年8月にワークショップから生まれた企画（イベント）を実施した。 ・推進計画を基盤として、引き続き、課題解決に向けた取組みを行ない、住民主体の活動を生み出し支援するとともに、様々な取組みをコーディネートする人材の発掘と育成を行う。	・地域住民が主体となりながら、地域外の人たちや行政・関係団体など、多くの主体の参画と協働で推進計画の実現を目指している ・市内34地区に先駆けて、地域づくり推進のための体制をつくり取組みを進めている。

未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い
－資 料 集－

編 集：「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会」
発 行：「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い実行委員会」
発行日：令和6年8月1日